

---

# 真ネギま マギカZ

沈没船長

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真ネギま マギカZ

### 【Nコード】

N4745X

### 【作者名】

沈没船長

### 【あらすじ】

主人公が目が覚めると目の前には金色のオッサンが…  
そこから始まるネギまの物語！

貰った力はママさんの魔法とマジンガーシリーズの力、ブロッケン伯爵のボディ、そして機械獣軍団！

現在、麻帆良学園編！

主人公の力は紅き翼くらいです。

初投稿の駄作ですがよろしくお願ひします

## プロローグ

「やあ、起きたか」

目が覚めてみるとそこは何もない場所で目の前には全身金色の鎧を着た変なオッサンがいた。

「えっ……と？ココはいつたい、そしてあなたは??」

「ふむ、混乱しているようだね。まあ、無理もないな。端的に言おうココは神の座そして君には今からある世界に私が用意した体に転生してもらおう。そのために君をココに呼び出したのだ。」

えっ！これっていわゆる転生物ってことか?! てことはこのオッサンに殺されてそのお詫びってことか。

「何か勘違いしているようだが、君を私は殺してはいないぞ。そもそも管轄が違うからな。」

「え?じゃあ何故、ワタシはここにいますか??」

「君が選ばれたのは、たまたま私の目に留まって見込みがありそうだったからだ。」

選ばれた?何か生前に神に選ばれるようなことってしてたっけ? ごくごく普通の日本人としてしか生きてなかったはずだけどなあ…

……

「選んだといってもそこまで厳選したものでもない、目に留まった

ほとんどがそつちだな理由は」

大雑把な……それともそんなものかな神にとっては。でもなんで転生なんてさせるんだ？

「さて、何故転生させるかについてなのだが言ってしまうえば私がやり残した事を達成してもらったためだ。」

「え！それってあなたの尻拭いをしろってことか！！」

やば……思わず口に出してしまった。でも、神が遣り残した事を達成って人間にできることなのか……って思ったからしょうがないじゃないか！

「できることなら私が決着をつけたいのだが、もはやその世界に神が光臨し力を振るうことはできないからな……。無論ただ転生させるのではなく私の分体と言ってもいいような体を用意したし、いくらかサポートはするつもりだ。」

むう、それなら良いかなあ。転生者無双つてもできそうだしねWもつそんな年でもなかったけど男子たるもの何時までも少年の心はあるからね！

「もっとも、君がその力を振るうに価するかは見極める必要があるから最初から強力な体をあげるわけにはいかないがね。」

ぐ……、そんなに甘くはないか。あれ？でも、その言い方だと体がいくつかあるような？？

「じゃあ、転生先はどこですか？あと、遣り残したことって……」

「転生先は君の世界で言う”ネギま”の世界だ。もっとも厳密には違うがね。それと遣り残したことは、言ってみれば魔王退治かね。そっちは君が真にできると確信したときにでも言おう。」

“ネギま”かあ…、漫画は途中までは読んでいたけどどうだったかなあ。それより魔王退治って…、それっぽいのがいたはずだからそれをたおせば良いのか？

「さて、これ以上は転生した世界に言っで自分で確認してくれ。あまり長く話していてもしょうがないからな」

む、いよいよ転生かあ、どんな体なんだろうなあ。

それにしてもこのオッサン誰だ？見たことが有る気がするんだけどこのオッサンも漫画とかでいたのか…。金色の鎧つていやアイツを思い出すけど、オッサンじゃないし神でもないしそもそも嫌つてたはずだし。

聞いてみるか本人がいることだし。……怒って天罰って事はないよな？

「では、あの世界へ君をとばそう。最後に何か質問はあるかな？」

ちょうどいい、聞こう！ちょっと怖いけど…。

「では、あなたの名前は？失礼なのは承知してますが思い出せなくて」

質問を終えたとたん身体が光に包まれた、おそらく転生する

んだらう。そして、にやりと笑っていつこつ答えてくれない神様。正直かなり怖いんですけど。

そして、顔まで光に包まれたときやっとなんか答えが聞こえた。

「ゼウスだ」

全身金色の鎧に”ゼウス”……もしかして、マジンガーに出てきたゼウスか！！何故ネギまでマジンガーのキャラが！

疑問は解決したが新たな疑問と不安が出てきたところで私の意識は途切れた。

## プロローグ（後書き）

初投稿です。色々と問題が多いですが完結できるようにがんばりま  
す><

### 次回予告

「転生した主人公、そして神が与えたその体は!!！」

次回 真ネギま マギカZ

”ファンの人ごめんなさい”

乞うご期待！

この次回予告は今後続けるかは未定デスw

## ファンの人ごめんなさい(前書き)

タイトルの理由は内容を読んでもみるとわかりますw

あと、”彼女”のファンには不快に思う表現が入ってしまいましたが  
ご了承を><

それとまどマギのネタバレを含みますのでご注意を^^;



## フアンの人ごめんなさい

目が覚めてみるとそこは、どこかの遺跡の様な部屋だった。壁石造りで手入れがされているような形跡はなかった、唯一火でも電気でもない不思議な光を発する光球が浮いていて周囲を明るく照らしていた。

「どうやら、無事に転生できたようね。でも、まさかあのゼウスだったなんて、これからどうなるのかしら？」

ほっとしてつぶやいて自分の口調がおかしなことに気がついた。私は生前はごく普通の日本男子だった、間違ってもオネイではない。どういふ事だと、手を口に持っていこうとして何かにぶつかつた。何かと思いい下を見てみると………そこには立派な胸があつた（ちなみに服は着ていました。）

大混乱におちいつて色々確認（なにを？色々だよ！）していると側の机のようになっていゝ場所に一枚の淡い光を放っている紙に気がついた。

手にとって見ると文字は見たことの無いものであつたが内容は理解できるといつた不思議なものであつた。

<これを見ているという事は、無事に転生できたようだな。今頃さぞ驚いているだろう。>

ええ、これ以上ないってほど驚いています。

<その体がある世界でみつけて、回収したものだ。ちょうど分体に使える素体が欲しかったので利用したのだ。口調などは身体が補正してくれるから問題ないぞ>

でもなんで、男の私に女の体を…補正するなら性別を変えてほしかった。あのゼウスだから兜甲児か、剣鉄也と思ったんだけどなあ。

<なぜ、その体を選んだかについてなんだがな。その世界とその平行世界をのぞいてたときに彼女を不憫に思ってしまったな。>

神様でもそう思うことってあるんだなあ。あ、でもあのゼウスなら当然なのかな、まさにスーパー系の主人公って性格だったし。神話のほうは怪しいけどね……

<事故に遭った時にろくでもない者に引っかけたな、多くの世界で戦って死ぬなどしていたのだが。>

ふむ、世の中ろくでもないのがいるなあ

<そこは問題ない、本人も納得していたからな。>

あ、良いんだ…。じゃあ、なにが？

<問題は人々のためにと戦っていた彼女の思いを踏みにじることを戦いに引き込んだ者にされていたことなのだ！>

なるほど、彼が怒りそうなことだなあ、でもなんでそれとこの身体がつながるんだ？

<それ自体はその世界で新たに生まれた神が解決してくれたことなのだが、私自身がどうにも納得がいかなくてな。せめて身体だけでもとおもい、その世界のうち一つからその者の体を回収して改造を施したわけだ。>

それって自己満足な気も……、それとも何か思うところでもあつてせめてものつてこのなのか。で、この身体って元の持ち主は誰なんだ？とりあえず戦闘はできるようだけど。鏡が無いからわからないからなあ。

<さて、その身体の元の持ち主の名前だが名を「巴マミ」という。これからはその名を名のるといい、彼女の無念を少しでも晴らしてやってくれ。>

マミさんか！ああ、確かに悪いやつに引っかけたって真実知って打ちのめされちゃったなあ……、でもなんでマミさん？まあ、いかそこは覗いてたのがあの世界なら誰になつたって女になつてるんだし。

<さて、君が使える能力だが彼女が使っていたものはすべて使えるぞ。同じ身体なのだからな。>

ふむふむ、って事はマスケット一斉斉射とかもできるのか。

<細かい能力は後で表示しよう>

今更だがこの紙、表示される文字が変わっていつてるそれでいて前の内容も問題なく見れたりする。魔法版電子ブック？

<もつとも、これだけだと本当に倒してもらいたい者には力不足だろう。>

このゼウスの相手ってもしかして……”アイツ”？違ってくれて  
いるといいなあ……………。

<そこで、改造と私の力を付与したのだ。光子力といえはわかるかな？>

光子力はいいとして改造？

<君にわかりやすくいうとマジンガー化したってことだ、鍛えれば成長していくようにしてあるぞ。今の力はZくらいを思ってくれるといい。>

おおお！嬉しいような、なんというか。これも詳しくは後でかな  
でも、これってほぼチートじゃね？超合金Z系なら魔法なんてほと  
んど効かないだろうし。

<さらに私がそつちにいけないからサポート役も今造っている、ま  
たアーティファクトだったかな？そつちの世界で使えるモノも準備  
している。これらは君をこれから見極めたうえで順次与えよう。>

つまりサボらずしっかり修行しろってことか？

<最後に大事なことを伝えよう、身体についてだ>

ん？今までもそうだったんじゃない。マジンガー化してるならアレも

撃てるんだろっし。

<その身体は損傷が酷くてな、君のためにもっと状態がいいものや傷を完全に治しても良かったのだが。あの世界はすでに書き換わってしまっただけからな、前の世界での彼女の無念を晴らすにはその身体しかなくまた傷を完全に癒すことは戦士として本人の了承無しにしたりは無かったのだな。>

ん〜、やっぱり自分が戦士って事でいろいろ思うところがあったってことなのか。その割りに改造してたりすれけど……。でも、傷ってどんなのだ？SJが無事なら大概の傷どうにかなったはずだし。

<その傷だが頭を両手で持ってくれ。ああ、紙は空間に貼り付けることができるぞ。>

あ、ホントだ便利だなあ〜。これの作り方教えてくれないかな、それが欲しい。っと、それは置いておいて。頭を両手で持って、でもなんでこんなこと？

<そのまま、力を入れて上に持ち上げてくれ。>

そのまま上に。

スポン！



「さて、まずはココを出て魔法世界を見て回りましょう。いろいろ不安はあるけど楽しまなきゃ、もったいないのもね。まずは町を探さない」と

と決意表明もこめてつぶやき私は外に向かって歩き出した。

## ファンの人ごめんなさい（後書き）

マミさんファンの皆様ごめんなさい！私は彼女は嫌いじゃありません。むしろ好きなのはです。じゃあ何故こんなことになったかというところ……、自分でもわかりませんw

あるときふと思いついて構想を練ってしまったってwこの作品は基本ギャグとダイナミックっぽい政治のあれやこれやを置いておく感じで進めたいと思います。なので後々原作とはまったく違うことになると思います。

ちなみに時系列は大戦前です。

喋りと心の声の口調が一致してませんが、彼女（私がw）なれてないで追々なれていくと思います。

さあて、ノリで始めたけどどうなるか。

### 次回予告

「魔法世界に一步踏み出した主人公改めバミ、彼女は早速力試しをしてみることにしたその結果は……」

次回 真ネギま マギ力Z

” 現実には甘くない ”  
がんばります



## 設定・能力（前書き）

主人公の能力です

あくまでも現在ののって事なので今後修行で変わっていきます

## 設定・能力

巴マミ（主人公）

今作の主人公、前世の名前は考えてないので山田太郎とでもW  
ゼウスが3話のマミさんの身体を回収改造を施した、ちなみにSJ  
も再現、皮膚強度も超合金Z系の同じくらいの防御力です。でも、  
触ると普通に暖かくぶにぶにの不思議肌w

保有能力

まどマギでマミさんが使っていた魔法

・マスケット召喚

どこからともかくマスケットを召喚する。単発マスケットであれば  
どんなもののようなサイズ、材質、形状でも可能だが指定しないと  
無意識下で思っているサイズ、材質、形状で召喚される。（現在は  
銃身が鉄 弾が球状の鉛 サイズは普通）

・伸縮自在のリボン

伸縮自在で相手の動きを封じてよし、クッション・足場にしてよし  
と使い勝手は抜群。

（現在はあまり使いこなせてない）

Zの能力

ミサイル系以外は使えます。

真仕様

人間とは違った武器だらけなのでかなり戸惑っている

ブロッケン伯爵の能力w

頭部と胴体の分離飛行

胴体のみ分身（増産？）

## 衣装

マミさんの魔法少女時の衣装とブロッケンの独軍コス进行魔法で呼び出して着ることが可能w

イメージとしてパクティオーのコスプレ機能とだいたい同じ。

説明が無いときはマミさんの衣装と想ってくれれば良いです。転生したときもそれを着てます。

汚れ、破損を自動で修復する洗濯・修理要らずの便利服w

設定・能力（後書き）

以上が現在の能力です

現実には甘くない

あの場所を出て、それなりの月日がたち今私はある都市にいます。

え？飛ばしすぎ？今からなにがあったのか話しますって。

その間私は、自分の身体のパフォーマンスを試してみたりしてました。それで分かったことはこの身体はなかなか高性能です。マジンガーとしてのパワーや装甲、マミさんの使い勝手のいい魔法のおかげもあって、そこらの野党や魔獣より十分強かったですから。

（野党が放ってきた魔法の矢や犬くらいの魔獣の噛み付きをくらってもびくともしなかったものね。マジンガーに備わっている武装も強力だったし、マミさんの魔法も使い勝手が良かったなあ）

酸を含む突風を起こして相手を溶かす ルストハリケーン

（口から出すから気分的にちょっと使いにくいのよねえ。でも、酸無しの風も起こせるのはいい発見だったわね。）

相手を凍らせる低温ビーム 冷凍光線

（まさか髪の毛の先端から出るなんて……）

マジンガーといえばこれやっぱり付いていた ロケットパンチ

（使いやすいし、いろいろできそうではあるんだけど。やっぱり気

分的に、ね。自分の腕が飛んでいくっていうのは、慣れておかないと。)

超高温の熱戦を放つ　ブレストファイヤー

(リボンが自動的にあの形になって発射されたのは驚いたわね。)

高密度のエネルギーを放ち敵を消し去る。　光子カビーム

(ものすごい威力だったけど、何で真仕様?)

といった具合にマジンガーの武装はどれも高威力だった事がわかったの。

あと、リボンは想像通りの物だったけどマスケット召喚のほうは銃や銃弾の材質、大きさを指定して呼び出すとそのとおりのものが出てくるのには驚いたなあ。超合金Zの弾ってすごかったわね。

(でも、このときのもう少し冷静に能力の確認と慎重な行動を心がけてればあんな事にはならなかったのに…)

そう、魔法の矢をもともしない防御力と高い攻撃力を確認したことで私は調子に乗ってしまったのである。

そして、強い竜が近くにいると聞き炎くらいなら大丈夫だろうと根拠の無い自身を元に単身、その竜の巣に赴いてしまった。

そうまさに、「もう何も怖くない」状態で。

そこで現実を知ったのだけど、それにまさか彼に会えるなんてね

-----  
-----  
-----  
(数ヶ月前)

皆さんお元気でしょうか？先日転生というものを経験したバマミです。

私は今、とある山の竜の巣というところに竜討伐のためにいます。そして現在その竜と戦闘中なのですが、お腹に大穴が開き血が噴出してるといふ大ピンチな状態です。痛みは不思議なほど無いのですが、ヤバイ事には変わりありません。

何故こうなったかというともう話した気もするのですが、チート能力ゲットでヒヤッホイ！と思って突撃してこうなったわけなので。よく考えればマジンガーも皇帝以外は結構ぼろぼろになったりしてましたねえ。並大抵の攻撃は効かないけど並以上は効くってことなのね。避けようにも前世でスポーツマンってわけでもなかった。のでまともにくらってしまい現在の状況です。

攻撃力はこの竜にも十分聞きそうなのですが……、当たりません。考えてみれば当然ですよ、そんな何かを狙って撃つなんて経験ないですし。

ならば数うちや当たるとマスケットを大量召喚してみたのですが効きません。

後で気づいた事なのですがこのとき私は超合金Z製の弾丸を放っていたつもりなんです。が混乱していて材質を指定してなく、無意識で銃の弾といえば鉛って思っていたので鉛の玉を発射していたようです。効く訳がありません。

現実には甘くないって事ですね。

などと現実逃避をしているうちに竜がものすごい力をためています。

(死んだかなあ……、まさかもう終わりだなんて)

と諦めかけたとき

「ラカン！インパクトオーーーーーー！！！」

大音声の掛け声とすさまじい力がこもった衝撃が竜を襲い吹き飛ばしてしまいました。

目の前で起こったことに啞然としていると。

「おい！嬢ちゃん大丈夫か！って、そんな状態じゃ大丈夫じゃねえか。」

「あの…、えっと……」

「言いてえ事や聞きててえことはわんさかあるが、今は逃げるぞ。嬢ちゃんを庇いながらだとちょっと骨がおれるからな。」



と言って混乱している私を担ぎ上げて一目散に離脱していった。

しばらく走って竜の巣のあった山から十分離れたところで男は私をおろしました。

「さてと、何故あんな事をしていたか聞きてえが、まずは傷をふさがないとな。どれ見せてみる。」

と言って、おなかを覗き込んできたのですが。

「ん？傷が無い？？どういうことだ、確かにどつてつぱらに大穴が開いていたはずなんだが。それに嬢ちゃんもあんな傷を負ってた割りに痛がってねえな。」

「え？あ、本当ですね。痛みについてもほとんど感じなかったですね。」

あの時は混乱していたからと思っただけど、確かに痛みでどうにかなるって感覚じゃなかったなあ。それになんで傷がもう癒えてるんだ？？

「ふむ、嬢ちゃんみたいなのベツピンに傷がのこらねえのは良い事だがその様子だと自分でも分かってないみたいだな。なんで、あんなところにいたのかも気になるし話してみる。俺様が近くを通らなかつたら死んでたぞ。」

少し迷ったが助けてもらった恩もあるのだし転生のところをばかして、力を貰ったのだが調子に乗って突撃してしまったことなどを話した。

「なるほどなるほど、つまり嬢ちゃんはバカって事か！はあはあははは！そんな単純なやつがいるんだなあw」

「な！」

確かにそうだけでもう少し言い方ってものがあるきが……………。

「ははははは…、ひい腹いてえ。ほれ、ちょっと俺様にパンチしてみろ。」

「え”、そんな趣味の人なんですか…」

「ちげえよ！嬢ちゃんがどれくらいできるのかはかってやるんだよ。」

「え…、でも」

「嬢ちゃんの細腕でどうこう出来るほど俺様は弱くねえって、それに視るより感じるほうが良く判るってもんよ。」

「そ、それじゃあ。はあ！」

とできるだけ力強く打ち込んでみた。アレだけの攻撃を放てるんだしたぶん大丈夫だよね。それに確か原作キャラの気がするし。

ドゴンー！

ととても少女が放ち人体に当たったとは思えない音が周囲に響いた。

「ふむ、なるほど。あの竜に挑もつって気が起きるくらい舞い上がるだけの力はあるって事か。……………げふう！」

と、受けて評価したとたん血を吐きながら倒れた

「きゃあああ！ちよつとだ、大丈夫なんですかあ！」

「ふ。思いのほかパワーがあつたが問題ねえ！俺様からすればこんな傷かすり傷でもねえ！」

のわりには深刻そうな気も。

「さて、嬢ちゃんの力なんだがパワーだけをいえば確かにあの竜に挑んでも問題ねえ。あの竜も結構な年月を生きている強力なやつなんだが、嬢ちゃんのパンチは十分なものがあつたからな。ま、俺様が本気を出せばアレぐらいいいところだけだな！」

やっぱりマジンガーの力はすごいんだなあ、そして最後のセリフは必要あるのか？

「だが、肝心のパンチの仕方もつといや細かい動きから、嬢ちゃんがまともな戦闘経験が無いってのも判つたがな。」

ただのパンチ一発でそこまでわかるんだ。事実そのとおりだったし。

「嬢ちゃんがまずする事は何よりも身体の動かし方と戦闘時の感覚を磨くことからだな。そのままだったらいつか今日と同じことになるな。」

うう、やっぱり地道に修行しないとだめかあ。でも、そんな当ても無いしなあ。ん、確かこの人って原作キャラだったよなまだ名前も聞いてないし……。

「あの、今更なのですがお名前は？私はマミ・トモエって言います。」

「お、そっぴりや俺様としたことが名乗ってなかったな。よしマミ、しっかりと聞けよ！俺様の名はジャック・ラカン！最強の男とは俺のことだ！……」

おお、やっぱりラカンだった！ならば、だめもとで聞いてみるか。

「はっははは！驚いたか、だがサインはやれねえぞ。欲しければそのむん」  
「あ、あの「ん？」」

「私を鍛えてはもらえないで「だめ」しょうか！……え」

はや！言い終える前につて。

「俺様も暇じゃねえし。ただで教えてやるほど安くないしな、そもそも救出料も……」

ぐ、そういえば金に細かいんだっ たっけ。

「どうしてもって言うんなら、胸を揉む権利をよこせ。それなら嬢ちゃんの修行にもってこいな場所の紹介とそこに行くまでの間なら基礎だけ教えてやっても良いぞ。」

ちよ！それはいくらなんでも……

-----

とその後、いろいろ騒動有ったが紹介してくれる場所が闘技場だったので賞金をいくらか渡すって事で決着が付いた。

最初は火力と防御力が飛びぬけているので同じ初心者や力が弱いものには白星をあげることができていたが。勝利を重ねていってランクが上がってくると単純な力以外で強い人たちが出てきてそこから暫くは黒星ばかりだった、今はだいぶ慣れてきているがまだまだ安定していない。

ココでの目標は勝率を7割以上にしつつ年に2回ほど開催される大きな拳闘大会で優勝することと決めた。その後は少し世界をまわってみようと思っっている。

ちなみにリングネームは”アフロダイス”にしている。本名だと後々目立ちそうだし……

＜次は続く敗北からその人気は落ちていたが、見事に振り返り咲き今や

上位陣とも戦えるまでに成長した期待の新星！アフロダイーン！！>

《-----》

あ、もう私の出番のようね。それじゃあ、これ以上の話はまた後で。

## 現実には甘くない(後書き)

ラカン登場！彼の口調とキャラってこれで大丈夫かな^^；  
いくら強力な力を貰ってと言ってもいきなり一般人が使いこなせる  
わけがないって事でw

後1, 2話くらい闘技場での話が続くかな？原作キャラは当分出て  
きません。

原作開始まで遠いなあw

### 次回予告

「闘技場で日々戦い修行するマミ。その実力やいかに！」

次回真ネギま マギカZ

”魔法世界の日々”

気長に待っててねw

## 魔法世界の日々

「さあ、始めました。片や期待の新人アフロダイン譲。片やこのクラスの1番人気のステインガー氏勝負の行方やいかに。司会は私ドラコが解説はこちらのジョニー氏が行います。」

「どうもジョニーです。」

「ジョニーさん、この戦いどうなるでしょうか？また、アフロダイン譲はこの試合に勝利したあかつきには最上級クラスに行くという噂もあるようですが。」

「そうですね。アフロダインも当初はその身体能力のみを頼りにした戦い方をしていましたが、この数ヶ月で見違えるようになってきましたからね。彼も前までのようには行かないことを承知しているでしょう。噂に関してなのですが彼女自身はどう思ってるのかはわかりませんが事実だと思いますよ。元々身体能力に関してはトップクラスのものを持っていたのですから、そこにこの数ヶ月で吸収した経験が合わさり今のランクでは不適切だ。っと運営側が判断してもしようがないくらいですからね。」

「なるほど、確かに最近の彼女の試合は「一方的だ」との声も聞こえてきていますからね。」

「ええ。このままですと双方にとって良くないですからね。ですが彼女なら最上級クラスに行ってもまた私たちを楽しませてくれると思いますよ。」

「さあ、準備が整ったようですね。試合開始の鐘が



カーーーーーーン！

鳴りました！おっと！アフロダインが仕掛けた。アレは煙幕でしょうか？」

「そのようですね。一気に接近して倒す腹積もりなのでしょう。」

「対するステインガーは上空へと舞い上がってますね。ココから魔法による遠距離攻撃をかけて征するつもりなのでしょうか？」

「おそらくそうでしょう。この二人実に対照的な戦闘スタイルをとっていますからね。」

「確かにそうですね。ステインガーは多彩な魔法を使用しての正統派魔法使いと言ってもいい戦いかに対してアフロダインはかなり変則的ではありますが接近格闘を得意としていますからね。」

「ええ、なので如何に自分の得意な距離で戦うか又はそこに相手を引きずりこむかで勝負は決まります。前まではアフロダインはそれができずポイントを取られて負けていましたからね。それにしても彼女、種族は何なのでしょう？些細なこととは判っていますが彼女の場合。」

「腕が飛んだりしますからね。資料では人間ではあるらしいのですが。」

「にわかには信じられないですね。っとどうやらアフロダインがしかけたようです。」

「あれは腕ですね。何時見ても奇妙ですね。しかもそれが4つ、それに何か糸のような物をひっばっていますね。それにしても腕が4つ？」

「彼女はリボン状の伸縮自在な魔法道具を装備してましたね。おそらくそれを持っているのでしょう。数については確か彼女は自分の分身を作れたはずですよ。その分も一緒に撃っているでしょう。」

「パンチはどうやら外れたようですね。リボンを絡ませるつもりなのでしょうか？」

「どうなのでしょう、ステインガーがそんな手に引つかかるとは思えませんね。そのステインガーもリボンの出ているところを中心に魔法を撃ち込んでいますね。彼女が何かする前に終わらせるつもりなのでしょう。」

「魔法の射手を滞空させたり軌道を工夫して時間差で絶え間なく撃ち込むように撃つてますね。おっと、詠唱に入ったようですね。」

「ステインガーは勝負に出たようですね。アフロダインの方は……、何かが飛び出しました！」

「あれは？首なし腕なしの身体？？アレでいったいなにを、それ以前に首なし??？」

「思い出しました！彼女の分身はすべて首なしになってしまいますようです。パンチを撃つたため腕もないのでしょう。」

「なるほど、しかしあれでいったいなにを？ステインガーがいる高

さの半分もとどいてないですね。また飛び出しました！」

「今度は本人のようです。腕もきちんとありますね。」

「そのようですね。おっと！先に飛んでいたほうの身体を踏み台にしてさらに跳躍した！！なるほどこのために先に行かせたのか。しかし、さすがにかわされたようですね。」

「いえ、まだ終わってません！飛んでいるパンチとリボンを利用して擬似的な空中戦をしています！」

「なんと！さすがのステインガーも詠唱をとめ迎撃に専念しようとしてますが軌道をつかめず！」

「空を飛ぶパンチは彼女のほうでコントロールできますし足場以外にもリボンを伸ばし絡ませることによって軌道を変更しているため捉えきれていないのでしょう。彼も飛行術は使えますが空中戦と言える軌道はできないようですからね」

「ああ！アフロダインに魔法の射手が直撃！！これは決まったか！？」

「いえリボンがステインガーを捕らえた！当たったことが返って視界を悪くしてしまったようです！」

「ステインガー解けない！アフロダインがそのまま突っ込んで両者纏れつつ地上に激突！！審判が確認のため走っていきます。」

「砂埃が晴れてきましたね。」

「結果は……。ステインガー気絶してしまっただようで！…よってこの試合アフロダインが勝利！！……いやあ、なかなか面白い試合でしたね。しかしこれでアフロダインは上のクラスに、ですか。」

「ええ、楽しませてもらいました。そうなりますね。このクラスで彼女と満足に戦えるものはほんの一握りになってしまえますからね。しかし彼女ならたとえ上のクラスに行っても我々を楽しませてくれるでしょう！…」

「なるほど。それでは次の試合ですね。それにしてもジョニーさんアフロダインに期待しているようなのですが、そのセリフも試合前にも言いましたし。もしかして……」

「次の試合も楽しみですね。ええ、もちろんファンクラブ会員ですよ！」

「やっぱり…、良いんですか特定の人に肩入れして。」

「なにを言う。私は公私はきっちり分けますよ！それに……」

「ふう、無事に勝てたわね。」

私は試合が終わって今は選手控え室にいる。ここは引き換え室ではあるが選手同士の交流の場でもあり、またちょっとした飲食ができるようにとおカウンターもあるので談話室と言ってもいいかもしれない。そこで私は今日の試合が終わったこともあり食事をしながらさっきの試合を思い返していた。

「このクラスでは問題なく勝てるようになってきたわね。となると次のクラスで出るための申請もした方が良いわね。」

と、独りごちていると

「てか、嬢ちゃんももっと早く上がっていたのに何で今まであのクラスにいたんだ？」

この人はココで食事を出してくれている元剣闘士で名前はライブックって人です。現役時代は無敵とも言える強さだったみたいだし、その前もどこかの国の凄腕兵士だったとかつて噂も聞きます。そんな人が何でこんな闘技場のコックをしてるのはよくわかりませんが本人も昔のことはあまり話すほうじゃないので選手の間でいろいろ噂になってます。

「前にも言いましたけど、私が剣闘士になったのは修行のためとある人に進められたからです。だから、できるだけしっかりと自分の戦い方を試したから最上クラスに行きたかったのです。」

「それは聞いたが、ちょっと慎重に行き過ぎじゃないのか？最上クラスで十分やっていける力があるのにしたのクラスにいたんじゃない？人気の方もそうだが、最悪運営側からペナルティーが出ていたぞ。」

そうなんですよね。私はここに修行のつもりで入ったわけなんで

すが、闘技場を運営してる側からすればそれだけで済まされては困るんでしょしね。

少し剣闘士と闘技場のルールを説明しますね。この剣闘士戦、魔法世界では非常に人気があるもので現代人の感覚からすると野蛮なものなのですが、決してルール無用でもないですしまして惨殺劇や殺戮劇を見せるものでもありません。魔法と言う戦闘技術があることとそれによる傷の手当が私たちの世界より遥かに簡単と言うこともあって過激になってるのであって基本的には格闘技の試合とそう大差なかったりします。ポイント制でもあるので戦い方しだいで力の差があっても勝てるようになってますからね。

ちなみに私はこれのおかげでよく黒星を付けられています……。防御力はかなりあるのでここにいる人の中級魔法くらいは耐えられるのですが最初は攻撃が当たらずにポイントを取られていて……っと私のことはいいですね。

ただ一歩間違えれば死と言う現実もあるので通常剣闘士はその力量によってランク分けされます。それによって力に差がありすぎて防御できずに死や強者が弱者を一方的にいたぶるなんて事がないようにしています。

なので試合をしていてある程度の力量があると判断されると運営から次のランクに進むように通知が来るのですが、それでも居座り続けると警告ののち強制的に最悪の場合、追放となってしまうので。観客は”闘い”を見に来てるのであって弱いものいじめなんて

誰も見ようとは思っていません。運営側はお客に来てもらわないといけないのでそのような試合をしている選手はよほど人気がない限り邪魔でしかなく、試合の正常化をするためにそのような処置をするのです。

…。  
それで私なんです、実は結構前に通知が来ているんですよ…

戦いの感覚を積むためにあまり早くに最上級クラスに行きたくはなかったのですが、先日ついに警告も来て変則的な戦い方をしてるせいもあってそれなりに人気があるため大目に見てくれたのですが、いい加減上に行かないとまずいです。

ちなみにここの最上級クラスはほぼ無制限の戦いが許可されていて力量の差は考慮されていません。使用禁止の技は闘技場を激しく損壊させるか観客席を守る結果を破るものってくらいです。それを怖がって前のクラスにいようとすると人も結構いるとか。ちなみに私を使う技でマジンガー系はルストハリケーン（酸抜き）以外が全部だめです。どれも威力がすさまじいですし、まだまだ威力調整はうまくいってません。

「だから後で最上級クラスになる申請を出そうと思っていたんですよ。」

「それがいい、俺も嬢ちゃんが追放なんて理由でこの闘技場を去るのはいやだからな。ところでその後は何か予定があるのか？話を聞いていると最上級クラスでトップを取るって事が終わりじゃなさそうだからな」

「はい。最上級クラスで7割くらいで勝てるようになって年に2回

開催されている大きな大会を優勝したら少し世界を回ってみようかと。」

「あのここの闘技場合同でやる大会か？確かにその目標なら譲ちやんのここに入ってきた目的とあうな。しかし何でココの最上級で7割なんて条件なんだ。」

「優勝だけだと物の弾みでって事もあるかもしれないのでしっかりとした目標が欲しかったので。」

「ははは。なるほどやっぱり慎重すぎる気もするがな。まあ、嬢ちやんの今の実力なら今年か来年の大会で達成できるだろう。しかし世界を回るか……」

「盗賊とかは大丈夫ですよ。」

「それは心配してない。」

「ですよねえ、剣闘士相手だとむしろ盗賊のほうが心配だし。」

「そうじゃなくて、どうもこの頃いやな噂を耳にするんな。」

「いやな噂？」

「ああ、帝国が戦争準備をしているやら連合で人間至上主義のやつが出てきたやらな。それにこの頃おかしな連中があちこちで見られるようになったみたいだからな。」

「そんな事がおかしな連中って……」



「むちゃくちゃな事をしまくっているらしい。それだけならまだしもそんな予兆がなかったのにいきなりそんなやつが集まりが結成されたり、普通だったやつがそうなったとかおかしな連中としか表現でんみたいだ。」

ん〜、今つて向こうだと何年なんたる確か原作での大戦は20年前とかつて書いてあった気もするけど。でも、この感じだと近づいてきているみたいだなあ。

「わかりました、そのときは気をつけますね。」

その後ライバックさんや周りの人たちと少し話した後、今住んでいるアパートのようなところに帰ってきた。

この後どうするかと思案しているとドアをノックする音がしてあけてみると

「やつほお〜、ママ。これから暇？暇だよね！これから一緒に買い物いこ！」

入ってきて早々人の話を聞かず連れ出そうとしているのは猫の獣人のマリーって子です。この町で働いているようで越してきた初日からこの調子であつちこつちに引張つていかれています。町に慣れることが出来たから感謝しているけど、時々こつちの都合お構いなしにいろいろしかすからなあ。1回どうやってそうなったのか知らないけど私と自分の貯金全額を私の試合に賭けるってことがあつたし。勝つて帰ってきてみると満面の笑みで飛びついてきたときは何事かと思つたけど、さすがにそれを聞いたら少し説教してしまいました。

「もう少し、相手のことも考えは方がいいわよ。私も買い物に行こうと思ってたから良いわよ。」

「やったあ！ママのご飯が食べられる！じゃあ、早くいこおいしいお店見つけたんだ。」

「はいはい、ちょっと待っててね。用意してくるから。」

「はい」

さて、それじゃあ着替えて用意をしようかな。

その後、マリーと一緒に町を見て回り彼女が見つけたというおいしい喫茶店に寄って夜ご飯の材料を買い2人で仲良く食べた後また明日と分かれました。実際はまたいろいろと振り回されたのだけど割愛ということで。

転生して調子に乗って死に掛けたけど今は十分楽しんでます。さあ、明日は昇級の申請に行こうかな。と明日のことを思い私は眠りについた。

## 魔法世界の日々（後書き）

戦闘描写ができません……。なので実況風味でw  
最上級クラスでのことや大きな大会のことも書こうかと思ったけど  
本編とあんまり関係ないからカットしてさっさと大戦にはいるっか  
な…。

### 次回予告

「無事修行を完了したマミ。彼女はその後世界を周り偶然ある出会いをした。そこでの平穏な日々しかし刻一刻と迫る暗い影」

次回 真ネギま マギカZ

「平穏な日々と不穏な気配」

カットすることになりましたw

でもちよびつとは書くかな。こっちはいろいろ重要なのでw

平穩な日々と不穩な気配（前書き）

PV2000・ユニーク500突破！

これを励みに続けていきます！

## 平穏な日々と不穏な気配

年2回開催される付近の闘技場合同での一大大会その優勝が私の当面の目的だった。

そう“だった”。今私はその大会に優勝し今後のことを記者たちに話した後、マリーとその友達、剣闘士仲間やライバックさんと大会に優勝したお祝いのパーティをしていて、さっき家に帰ってきていた。記者の人やマリーの友達で私のファンの子や剣闘士仲間は私が剣闘士を辞める事を残念がったが世界を回ることに、2度とやらないわけじゃない事を話すと再戦の誓いやずっとファンでいると言ってくれたりした。

そんなことを思い返しつつここ1週間開催されていた大会のことや今後のことを考えつつベットで横になっていた。

「ライバックさんが行ったとおり最上級にあがった年に目標を達成しちゃうなんて。勝率も概ね7割くらいだし。ゼウスが何をさせたいかはよく判らないけど少なくともマジンガーの力が要るってことよね。剣闘士のルール上で強くなるのはもう限界かな？ そうなるとそろそろ世界を回ってみようかな。まあ、今日は疲れたから詳しくはまた明日考えましょう。」

そう、思い私は眠りについた。

---

---

「ここは……………」

眠ったはずだが今私はいつか見たことがあるような何もない空間にいた。

「む、気がついたか。」

と、黄金の甲冑を着た男性　ゼウス　が声をかけてきた。

「あなたはつて事はここは……………」

「ああ、勘違いするでないぞ。今回はお前の意識だけをここに呼び出したのだ。」

よかった、また死んだのかと思った。

「そうなると何故呼ばれたんでしょう？」

「うむ、前にお前を見極めそれが済み次第アーティファクトなどを渡そうといっただろ。」

「そつえば言ってみましたね。」

「うむ。転生した直後はどうなるかと思ったがその後まじめに取り組んだようだからな。なので新たな力を渡そうと思つてな。」

おお、ネギま世界に行ったらぜひ欲しいアーティファクトそれも神様印の！

「それとお前の身体もパワーアップさせる。」

「え？やっこの身体に慣れてきたところなのに？」

マジンガーの武装ほとんど使っていないよ……………。

「私も早いとは思うのだがそうも言ってられなくてな。もう少し時間があると思っていたが奴の力がここ暫くで増してきていてな。強引ではあるが本来の身体になるためにも急ぐ必要がでてきたのだ。」

ん？本来の身体？？これってマミさんの身体を改造したものなんじゃ。

「む、話してなかったか。君の本来の身体は奴に対抗するために作ったのだが余りにも強大な力を持ってしまつてな。渡す段階になつて心配になつてな。正しく使えるのか、力におぼれて暴走しないかと。」

すいません、思いつきり暴走しました。

「そこでまず、見極めようの身体を用意しそれを与えて様子を見ようとしたのだ。もっとも次の身体も本来の身体になつたときに問題なく扱えるように力になれるための物なのだがな。だがこれも使い次第でどうにでもなつてしまうからな。」

なるほどなあ。いきなり暴走した身としてはその心配がよく判り

ます。

「なるほど、では奴とは？」

「それも今から話す。奴の名は“ハーデス”かつて私と戦い敗れた神の石柱だ。」

やっぱり、外れていて欲しかったなあ……………。

「奴と私は今後の世界のことと対立してな。何とか私が勝利し奴を封印することが出来たがもう世界にとどまり続けることは出来なくなつてな。最初は奴の身体を破壊し根城にしていた場所ごと封印し葬り去つたので大丈夫だと思つたのだが、何故だか最近あの世界で奴の気配がだんだん濃くなつてきたのだ。最初は勘違いかと思つたがあきらかに奴の気配と力を感じたのだ、私がいじぎきにいければいいのだがそれが出来ないことは前にも話したな。」

真版と大体同じ感じなのね。

「そうなるなら私はハーデスを探しつつ今まで通り修行をすればいいのですか？」

「うむ、奴の搜索も大事だが今のままではまずいからな。ただ、奴はおそらく実体を無くしていよう。そこまで甘い封印をした覚えはないからな。なので探すものは奴の意識だそれと何故今になって奴の気配が濃くなつたのかも頼む。それを何とかしないとまた復活してしまうからな。」

むむむ、結構大変だなあ。でも、結局誰かがしないといけないことだからな。ハーデスってアニメだと人類を殲滅だかしようとして



いたからなあ。逆にそんなこと選ばれた事を誇りに思ったほうが良いな。後気になるのは

「アーティファクトはどのような形で？」

「向こうの世界でのパクティオーカードの形を取らせてもらう方式も同じだ。身体は起きたら変わっている。すまぬないろい押し付けてしまって。それではまたなおぬしも覚醒へと向かっているようだ。」

「いえ大丈夫です。新たな生をもらったのですから、それに現状十分楽しめています。」

と視界が次第に薄くなってきた、目覚めてきてるんだろ。体のことや判明した敵のことは気になるがカードのことに期待して目覚めと思っていると…。

「うむ、道は険しいと思うが決して諦めるな。私はいつでも君の側にいるぞ！」

行け！マミンガー！！

「

「何ですかその名前は…！」

最後の最後までとんでもない名前と呼ばれてそれに突っ込んで目が覚めた。

「マミ+マジンガーだからってマミンガーって……。忘れまじょう、忘れれば私以外誰も知らないんだから聞くことはもう無いのだから。」

と自分に言い聞かせ。早速カードを探すために周囲を見てみると

「あ、カードはこれね。でもこの剣は？」

カードは机の上に置いてあったがその横に見慣れない剣が2本置いてあった。

「ん〜、こんなもの買った覚えがないからおそらくゼウスが送ったものなんだろうけど、あの紙を見れば書いてあるかしら？」

早速転生したときにもらった紙を出して見て見るとすっかりゼウスからのものが写っていた。

<うむ、無事に届いたようだな。その剣はグレートマジンガーが装備していたものだ。ついでに送っておいたぞ。>

あ、グレートの物なのね。確かに身体には格納できないからなあとりあえず腰に下げたおけばいいかな。

<カードのほうなのだが出来ることはアーティファクトの召喚のみだ。念話や魔力供給はこちらからは出来ないのな。>

当たり前と言えば当たり前ね。出来ても困るし、衣装チェンジは

元々あるからね。

<カードの詳しい仕様も載せて置くよう有効に使ってくれ。>

ありがとうございます。さて早速拝見っと……………

「……………なにこの絵柄……………能力もまた……………」

カードには人物が描かれている。もちろん私なのだが問題は……………。

独軍っぽいコスを着用し（まあ、問題はないわね。）

片手に何か杖のようなものを持って（これがおそらくアーティファクトなんだろうけど）

自信に満ちた表情をしている。（ここまでではそんなに变じやないわね）

そしてもう片方の腕で自信に満ちた表情をしている頭を小脇に抱えている。（何故ブロッケンポーズを！最近忘れてきたのに……………）

「絵柄の時点でもう……………、そのこのアーティファクトって……………」

本物のカードはどのようなかは分からないがこのカード基本は私が中央に配置されているんだけど、その後方を注視するとまるで最初からそうであったかのように私が多数の影を従えている絵柄に変わっている。

で、名前なのだが<鋼メタルヒースト・キングの獣の王>となっているのだが写っている影がどう見ても機械獣にしか見えない……。

どういふ事だと紙を見てみると

<上位神の意向だ……>

またか！何故身体はマジンガーでアーティファクトはブロッケン伯爵……。

<だが、それならば奴が多数の手下を従えていても対抗することが可能だ。それに機械獣以外のメカもいくつか入れておいた。大いに役立ててくれ。>

機械獣以外かあ、要塞系もかな？

いろいろ文句はあるけど使えそうだしよしとするか。

世界を回るときにカードの能力と自分の力を試さないかね。剣もある程度は使えるようにならないとな。

「マミく起きてるう？」

マリーが早速来たようね。これからのことを思いつつまず騒がしい友人を迎えるのだった。

あれからまた数ヶ月私は魔法世界を回ってみて今は帝国領にあるとある村で厄介になっている。世界を回るときは飛行魚や徒歩でと思っていたが、召喚できるものの中にグールなどがあつたこともありそれで移動を行えたのでお金と時間を節約できた。

（怪しいやつって追っかけられたこともあつたけど……、もちろん振り切った。）

あのカード、Drヘルが使っていた物だと大体呼べるみたいなのよね。ためにガミアQを呼び出してみたら1〜3まで出てきた嬉しかったなあ。やっぱり旅のお供は欲しいからね。呼び出せる機械獣の数の上限もないようだった。

（機械獣軍団を呼び出したときは大騒ぎになってあわてて戻したものね。）

ただ一度召喚して戻すと次に呼ぶためには24時間掛かるなど制約もあつた要塞系はその制約がないみたいだけどガミアたちも1〜3でワンセットで呼び出す必要があるみたい。ゼウスによると修理

のためとバランスを取るためであるらしい。どんなに損壊しても戻してしまえば24時間で完全に元に戻るが、強力な戦力をこの世界に送り込むためにはこのような制約が必要だったらしい。

要塞内でも修理は出来るがメンテナンスが精々だし火力も余りなかった。こっちは移動用として用意してくれたのだろう。だから24時間の制約はないのかもしれない。それはともかく私はグールに乗ってガミアを従えて世界を回り体の性能を試しつつまた修行ついでに魔獣を狩っていた。

そんな時、ある町に寄ったときにマリーに出会った。何でも長期の休みをもらい故郷に帰る途中なんだとか。そのときまたちよつとした騒動があつたがその後もぜひ故郷に来て欲しいと言われ、これといった予定が無かつたこともありマリーの故郷にお邪魔することにした。

移動はグールだったのだがそこでまた……。

その後無事、彼女の故郷にたどり着き今はそこでやっかいになっている。村と言ったようにあまり大きくはないが穏やかでいい場所だ。友人もそれなりに出来た、ここで暫く過ごした後また旅に出ようと考えていたのだがそれも行かなくなってしまった。

大戦が勃発してしまったのだ。

原因は連合が突如進行したとも、帝国の特殊部隊が連合の要人を暗殺したともあってはつきりしていない。しかし、刻一刻と戦いは規模を増し今では連合と帝国の全面戦争の状態になってしまっている。とても自由に渡航できる状況ではなく私はこの村にとどまることにした。またマリーも仕事先から暇をもらってこっちに避難してきた。闘技場のほうも剣闘士が戦場に行ったりして現在休業中らしい。

ただこの村は主要な都市からは離れているので住民の危機感はある人たちが見回りをしている。

今は私の番で村の周辺を回っている。

「それにしてもこの戦争何時まで続くんだらうな？」

と話しかけてきたこの人はアルヴィンさん村の若者のまとめ役のような人でリーゼントがトレードマークの獣人だ。

「そうねえ、ニュースを聞いてもどっちもこれといった目的を持っていて感じじゃないものね。一応目的っぽいことは言ってるけど……。」

「ありや目的じゃなくて妄言だ。何がく神々よりこの世界の管理を任された我々はすべての国、臣民を管理統制しなければならぬ。>だ！連合の言ってることは妄言でしかないし、帝国も似たようなもんじゃねえか。あいつら世界征服でもしたいってのか？」

「言ってることを素直に受け止めるとそうなるわね。でも、戦線は膠着してるんですって？」

「ああ、復隊した隊長やオヤジさんの話だと上が何をしたいのかわからんそうだ。」

隊長って言うのはバートレットと言う人で村の自警団のまとめ役で皆から隊長と呼ばれて慕われていたの、オヤジさんも同じく自警団の人で隊長の補佐をしていて訓練なんかを担当していたは名前はビーグルだったかしら？皆オヤジさんってしか呼ばないからなあ。

元々は軍にいたらしいのだけど引退して村に越してきたらしいの、でも戦争が始まって復隊することにして軍に行ったの。

「そう、そうなるという終わるか分からないわね。」

今起こっている戦争がおそらく原作の20年前に起こったっていうものなんだろうけど…。

このあたりから読まなくなっちゃったからあんまり覚えてないのよねえ。何かおおボスがいて主人公の親がたおして終わったってくらいしか記憶に無いし。そうなるに参加したほうがいいのか。でも……、私に人を殺せる覚悟があるのかしら。剣闘士をしていたのだから戦う覚悟はあるけど、そっちのほうは分からないわね。



とりあえず今はこの村の安全を守らないとね。こんなことはいくら考えても分からないしね。

と考え事をしているとチョッパーが（彼のあだ名で斧って意味があるみたいで戦い方にちなんだのだとか）腕を出してさえぎってきた。

「どうしたの？」

「何か音がする。獣が立てる音じゃねえ。それに血の匂い。」

こんなときは獣人の感覚は便利ね、と思いつつ戦闘体制に入った。

「距離と方角は？あと数。」

「距離はまだあるな方角は北東ってところか。数は……詳しくはわからねえが、かなりの数だな。盗賊や敗残兵って規模じゃねえ。」

帝国の正規軍がこんなところに来るはずもないし、そうになると連合の兵かしら。

「応援を呼んでくる時間はあるかしら？」

「難しいな音がだんだんこっちに近づいてきている。戻って説明しているうちに間近まで迫られそうだな。」

「そうになると私たちで何とかしないとね。連絡にはガミアちゃん

を1体向かわせるわ。向こうは大丈夫かしら。こっちが全部って分けじゃないだろうし。」

「そうだな頼む。ブービーとナガセのほうか？大丈夫だろうあいつらが負けるところなんて想像つかねえしな。それにこっちにいるのと同規模以上がいたら今すぐケツまくって村ごと逃げる必要があるな。」

「それもそうね。でもそんなにいるの？」

と質問をしながらガミアちゃんたちを出してうち1体を村に連絡に走らせた。もう1体をもう一つの班のところに援護に向かわせ準備を整えていく。

「ああ、近づいてきてはつきりしてきたが100人はいるぞ。」

「1人あたり50人計算ね。」

「まさか、お前が70で俺が20でアイツが取りこぼしの10だろ。凄腕剣闘士さん。」

「ふふ、期待には答えないとね。でも、まずは目的を聞かないとね。」

「聞くまでも無いと思うがね。さっきからろくでもない会話がちらほらと聞こえてくる。」

「一応は聞いておかないと、私が前に出て話すわ。チョッパーは援護と村に向かう人をお願い。ガミアちゃんは村へ向かう人をお願い。」

「了解！」

「了解した。」

ふう、いきなり殺す覚悟をすることになるなんてね。出来ればそうなって欲しくは無いんだけど……。

そこからはばらく進んで、少し開けたところで私は向かってくる人たちを待っていた。さてどうなるかしらね。

<マミ、どんどん近づいてくるぞ。>

<分かったは、もう少しで見えるかしら。>

<ああ、もう森を抜け…まずい奴ら撃ちやがった！逃げろ！！>

「え！」

チヨッパの警告からよけるまもなく魔法の射手が多数私に降り注ぎ止めとばかりに中級魔法が撃ち込まれた。

「はっはははは、なにやらこそこそとしていたようだが貴様ら獣人は生きる価値なの無いのだよ。この世界はあのお方によって選ばれた我々の物なのだから！」

「隊長、こいつは人間のようですが。」

「む、確かにそうだな。しかし獣人と馴れ合う同胞など私は知らんな。」

「それもそうですね。大方変身魔法でも使っているでしょう。」

この言葉を聴いて私はこの人たちと話し合うことは無理と悟った。それにいきなり魔法を放つこいつらを村に行かせるなんて事は出来ない。

あれだけ悩んだ殺す覚悟は相手が相手だからかもしれないがすんなりついた。

転生したての時のように自分だけ、死ぬならいいが仲良くなった大切な人が死ぬのを黙ってみているなんて出来ない。

だから私はこの人たちを殺そう、戦争に参加して少しでも早く終戦を、親しい人たちに少しでも早い平穏を取り戻してもらうために。この力を使おう、マジンガーの「神にも悪魔にもなれる力」を、けれど決してそのどちらにも成らない様に人の心を持ち続けて。

そうと決まれば早く起きないとね。チョッパーも呼びかけ続けて

いることだし。

<私は大丈夫よ。あなたの言うとおりこの人たちに話は通じそうも無いわね。>

<ふう、心配させるなよ。ああ、無理だな。だがちょうどいい具合にお前の周りに集まってきてるぜ。>

<ええ、じゃああとは作戦ど通りに。>

<ああ、なめたまねした落とし前はつけねえとな。こんな奴ら村にいかせねえ>

さあ、反撃と行きますか。となると掛け声はやっぱりあれかしらね。

起き上がりつつガッツポーズとりつつ私は叫んだ。

「マジーン！ゴーーー！」

マジンガーといえばやっぱりこれよね。と思いつつ、ブレストフアイヤーを放ち。敵の殲滅を開始した。

あれから無事に村に一人も通すことなく敵の殲滅は完了した。ブレイズ達の方も30人くらいが侵入して奇襲してきたらしいが苦も

無く撃退できたようだ。

そして現在、村の長老たちが集まって今後のことを話し合っていた。

「どうなるかしらね。」

「たぶん引越したろうな。今までも敗残兵とかが来ていたが今度は明確にこっちをつぶす気の奴らが来たからな。もう俺たちだけでどうこうできないだろう。」

「そうね。となると、バートレットさんたちがいる町に行くのし

ら。」

「そうなるだろうな。ほかに当てもなし。なあ、今回のあいづら  
どう思う？」

「あなたも気になってたの？確かにあれはちょっとおかしいわね。」

「ああ、あんな連中がいるってのは分かるがそれがかたまっている。ましてこんなところまで出張ってくるなんて普通じゃねえしな。」

「本当にどうなっているのかしらねこの戦争。」

「……なあ、軍に入るんだって？」

「ええ、ここを移ったら警備がしっかりするところになるんだろうし。それなら軍に志願して少しでも早く終戦を迎えられるように、

そうじゃなくても大切な人にまで戦火が及ばないようにしたいからね。」

「そうか、俺やブービーたちも志願するからもしかしたら一緒に隊になるかもな。」

「ええ、そうね。そのときはよろしくね。」

「ああ！またここで皆で祭りをしたいから死ぬんじゃないぞ。」

「あなたもね。チョッパ！」

その後、村を放棄して大きな街に皆で移り住むことになった。

そして自警団の人たちは軍に志願し戦火へと飛び込んでいった。

そう、2年に及ぶ大戦。大分裂戦争へと物語の表舞台へと私は飛び込んだのだ。

---

---

---

某所

もっとだもつと……これでは足りぬ……より多くのを……もつと  
をを広げよ……

我は、この世界の真の支配者……

……

……

……

……



## 平穏な日々と不穏な気配（後書き）

え〜と、強引なパワーアップなのは承知しています。ただここ以外にタイミングが無くて><

グレートにパワーアップしたのですがZも今後しつかり出番と見せ場はあります。ただグレートは大戦のほう为荣えるってことでかなり早いですけどチェンジしました。

主人公の大戦への参加の部分も悩みました^^;

ともかく暫くはグレートマミンガーで大戦編をお送りします。いろいろ至らないところがあると思いますがよろしく願います。それと作中で出てきた連合部隊ですけど。決してあれが一般的な連合兵ではありません。似たようなものは帝国にもありますので。

### 次回予告

「ついに物語の本筋にかかわりだしたマミ。そして蠢く敵の影、姿を現す原作キャラ。」

次回 真ネギま マギカZ

「大分裂戦争<序>」

## 大分裂戦争<序>(前書き)

リアルが忙しくて1週間ぶりに……

剣闘士関係もそうですがいろいろ独自解釈、設定が入ります。

あと、なぜかいるエスコンの人達ですがW本編には関わりは無いです！

モブの名前考え付かなくて…

## 大分裂戦争<序>

「いでよ！ガラダK7 ダブラスM2！進撃せよ！トロスD7 ア  
ブドラU6！目標はあの街だ、進め機械獣達よ！！」

私は次々に機械獣を呼び出し攻略目標の街に向けて、進撃を開始  
した。

「いつ見ても、凄まじい光景だな。しかし、ここまでする必要ある  
のか？」

と地響きを起こしながら進む機械獣に驚き辺境の都市に攻め込む  
には過剰すぎることに疑問の声が上がった。

「ええ、過剰な戦力であるのは分かっているわ。でも、それは相手  
もそう思っつでしょ？なら……」

「なるほど、この戦力で相手を威圧し降伏を促すと。しかし、そう  
うまくいくか？かえって徹底抗戦を決意させるんじゃない？」

「可能性としては低いと思うわ。あそこは元々帝国領のだったし、  
駐留部隊の士気も高くは無いかから徹底抗戦をするまでにはならない  
と思うわ。」

「ふむ、確かにアチラさんもこんな何も無いところの1つ都市を死  
ぬ気で守る意味も義理も無いな。」

「ええ、だから街を開放することを条件に撤退を認めれば戦闘を回避できるはずよ。」

「その条件ならまず間違いはないな。しかし、大丈夫なのか？敵兵を無傷で逃がしてしまつて。」

「受けた命令はあくまでも都市の奪還。敵兵のことに關しては何も言われてないから黙つていれば問題ないわ。それに彼方だつて戦闘はしないほうがいいでしょ？」

「くく、そりゃ詭弁じゃねえのか？マミ隊長。まあたしかに、こんなところで死にたくはないな。」

「と、そろそろ街に着くわね。皆に準備の指示をして。」

「了解。精一杯脅してよろう！」

「ふふ、やり過ぎないようにね。」

機械獣を都市の城壁を取り囲むように配置し私達は城門前に陣取るように位置についたいた。相手も城壁上に陣取り迎撃体制に入つてきた。

「これから都市の受け渡しの交渉を始めるわ。もしかしたら攻撃が有るかもしれないから彼方達はわしの前に出ないようにね。それと攻撃が有つても反撃はしないように、防御に専念して。」

「了解。その代り、しっかりと頼むぞ！」

「ええ、それじゃ始めるわね。」

こちらは帝国軍アリアト方面軍第17大隊指揮官マミ・トモ工都市に駐留する部隊の指揮官に告げる。現在、こちらはこちらの包囲下にある無用な戦闘およびそれによる都市への被害はこちらが望むところにあらず。武装を解除後すみやかに都市より退去するならば、我が方は追撃をおこなわない。期限は明日正午とする、こちらの賢明な判断を期待する。

さてと、このままうまくいってくれるといいわね。」

「ああ、そうだな。あとは、アチラさんに変な考えを持った奴がないことを祈るか。」

しばらく待機していると城門が開き白旗を掲げた一団が中から出てきた。一団はわれわれの数メートル前で止まりその中の指揮官と思しき人物が

「協議の結果、我々は武装解除し都市より退去することを決定した。されど本当に追撃をおこなわないか確認をしたい。先ほどの言葉が真実なれば現在都市を包囲している、あの兵器を撤退させてもらいたい。あれがあつては兵達に武装解除を促すことは難しく、また待ちの住人も不安がつているゆえ。兵器の撤退を持って我が方も武装解除、退去を開始する。我々は退去完了までそちらに身柄を預ける。」

「了解しました、賢明な判断ありがとうございます。では、機械獣たちを戻します。」

立ち振る舞いからこの人たちが本物の指揮官だと判断し、機械獣たちを戻していった。消えていく機械獣に相手は驚いていたが、だからといって反抗する様子もなく無事に終わるかと思われたとき……。

城壁上より突如魔法が放たれた！それも魔法の射手のような初級魔法ではなく、中級以上のあきらかにこちらを数人は殺れるモノが迫ってきた。

とつさに斜線軸上に飛び出し無事防御でき周囲に被害がなかったが、別の問題が発生していた。

「おい！どついうことだ！なんでこちらに攻撃を仕掛けてくる！」

「まて！何かの手違いだ！私達はあのようなのは命令していない……！」

機械獣を下がらせたとところで撃ってきたせいでこちらをほめてのか！と副長がくっつかかり、アチラは完全に想定外なのだろう酷くあせっていた。

副長には攻撃が有るかも知れない事を話したが、降伏の前か後でも精々魔法の射手クラスのものと思っていたのだろう。それが詠唱が必要なものが撃たれたことで、計画的なものかと思っているのだ

ろっ。

「だが！」「ストップ。」「マミ無事だったか！」

「ええ、私は何も問題はないわ。それに魔法を放った人もどうやら仲間たちから取り押さえられているみたいだから。あの人が突発的にしてしまったのでしよう。でも、一応警戒は続けて。」

「了解しました、お前も気をつけるよ。」

「な……、あの魔法をくらって無傷とは。アチラが好戦的でなくて良かったよ。」

「ええ、先ほどの兵器もそうですがあの指揮官の実力も我々でどうにかなる相手ではなかったようですね。」

「そうだな。だが今は無事に帰れることを喜ぶとしよう。」

今はヘラス帝国の東の外れの街にいる。

大戦に参加することを決めた私は傭兵として参加している。正規軍になるつもりもなく拳闘士としての実績と世界を回っていたときに傭兵のようなことをしていたので、傭兵となったのだ。幸い拳闘

大会での優勝実績もありスンナリと登録も終わり、数回の実戦を経験したあと今の地位にいる。

もつとも隊長と言っても傭兵達のまとめ役といった感じで正規軍としての地位はなくこの大戦限定のものだ。それに、私には戦術で華麗に勝利何てできるわけないので機械獣を出しつつ誰かが突出しないようにするくらいしかできない。

「あれから暫くたちましたが、上からは何も？」

この人はラリーさん、同じ傭兵仲間なのだけどここの仕事を長くやっているそうなので副官をやってもらっている。正直私より隊長に適任の気がするが本人によるとく一番強いやつが隊長をして先頭で皆を引っ張った方がいいらしい。

「ええ、正規軍からは現在の戦線を維持せよってしかきてないわ。」

「ここに再び攻めて来るかね？ただでさえ主要な戦線とは関係無いつてのにお前までいるってのに。」

「確かにあまりメリットはないわね、でも油断はきんもつよ。それに、連合が来なくても盗賊とかがいるわ。それからも街を守らなないとね。」

「わかってるよ。盗賊もだが今回の戦争は何処がおかしいからなあり得ないことも起こるかもしれねえ。」

「ええ、そうね。」



「た、たいへんだ!!」

「さっそく何かあったみたいだな。」

「そうね。どうしたの!」

「あ!隊長に副長、それが連合がこちらに攻めいつてきたんです。」

「

「本当に来るとはね。でもどうしてそんなに慌ててるの?」

「侵攻してきている戦力が問題なんです。見張りの報告によると鬼神兵4に1個旅団規模の戦力がこちらに向かってきていているらしいです。兵も砲兵らしきものを確認したとか……」

「はあ!?何だその戦力は、見間違いじゃねえのか?どう考えてもこんな戦線、場所に投入される戦力じゃねえぞ!」

「何回も確認しました!しかし確実にそれだけの規模はいるんですよ!!それに奴らやる気満々のようです。この戦線から帝国に侵攻するつもりでしょうか?」

「でも、主戦線のオスティア周辺でも押されているのに何でこっちに……。まあ、それは後で考えましょう。あなたは皆に出撃の用意を知らせに言って。」

「了解しました!」

「はあ、本当にありえないことがおこっちまったな。だが、アチ

ラさんがやる気ならこっちも全力でいくまでだな。」

準備を完了し街から程近い丘に陣取り相手を迎え撃つ準備を進めている。

「鬼神兵は隊長のアレに任せるとし、どう布陣する？普通にぶつかればどうやっても勝てやしねえぞ。」

「鬼神兵は、アレね……。あの装備なら2対1でも機械獣なら問題なくいけるわね……。」

「もう見えてきやがったか。」

「短時間なら敵の攻撃を受け止められる？」

「短時間ならな……。敵の錬度にもよるがこっちも傭兵なんて事をしてるからな。」

「ガミアちゃん達も参加させるわ。鬼神兵を潰したら機械獣たちにも襲わせるわ。戦う敵もこっちに向かってくるか突破して街に向かう人だけ狙うことにして。」

「そこまで簡単に潰せるものか？まあ、お前がいるだけでも何とかなりそうではあるけどな。」

「ええ、機械獣の名は伊達じゃないのよ。じゃあ、早速はじめましょう。」

「来なさい！ガラダK7 ダブラスM2！」

髑體の頭部の左右に大きな鎌をつけたガラダK7

蛇状の頭部が2つあるダブルスM2

両機とも現代の軍をはるかに凌駕する力を持っている。鬼神兵とはいえ現在向かってきているせいぜい軽歩兵程度の装備のモノに負けるほど弱くはない。

呼び出してすぐに2機を突っ込ませ私達は迎撃体制を整える。敵も鬼神兵とは分離しこちらに突撃する腹積もりのようだ。鬼神兵は砲撃体制に入り本隊は機械獣を迂回するようはこちらに進軍して来た。

鬼神兵と機械獣たちの距離が半分になったところでチャージが完了したらしく、まず2体がそれぞれに砲撃を開始。残り2体は回避した先に撃ち込むつもりなのだろう、普通ならここで終わるか大ダメージを負い遠からず敗れるだろう。

だが、機械獣はそんなに弱くも甘い相手ではない。基本的にやられメカの印象があるがあのマシンガーと対等に時には追い詰めるこ

ともある能力を持っているだ。この程度の攻撃何も問題ない。

1発目を避けた2体に向けて残りの鬼神兵2体が砲撃を放った、相手は必中を確信したのだろう、こちらに攻撃をかける相手の顔には笑みが浮かんでいる。

しかし、その期待は無残にも打ち破られる。2体の機械獣は<機械の獣>の名に恥じない流れるような動きで2発目の砲撃も回避しなおも接近を続けた。鬼神兵たちは2体を前衛もう2体を後衛にし再度砲撃を試みようとしたがその動きは余りにも遅かった。

ガラダが目からミサイルを放ちダブルラスも2つの頭部から光線を放ち鬼神兵達を牽制。その攻撃を防御している間に至近距離までの接近を許してしまった、後衛の2体は辛うじて距離を離しつつあるがまだまだ近距離といつていい。

ガラダが後退する1体に向け頭部横の鎌を1つ投擲した。それは辛うじて前衛のガラダと相対していた1体が弾く事ができたがそれによってできた隙は余りにも大きい……、もう片方の鎌を手に持ったガラダの一撃を受け止めることができず致命傷を負い崩れていく。ガラダはその鬼神兵を後退する1体に投げつけた。そこまでスピードがあるわけでもなく難なく避けることはできた、後は再び砲撃するだけ……だった。投げつけられた1体に隠れるように飛来した鎌に気がついたときには回避も防御も不可能でもし鬼神兵に感情があっても自分のみに何が起こったかわからなかっただろう。

時間を戻しダブラスのほうは…

至近距離に接近したダブラスは首を鬼神兵に絡め絞め殺さんばかりに締め付けつつ両腕でも抱きついてきた。また首は後退する鬼神兵を狙い容赦ない光線による攻撃を浴びせていた。抱きつかれた鬼神兵は何とか振りほどこうともがいたとき……、突如として光り輝いた。鬼神兵が何かをしたのではない、その証拠に鬼神兵は煙を上げつつ崩れ落ちていく。そうダブラスだ胸の6つ電極で相手に高圧電流を浴びせたのだ。もう1体の鬼神兵も何とか光線を防いでいたが1対1になったことでより激しさを増した攻撃に耐え切れず後を追った。

機械獣によつて4体の鬼神兵が瞬く間に敗れる。勝てるかはともかく自分たちが私たちを破るまでは十分持つだろう、そう思っていた相手は予想外に過ぎる結果に動揺を抑えきれないようだ。なんとしても突破しようと攻撃を強めたとき、機械獣が連合兵達を後ろから襲った。鬼神兵を無傷で破り現在進行形で自分達を蹂躪する機械獣の存在について彼らの士気は崩壊した。

後は後方に通さないように攻撃を加えればこの戦闘は終わりだ。だからこそ何故今回の戦闘が起こったか。何故こんな辺境にあんな戦力が現れたのか……、どうしても考えてしまう。ラリーさんも同じようになにやら考え込んでいる。ともかく何とか大きな被害もな

く勝利したことを今は喜ぼう。

「転属ですか？」

「そうだ貴様には今回の戦功によりオスティア方面軍に派遣されることが決定した。速急に準備を整え出発されよ。」

「代わりの人員はいるのですか？」

「貴様が心配することではない。すでに数名こちらに向けて出発している。」

「分かりました、準備が出来次第向かいます。」

「では私はこれで。」

どうやら、今までの功績と今回の戦闘の結果。私は主戦線にして戦争目的の1つでもあるオスティア方面に派遣されることになったようだ。それをラリーに話すと。

「そりゃ、さびしくなるな。しかし、お前があっちにか……」

「ええ、今までありがとうございます。」

「じゃあ、お礼ついでに少し頼みごとを聞いてくれるか？」

「できることなら。」

「何ここより大戦の中心といつてもいい所に行くんだ、だからな……この戦争について調べてくれないか？」

「この戦争について……」

「ああ、この戦争はどこがおかしい。帝国の戦争目的のオステイア奪還にしても何故今更あんなところを？それ以外の目的も余り納得できるものじゃねえ。始まりもよくわからねえからな。だから、この戦争の中心近くに行くならそれを調べてくれ。何できる範囲でいい。」

「分かったわ。私も気になってはいたからね。」

「ありがとよ。じゃあ、皆に知らせて送別会の準備でもするか！」

「ふふ、楽しみね。」

その後、送別会をもらった翌日、私はオステイア方面へと出発した。

---

---

暗く光もほとんど無い場所で複数の話し声がする

「アチラはどうなった？」

「失敗だな、邪魔者がいた。暫くは無理だな。」

「だが、すでに飛ばしてある。」

「そうか、向こうも頑張りすぎたものがいたらしくてな。ちょうど交代になるだろう。」

「それは良い。嗅ぎ回っている者もいるが問題なかるう。」

「ああ、アノ方もお喜びになろう。」

「うむ」

「奴らは？」

「大丈夫だ。気がついてない。」

「そうか、ついに我々の悲願が」

「「全ては 様のために。」」

「「「全てはあるべき姿に。」」」

「「「「「全ては本来の持ち主のモノに。」」」」」

暗闇に声が反響しそして消えていった。まだ、誰もその存在を知らない……



## 大分裂戦争<序>(後書き)

機械獣の力強さは表現できたかな？何の間のでマジンガーと戦えたのでかなりの力はあると思うので…

もう1、2話は機械獣を活躍させたいです。てか、大戦しか活躍の機会があまり無いので……。学園編で出したらもうねw

あ……前回の次回予告でいった原作キャラだし忘れたw

### 次回予告

「オスティア方面。今大戦での激戦区……、この戦争はどこに向かうのか。」

次回 真ネギま マギカZ

大分裂戦争<激戦区>

大分裂戦争<激戦区>(前書き)

タイトルに偽りありだなあ…。

## 大分裂戦争<激戦区>

今私はオスティア攻略軍本部の作戦会議にいる。

「では、私達は第11軍団と共に行動すればよろしいのですか？」

「そうだ。我々は聖地オスティア奪還作戦を再度おこなう。我々、第11軍団は陽動もかねてニヤンマド攻略をおこなう。貴様ら傭兵もその作戦に参加しろ。」

「了解しました。」

「お、隊長がお戻りのようで。」

「ええ、今帰ったわ。」

「それでどうだったんだ？またオスティアを攻めるとかって噂は流れているがよ。」

「私達はそのオスティア攻略のための陽動としてニヤンマド攻略を目指す11軍団と行動することになったわ。」

「おいおい。オスティアだけでも驚きだったのにニヤンマドもだあ？上の奴らは一体何を考えてるんだか……。」「

「しかも、私達は11軍団の陽動として働くことになるでしょうね。」

「陽動の陽動かよ。あいつら一体傭兵を何だと思っていがるんだ。」

「仕方ないわよ。本来の傭兵っていったらお金で戦争をするって物なんだから。」

「だがなあ、今回の大戦じゃそうじゃない奴も結構……。止めだ止めだこんな事言ってもしょうがないか。しっかし、こんなに戦線を広げて大丈夫なのかねえ。前回のオスティアで失った戦力だってまだ回復してねえってのに。」

「上は前回の敗因を連合の凄腕集団によるものと思ってるそうよ。で、現在その人達は辺境の戦線にいるらしいから大丈夫だろうって。」

「そんな簡単にいくものかね。で、ニヤンマドの方はどうするんだ？あいつらのやる気なら問題ないが正面から行かされたら流石に洒落にならねえぞ。」

「そのときは機械獣を総動員するは。詳しい作戦はまた後であるでしょうけど。彼方の知り合いの人に頼んで、正規軍も少しつけてもらえない？」

「それなら心強いな。当たってはみるがあまり当てにはするなよ？」

「そんなに多い必要はないわ。それに向こうの情報を知れるほうがもっと重要だから。」

「なるほど、確かに快進撃を続けて気がついたら敵中ど真ん中味方は撤退済みつてのは勘弁してもらいたいな。」

「ええ、だから向こうと連絡が取れる人を頼むわね。」

「りょくかい、そこは任せてくれ。」

そう言つて、彼は知り合いに連絡を取りに言った。

ちなみに彼は新しい副官でフラガさんて言うの。もともと、前回と同じで実質彼が隊を回しているだけだね。元正規兵らしいけど、軍の無茶苦茶な作戦におこつて上官を殴つて除隊その後、傭兵として改めて参加している見た。

この戦争、始まつたまだ1年くらいとそんなに時間はたつていないのだけれど、戦争目的があやふやで上層部の将校の人達はともかく末端の兵士になってくると何故戦争をしてるか分からず士気が高まるどころか厭戦気分がそれなりに高い。

それに将校の人でも皆が戦争継続を叫んでいるのではなく、こちらもそれなりの数の人が疑問に思っているらしい。フラガさんがお世話になったハルバートンつて人も何故こんな戦争を起こしたのか、何故続けているのか不思議に思っているみたい。

元々、私がいた地方の戦線でも連合・帝国双方でそのような思いを持っている人が多かったが、どうやら主な戦線や街でもそれは同じ思いらしい。しかし、王族や大臣、将軍でオステイア奪還を叫ぶ人もそれなりに居てその人達が国の方針を決めているから現在の状

況何だつて噂も聞こえてくる。

連合と帝国の仲は確かに良くはないがこんな戦争を起こすほどのものではなく、オスティアにしても確かに文明発祥の地であり聖地として名高く日頃からそこを帝国に奪還しようという人もいるが多くの人達にとって戦争の理由になる土地でもない。

聖地といつても宗教的聖地、例えばエルサレムのような場所でもなく、発祥の地にしてもあまりにも古く魔法世界全体での発祥の地なため、地球で言うところの人類発祥の地つまりアフリカといった具合でこちらでも戦争をしてまで求める場所ではない。

他にも資源などの理由があるがオスティアは空中に浮かぶ土地逆に負担になりかねない危険がある。そもそもこの魔法世界はまだまだ未開の土地が連合・帝国双方にあるので戦争よりそっちを開発したほうがよほどいい。

そのような理由があつて、疑問の声は多く何度か和平交渉をしようとしたらしいが毎回妨害があり成功していない。それも双方で起こった事なので和平派も今では向こうが戦争を継続する気なのかとあまり活発ではない。

ラリーさんに頼まれて調べてはみたけど、分かったことは「何故戦争を継続しているか分からない」なんてことだった。それを知らせたら、向こうもあきれていたわね。他にも無茶な作戦がそれなりにあるってこのもその理由だろうけど。

戦争の被害で大切な人が傷つかなかったためと思って参戦したけど、

この戦争の終わりはいまだに見えないわね……………。

「まさか本当に正面を任されるとは……………。で、本隊は迂回してニヤンマドを目指すね、作戦って言えるのかねこれ。」

「まったくね。戦力も1個旅団が良いところかしらこっちは？」

「だな、軍からもあまり兵力は借りれなかったし。ホントに連絡くらいだな、それより少年兵が多いのが気になるぜ。」

「ええ、彼らは後方に下げたほうがいいわね。」

「ああ、そうしてくれ。あんな若いのにまだ死ぬ必要なんてない。」

「他の隊長さんたちにも言ってくるわ。」

「頼む。」

ちょうど作戦会議の時間だったのでそのことを一緒に伝えたら、他の人たちも了承してくれた。

作戦については何かやろうにもここからニヤンマドの守備隊がいるだろう場所まで何も無い平原なので、機械獣を先頭に各傭兵隊が後ろに付きホローくらいしかないだろう。

傭兵隊長の一人が自分達の装備がもう少し良ければ機動戦をして

も良かったかもしねないといつてたけど残念ながらそこまでの装備はなかった。

その後細かい打合せをした後、皆明日に備えて休息に入った。

「じゃあ、呼び出すわね。大丈夫だろうけど一応注意してね。」

「了解。お前らぼけつとするなよ！」

「ああ、頼むよ。派手に行こうじゃないか。」

この人は一緒に行動する傭兵隊の隊長のバルトフェルトさん。何でも親睦を深める宴会でフラガさんと気が合ってそれならと一緒に行動することにしたらしい。

「いでよ機械獣軍団！」

私の呼びかけに応じて次々に機械獣たちが姿を現す。今回の作戦は長時間になるため機械獣を半数に分け交替で出すことにした。他にも緊急事態用に機械獣の中でもとくに強力なものは予備戦力として待機してある。

それでも次々に出現する機械獣の群れには圧倒される。ここまでの数を出したことが無い事もあるけど、その姿は見る者を威圧する。

「凄まじいなあ。」

「だねえ。鬼神兵もすごいがこの機械獣はそれとはまた違ったすごい



さがあるね。まあ、問題は……」

「だな、相手が気の毒だが頼もしいものだ。ああ、問題は……」

「見るからに悪って感じの風貌ばかりだな。」

人が気にしていることを……。そう機械獣は非常に頼もしいのだがどれもこれも強烈な印象のばかりでしかもその風貌が悪っぽくて……。一度機械獣で人助けをしたことがあるのだけど。そのときは取って喰われるんじゃないかとおびえられたし。

その後、順調にニヤンマド手前まで進撃して現在本隊の到着待ちと街攻略前の休息に入っている。

「思ったよりも被害がなかったわね。」

「ああ、敵もほとんど出てこなかったからな。」

「こうなると、陽動としては失敗してるんじゃない？」

「かもなあ、今頃向こうが喰い付かれてるんじゃないのか？」

「いや、こっちは元々双方が重要視していなかった場所だからね。根本的に戦力がないんじゃないかな。で、そこを突いて慌てた連合がオスティアの戦力を回す。つてのが上の考えだろう。」

「じゃあ、現状でも問題はないかもしれないわけね。」

「ああ。だが問題がないわけじゃあないんだよ。」

「何かあるのか？」

「なに、紅き翼の事がちよつとね。」

「それって連合の凄腕傭兵集団だろ。確か边境の戦場にいるんじゃないかって、今。」

「その边境の戦場ってのがこの北なのだよ。」

「それは、また……」

「近いわけじゃないが遠いわけでもない。下手に長引くと駆けつけて来るかもしれない。」

「そうね。街の攻略を早めた方がいいかしら？」

「それより、撤退したほうがいいかもね。この作戦はあくまでもオステリア奪還作戦の陽動なんだし。」

「やめとけやめとけ、戦場で不吉な事言つてるとたいがいろくでもないことが「伝令！」おこつたな……、俺には予知とかそんな能力はないがこれはろくでもないことだと思っぞ。」

「そうと決まつたわけではないだろうに。それに君にはそんな能力ありそうなのだけどね。」

「で、なんて書いてあるんだ？」

「やっぱ君には予知能力があるよ。本隊が紅き翼に噛み付かれたら  
しい。増援を送れだ。」

「不吉なことが当たる力なんているか。しかし増援ね。うちにいる  
ので紅き翼にかなう奴なんているのか？」

「ママが対抗できるだろうけど。流石に一人じゃね。ママどうだろ  
う？」

「そうね。機械獣の中でもとくに強力なものを出してみるわ。それ  
に時間稼ぎなら何とかなるかも。」

「じゃあ、俺もついて行こう。説得のときに役に立つかもな。」

「なら君たちの隊は僕に任せてくれ。彼らが来たとあっちゃさっさと  
逃げ出さないかね。」

「ごめんなさいね。」

「なになに、問題ないさ。ダコスタ君ならきっちりやってくれるだ  
ろう。」

副官の人の心の中で謝りつつ私達は出発した。

## 大分裂戦争<激戦区>(後書き)

終着点は決まってるけどその理由付けが難しい……

次回は紅き翼との戦闘です。といっても撤退支援なので期待はしないでねw

大戦の終結と黒幕、最終章は何とか形になってるけど学園編が……。

次回 真ネギま マギカZ

「本隊の撤退支援のため単身紅き翼に戦いを挑むマミ！撤退は成功するのか」

次回 大分裂戦争<撤退戦>

## 大分裂戦争<撤退戦>(前書き)

セリフばかりだ……、どうなんだろうこれ？

後またサブタイがW紅き翼のほうが良かった気がするなあ。

前々回書き忘れてましたが、本作の鬼神兵は18mかな？

大半が18mくらいで機械獣と同じ大きさです。原作だとどれくらいなんだろう？

## 大分裂戦争<撤退戦>

バルトフェルトさんに別れを告げ現在私達は本隊のいるだろう場所に向けて飛行している。

フラガさんは鷹の獣人で魔法によってさらにスピードを上げていて、私はスクランブルダッシュを展開している。

「それでどうするんだ？本隊のほうは俺が説得するにしても撤退が始まるまであいつ等を抑えてないといけないぜ。お前一人で大丈夫か？」

「さすがに1人じゃ無理だから機械獣も中でもとくに強力なもの2体を出すわ。」

「ふむ、あいつらは4人だったか5人だったかのはずだしそれなら時間稼ぎなら何とかなるか？」

「ええ、フラガさんはその間に撤退の説得をお願い。もしかしたらこっちでも停戦できるかもしれないし。」

「ああ、任せてくれ。」

「そろそろ見えてくる頃のはずだけど。……あれね。」

「だな。とんでもないな紅き翼って奴らはここからでも魔法が見えるぜ。」

「フラガさんは先行して撤退要請を私は機械獣を呼び出してから彼

らに攻撃をかけるわ。」

「分かった気をつけるよ！」

「彼方もね！」

フラガさんが発見されるのを避けるため低空に下りていくのを見送りつつ呼び出す機械獣を考えた。

(あの2体は呼び出したことはないけど十分強力だろうから時間稼ぎなら何とかなるはずね。でも、妖機械獣やラインX1が使えないのはこんなときには痛いわね。)

妖機械獣はミケーネのオリジナル品、ラインX1はシュトロハイム博士の作品だからヘルの機械獣が呼び出せるこのアーティファクトだと呼び出せ仕様らしい。

ミネルバXは呼び出せてもよさそうだがどうも無理なようだ。

(できないことを考えてもきりがないわね。)

「参陣せよ！ガラダブラMk01！アシュラ！」

光と共に出現してきた機械獣を確認してしばらくして。私は驚きに包まれた……。

(sideナギ)

よお！俺ナギ・スプリングフィールドってんだ！誰に言っ  
てんのかわからねえが、言っといいたほうがよさそうなんでな。

今俺たちはアルギュレーの辺境から連合の中央に戻るところだ。  
辺境に追いやったくせに戦況がやばいつてんで呼び戻らしいつて  
アルの奴が言ってたな。

で、その途中で帝国の大軍を見つけたんで現在そいつ等に攻撃を  
かけてるところだ！

「しかし、こいつ等なんでこんな所に軍を派遣してるんだ？」

「おそらくこの付近の中心都市であるニヤンマド攻略をするため  
でしょう。」

「オステイアも2度目の侵攻があったみたいだからその陽動も兼ね  
てるんだろう。」

「んなこたあ、終わってから考えればいいだろ。今はこいつらを蹴  
散らそうぜ。」

「だな！詠春もアルも気合入れろよ！」

「お主等はもう少し考えたほうがいいぞ。」



じゃあ、もう一発デカイのいきますか！

「百重千重と重なりて……」

俺が千の雷を放とうと詠唱に入ったときに……あいつが現れた。

サンダーブレイク！

規模で言えば千の雷のほう为上だがパワーだけならためを張れそうな強烈な電撃が俺たちの間に撃ち込まれた。

「だれだ！」

その電撃（サンダーブレイクだったか？）が放たれたほうを見れば。巨大な2体の巨人？を従えたあいつがそこにいた。

「軍のほうには手出しさせないわよ！」

（sideマミ）

（ふう、何か大きな魔法を放とうとしてたけど何とかこっちに注意を向けられたわね。）

紅き翼の人達を見ながらどうやって軍に手を出させないか考えて

いると。

「お！お前マジじゃねえか。久しぶりだな！」

「え？ラカンさん！？あれ、あなたって帝国にいたんじゃ？」

「何だよラカン知り合いか？」

「おお、何年か前にな。いやあ、こいつらの始末依頼されたんだが気に入ってな！今は一緒にいるんだよ。」

「気に入ったって……、でもそれなら都合はいいかな？今軍のほうでは撤退の説得中でそれが成功したら手を引いてくれませんか？こっちに向かっていた傭兵隊のほうもすでに撤退の準備に入っていると思うので。」

「ん、どうするナギ？俺は別にいいと思うが。」

「そうですね、彼らに攻撃したのも街を攻撃しようとしていたからですし。」

「それが撤退するというなら攻撃する理由はないか……。」

「じゃな、どうするナギ？紅き翼のリーダーはお主なのじゃし。」

「そうだな……、なあラカン」

「なんだ？」

「アイツって強えか？」

「そうだなあ、始めて見た時はてんで駄目だったけど今は結構いけるんじゃないか？」

「そうか！それにアイツが弱くても後ろのアレは強そうだな。」

「おそらくアレが今、帝国で話題の機械獣じゃないでしょうか？」

「あの鬼神兵の数倍は強いと噂の兵器か。解放しに来た街で逆に侵略者と勘違いされたりと有名じゃったな。」

「アレはその中でもとくに強力そうだな。…って、ナギまさか！」

「おう！おい！マミって言ったか？その条件いいぜ」

「そう良かった。じゃあ、「けどな！」「え？なに？？」

「俺達と勝負しろ！」

「おう！お前がどれだけ強くなったか見てみたいからな。」

「おいラカン、俺が先だぞ！お前は後ろの髑髏の方をやれよ。」

「いいじゃねえかよ、ケチくせえな。まあ、アレはあれで楽しめそうだな。」

「やれやれ、こうなったら止まりませんね。マミさんでしたか？そちらの条件を呑む代わりにしばらく付き合ってもらえませんか？」

「すまん、この脳筋たちが…」

「詠春、諦めも肝心じゃぞ？」

なにやら話がどんどん進んでいる……。でも、彼らがあつちを攻撃しないならいいかな。最初から戦う予定だったのだし、被害がなくなっただけでも御の字かな。それに紅き翼って原作でもバグやチート級戦力の集団だったからそれと手合わせできると考えれば良いかもしれないわね。

それにいずれ、戦うハーデスはもつと強いんだろうし。終戦後に彼らと一緒に修行できればマジンガーの力も完全に発揮できるかも。

「分かったわ。戦うのはラカンさんと、えくとナギ君でいいの？ そうなると機械獣は片方戻したほうが……。」

「いや、そつちの顔が半分になつてる方は詠春が戦う。」

「おい！ナギ。」

「いいじゃねえかよ。それにお前も武者修行つてんでこつちに来たんだろ？それならアレと戦つても損はねえぜ。」

「確かにあんなものとは早々戦うことはないが……」

「いいのではないですか、向こうも了承してくれたようですし。といても壊してしまつても大丈夫なのでしょうか？」

「大丈夫よ。」

「のようじゃな。」

「はあ、でも確かにあれほどのものと戦える機会は早々無いか。マ  
ミさんよろしくお願いします。」

「分かりました、こちらもよろしくお願いします。ガラダブラはラ  
カンさんのほうをアシユラは詠春さんの方をお願いします。」

両機械獣は了承し私から離れていった。

---

---

目の前にいるマミは剣を片手に持ち臨戦態勢に入っている。

「じゃあ、名乗りからいくか！俺はナギ・スプリングフィールド！  
最強の魔法使いだ！！」

「じゃあ、私も。偉大な勇者！マミ・トモエ！いくわよ。」

「さあ、来い！」

ラカンの話じゃ戦い方はてんで駄目だったらしいが、そのときで  
も力やパワーは凄まじいらしい。くく、楽しそうな相手だぜ。

「ちえ、ナギの奴楽しそうだなあ。俺も戦いたいつてのに。」

前見たときよりも格段に動きが良くなっているマミを見て期待してたつてのに。

「……待てよ。あいつも誘っちゃまえばいいのか。そうすれば機械獣やアイツとの勝負をいつでもできるんだし。」

くくく、我ながら名案だぜ。後で実行しないとな！

「まあ、今はお前との勝負だな。ガラダブラだったか？魔獣はいろいろ見てきたがお前はその中でも飛び切り凶悪で強烈だぜ。」

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

ラカンの言葉に反応するようにガラダブラは咆哮をあげ髑髏状の頭部は天を向き、2つある蛇状の頭部は激しく動き相手を威嚇した。

「じゃあ、いくか！」

俺は多数の剣を投擲しつつガラダブラに向かって突進した。

「なんというか、楽しそうだなあの二人は。さて私も始めるか。」

それにしても変わった感じのものだな、こいつは。身体はロボットぽいとはいえ十分人間の感じ出し、頭部形状の人間のものなんだが。

何で顔が左右で違うんだ？それもやたらリアルで男女で分かれて  
いるし。

「ああ、待ちくたびれたぞ。」

「……………え？喋った？」

え？喋りたいよな、今。機械獣って喋るのか？それともこいつだ  
けがなのか？

「我名は機械獣アシュラP1。」

「我主マミ様の命により。」詠春とやら、手合わせ願おうか。」

男性のほうに喋ったり女性だったりいつせいに喋ったりとまた妙  
な……。だが名乗られたからには名乗り返さないとな。

「神鳴流剣士 近衛詠春！いざ尋常に勝負！！」

「ふふふ、ゆくぞ！」

見た目は変だが油断はできない。こちらも全力でいかないとな。

「やれやれ、ナギのでたらめさは慣れたのですが、それと渡り合える人がこうもいるとは。」

「ラカンもすごいが、あのマミも凄まじいものじゃな。技術ではまだナギが上じゃが。」

「ええ、魔法をくらってもモノともしてませんね。繰り出す攻撃もラカンくらいはあるんじゃないでしょうか？」

「じゃな、おそらく身体能力ではあいつ等より遙かに上なんじゃろ。」

「その身体能力が脅威ではあるんですけどね。あの技量であの破壊力は彼女もバグかチートの仲間なんでしょうか？」

「かも知れんな。ラカンのほうは…派手じゃなあ。」

「彼とあの大きさじゃしょうがないのでは？こちらはラカンが優勢でしょうが。」

「そのようじゃが、向こうもあまり効いている様子はないの。これはガラダブラじゃったか？がすごいのかラカンの奴がめっちゃくちゃなのか。」

「1.5倍はあるでしょうからね。おそらくラカンでしょう。普通は戦うことすらできないサイズと能力差でしょうし。」

「実際に詠春はかなり苦戦しておるの。」



「ははははは、どうした！そんなものか！！」「それでは我主と対  
じする事すらできぬぞ。」「死ねえい！！」「  
「く！やりにくい。さすがにキツイな、だがこれくらいで負けるも  
のか！」

「向こうは10倍がいいところじゃろうが、やはりサイズと装甲は  
厄介なようだな。」

「あれらより格下でも普通の魔法使いの中級呪文を無力化してしま  
うようですからね。ましてあのアシユラは人のように考え行動する  
のですからさらに厄介でしょう。」

「関節を狙っているが見抜かれているようじゃからな。確かにアレ  
はやりにくいのだ。」

「ですが、優勢劣勢といってもすぐに勝負が決まるほどのものでは  
ないですね。」

「ああ、これはいつぞやのように長引くぞ。」

その後、彼らは十数時間戦い（長いな！by撤退の連絡に来たフ  
ラガ）、周辺一体を更地にしたところで（おいおいおいby見てい  
たry）

「そろそろ止めにしない？」

「何だよ。まだまだいけるぜ！」

「そうだぜ。やっとガラダブラから腕一本もぎ取ったつてのによ。」

「よくもぎ取れたな……。」

「「ぬう、ガラダブラMk01が…、敵は討つぞ。」

「討たなくていいから！私は冗談抜きで死んでしまつぞ。」

「確かにもう少ししていたい気もするけど、そろそろ彼方たちも目的地に向かったほうがいいんじゃない？」

「そうですね。元々そちらが本来の目的でしたし、帝国軍も撤退したとあってはいい加減向かったほうがいいでしょう。」

「んだよお。どうせ行つたところでつまんねえんだし。」

（ここはさっきの事切り出すのがよさそうだな！）

「じゃあ、ママお前も俺達の仲間になれ！」

「おージャックいい案だなそれ！そうだママお前も俺の紅き翼に入れよ。」

「え……、それはちょっと。」

「そうだぞ。皆ラカンのように無茶苦茶じゃないんだから。」

「じゃあ、何か連絡取れるものよこせ。それならいつでも手合わせができる！」

「それならかまわないわ。私もちょうどそうしたかったし。」

皆と連絡先を交換した後また会う約束をして分かれた。

「さて彼方たちを戻しましょうか。」

「それなのですがマミ様。」

「そうしたの？」

「私を副官として側につけて貰えないでしょうか？」

「え！でも彼方たちは戻さないと修復とかができないし。何よりそのサイズじゃ。」

「それは問題ありません。」「私はサイズを人間大にすることもできます。」「また、戦闘をしなければ向こうに戻るほどの磨耗をすることもないので大丈夫かと。」「」

「そう、少し考えさせて。どちらにせよ今日の戦闘の傷の修復のために1回は戻らないといけないのだから。」

「了解しました。では、必要になりましたら。このアシユラをどうぞお呼びください。」「」

「ええ、その時はよろしくね。」

そういつて、2体を戻した。でも、彼（彼女？）を呼んだときも驚いたけどまさか副官について。

でも、参加してから各地を転々としているし。固定の副官を持つて良いかもしれないわね。

「ま、明日になってから考えましょう。今は皆のところに戻らないとね。」

その後、撤退した彼らに合流拠点へと帰還した。

オステイア奪還作戦はやっぱりというか失敗したらしい。いくつかの部隊は防衛のため残ることになったが私たちや正規軍の多くが帝都へと一時帰還していった。

---

---

どことも知れぬ闇の中蠢く影がなにやら話し合っていた。

「どうやら無事失敗したらしいな。」

「ええ、しかし連合も同じくらい疲弊してしまったのは少々誤算でしたね。」

「奴らがもう少し早くつくと思ったのだがな？」

「途中で足止めをくらったようだ。」

「しかし、そちらの帝国の損害も少なかったようだ。」

「アレが思いのほか使えたようだ。」

「ふむ。しかし、帝国の力をそぐつもりでいたが現状では代わり映えなしか。」

「そうになると、アレをやりますか。」

「できるのか？失敗すれば戦争は終わってしまうぞ。」

「問題ありません、奴らも帰還しました。後は帝国の奴を離しておけば、帝国の力は大幅に落ちるでしょう。」

「うまくいけば逆侵攻も可能か。最悪奴が感ずいて向かったとしても。」

「そう多くの兵は救えないでしょう。救えても当分戦線復帰は難しいかと。」

「講和派の連中は納得するのか？」

「そのための理由と資料はすでに。会談の準備も進んでいるといえは、問題はないでしょう。」

「連合はどうだ。あまりにも不甲斐ないと成功してしまいませんぞ。」

「現在戦力を集結中です。帝国兵はあそこから一步も出られないでしょう。」

「さらにアヤツ等もいる…か。ふむ、問題なさそうだな。」

「他に何かあるか？」

「以前から嗅ぎ回っていた者なのですが。」

「何かあったのか？」

「どうやら奴らには行き着いたようです。」

「ほう、なかなか優秀なようだな。」

「ええ、そうですね。しかし奴らに食いついたならある意味都合が良いのでは？」

「そうじゃな。奴らの情報をそれなりに流してやれば、それに気づいた奴らが勝手に始末してくれるじやろう。」

「そうですね。その案でいきましょう。」

議題にも一息ついたのだろう。雑談に入った。

「しかし厄介なものだな。これだけあおってもあまり進展しないと

「いつものよ。」

「向こうの人たちがうらやましいですね。」

「ああ、向こうは多少あおって戦争に突入すればそれで事足りる。」

「こちら側からの妨害も多少あるようですが？」

「前はそれに煮え湯を飲まされたようだが、今はそんなもので止まるような状況じゃないそうだ。」

「転がりだした石は止まらない、ですか。」

「まさにそのとおりだな。」

「最も行き過ぎて今では起こすこと自体難しくなっちゃってしまっただらしいがな。」

「なんともまあ。」

「今はターゲットを変えているそうじゃな？」

「でしょうね。不満を持っているものはまだまだ多くいるでしょうし。」

「かつて程ではないが、より多くの混乱か。」

「「こちらは不満は多いでしょうが、ある意味で安定していますからね。」

「ああ、小競り合いが多いが向こうと比べるとな。」

「昔は向こうのほうが大変だったようですね。」

「こちらの小競り合いの規模を小さくしたものだからな。」

「まさにスポーツですか。」

雑談も一段落したとき一人が

「あの方の様子はどうです？」

「お目覚めになる回数は増えてはきたがまだだな。」

「何が足りないでしょう。」

「器が問題なのでしょうか？」

「馬鹿なアレが今の器なのだぞ。」

「そうなるら一体。」

「おそらく力そのものでは？」

「“力”？」

「ああ、この世界の成り立ちは知っていますよ。」



「なるほど、そうなるこそちらのほうも。」

「ああ、準備しないとな。」

「それにそうすれば世界は。」

「混沌と憎悪に…、アチラも多数集まりますし。いい事だらけですね。」

「ふむ、我々は急ぎすぎていたのかもしれないな。」

「仕方ないでしょう。あの御方が目覚め始めたと聞けば誰だっ気がつかぬ内にそうなります。」

「ええ、今からしっかりと先を見据えて動けばいいのじゃからな。」

「では、私達は」

「ああ、そちらは任せた。あれらにもそれらしいことを吹き込んでおけ。」

「ええ、わかっていますよ。全ては」

「「「「「我らが主！この世の真の所有者！ 様のために！」

影は順次消えていき再び闇が多いつくした。

## 大分裂戦争<撤退戦>(後書き)

ええ〜と、あいも変わらず戦闘描写ないです……。でも、最終決戦はきっちり書きます！マミの相手と結末は決めてあるのでそこはしっかりしたいですし。

アシユラどうでしょう？思いついて書いてみたけど……。あまりにも不評だったら今までどうりかな。Dr・ヘル一味は結構好きなんですよね。

最強機械獣はこの2体かな。他にもいるだろうけどとりあえずでw もう1体いるけど、あれは使いどころが難しすぎる。DVDで見たけどかなりの制限つけないとちょっと……。

### 次回予告

「今大戦で最大規模の戦闘。帝国の乾坤一擲の大作戦。迎え撃つ連合、そのとき彼女は」

次回 真ネギま マギカZ

「大分裂戦争<グレートブリッジ>」

サブタイに偽りなし！……のはずw

## 大分裂戦争<グレート・ブリッジ1>(前書き)

気がついたらPV6000ユニーク10000突破!

ありがとうございます><

やっとグレート・ブリッジまで来ました!

1話で終わるかと思ったら長くなりそうなので分けます。

## 大分裂戦争<グレート・ブリッジ1>

紅き翼との戦闘後撤退した先で待機すること数週間後、帝都からの使者が

「先日の作戦において、本隊の撤退を援護その損害を軽微に抑えたことまた連合の精鋭集団<紅き翼>押し止めていた功績と実力を認め、我々は貴君を王族付きの護衛官とする。よってすみやかに帝都に帰還せよ。よくやった、栄転だな。」

「わかりました。皆に挨拶をした後に向かいます。」

「遅れないようにな。」

その後フラガさんや隊の皆に挨拶をして回っていると

「まあ、アレだけの事ができるんだからな。けど寂しくなっちゃまうな。」

「ママさんは数少ない女性ですからね。」

「まったくだ折角再会したてのにもうお別れとはね。」

「ああ、まったくだ。」

そうそう、ラリーさんやチョッパーとも再会したの。

「ええ、残念ね。でも、傭兵部隊がこんなに集まるなんて珍しいわね。」

傭兵がここまで集まることはあまりない、基本的に予備兵力や正規軍の通常編成+ の戦力が欲しいときに使われるのが傭兵なのだから。

「前回の戦いで正規軍がこっぴどくやられたからその代りじゃないか？」

「だろうな、戦線もいくらか下げたようだし。本国から増援までの繋ぎだろう。」

「そんなところかしらね。じゃあ、遅れるとまずそうだからもういくわ。何かあったら言ってね。すぐに戻ってくるから。」

「おいおい、それじゃあ護衛官どころか、帝国軍からも追い出されかねんぞ。」

「いいわよ。元々戦功の為に参加したんじゃないんだから。それより、親しい人達が傷つかないようにすることがもつと大事よ。」

「俺たちや、傭兵だぜ？」

「それでもよ。」

「じゃあ、やばくなったら作戦中でも遠慮なく呼び出そうかね。」

「ふふ、すぐに駆けつけてあげるわね。」

そう笑いあって、まずそんな事態にならないだろう約束をして私たちは別れ、私は船で帝都へと向かった。

「マミ様あまり嬉しくないようですね。」

「ええ、戦いたいつて分けじゃないけど。護衛官になったとしても戦争の終結には役に立てそうもないからね。」

宮廷作法なんてものもまったく知らないのだから。

「なるほど、マミ様は親しい人が傷つかないようにと」「戦争が一刻も早く終わることを願って参加されたのでしたね。」

「ええ、でも護衛官じゃ周りの皆を守ることさえできないからね。」

「なるほど、しかしそれならば。」「王族の近くに居ることになるわけですから。」「マミ様自らが皆に停戦を訴えてみてはどうでしょう?」「」

「なるほどね。そんな考え方もあるわね。」

確かに王族付きの護衛官になるのだから人脈作りにはちょうどいいかもしれない。それに護衛官なら和平交渉にも付いていけるのだから妨害も防げるかもしれない。

「このあしゆらも微力ながらお手伝いいたします。」

「ええ、色々相談に乗ってね。」

一人旅つても寂しいからあしゆら呼び出して話し相手になってもらっている。ちなみに彼(つて事にしておく)の服装はおなじ

みのアレである。

でもさっきから、よく兵員輸送船とすれ違うわね。前線への補充にしてもこの数は。

「アレは……」

「あの紋章は帝国の精鋭部隊のものでしたかな？」「確かに妙ですね。」「あのような部隊は早々動かすものではないはずなのですが。」

その後しばらくして部隊とすれ違うことはなくなり、数こそ多いがただの補充かまた大規模作戦に向けてなのかと思いいそのことは頭の片隅に置いた。

数日後、無事帝都に到着し王城に向かおうとしたとき何故あれだけの兵員輸送船が精鋭部隊が傭兵たちが集められているのか、その理由がわかった。

<昨日！我々帝国は連合の喉元にあるグレート・ブリッジへ帝国が誇る大規模長距離転送魔法によって精鋭軍団を送り奇襲・占領した！！これによりもはや連合は風前の灯である！我々の勝利の日、そして聖地オスティアの奪還は近い！！>

「何ですって！」

そんな、勝利どころか終戦がより遠退きかねない。それどころか

帝国が敗北する可能性だつて。

「アヤツ等は地図も読めぬのか?」「グレート・ブリッジ(以下G・B)を占領したとて補給が続くまい。」「連合の喉元、確かにM・Mの至近ではあるが。」

「ええ、連合もそこまで柔ではないでしょうし、首都に近いって事はそれだけ増援が送り易い。」

「されど、帝国からG・Bは遙かかなた。」「しかも途中にはオスティアに居る連合の防衛軍もいる。」「海を使おうにも制海権はアチラのほうが優勢。このままでは。」「」

補給が途絶えた軍の末路は古今東西皆同じだ。

「G・B攻略軍は最悪消滅、そうじゃなくても大半の戦力を失うことになるわ!」「」

「「侵攻に使ったものも転送魔法というのもまずいですね。」「」」「彼らに帰りの足はない。」「大半どころか2、3割が戻ってくれば恩の字か……」」

本当にこの作戦を考えた人は何を持って成功すると考えたんだ! 正規軍がこの規模なら傭兵も!

「ラリーさん達ももしかして!」「」

ここまで大規模ならあそこに集結していた用兵の数も合点がいく。

私は慌ててゼウスからもらったあの紙を取り出し繋げてみた。こ



れ、声さえも届けられる上に距離は関係ないとかかなり便利だったの  
で重宝していたが。」

しばらくして、応答があった。

<マミか？>

「ええ！今帝都に居るのそれで」

<って事はもう知ってるな。今俺達はG・Bだ>

「やっぱり。」

やっぱり、あそこの傭兵たちも送られていたのね。

<今はまだ連合は攻めてきていないが時間の問題だな。さっきから  
偵察らしきものがちらほら見えている。>

「持ちこたえられそう？」

<無理だな。もって1週間とこだ。それだっただいぶ甘い見積も  
りだからな。何せ長距離転送で奇襲占領って作戦なせいで鬼神兵や  
艦艇はほとんどないからな。せいぜい18mクラスが十数体じゃね  
えか？>

いくら連合が帝国より魔法技術で遅れているといってもあまりに  
も少なすぎる。それに18m級じゃ艦艇からの砲撃をくらったらひ

とたまりもない。

「要塞のシステムは？」

<解析して入るがどうだろうな。そう簡単には使えねえだろ、連合だつて馬鹿じゃねえ。>

やっぱりそう簡単にはいかないか。

<それに悪いニュースも入ってる。>

「まだあるの？」

>  
<ああ、飛び切り悪いものがね。紅き翼が前線に復帰したみたいだ。>

「え！でも数日前は何も。」

<それはわからねえ。だが確実に居るらしい。他の場所から転送されてきた連中が話していたからな。>

「そんな彼らが居たんじゃ。」

でもなんで、彼らが居るって事が知られていなかったのだろう？

<下手すればもって1日だな。あとは必死に逃げるか玉砕するしかねえよ。>

「そんな……。今から私も！」

< やめとけ、お前一人が来たところでどうこうなるもんじゃねえ。  
それよか、お偉いさんにもう二度とこんな事させねえよ見張って  
くれ。 >

「でも！」

< 無理だよ。どう頑張ったところでこれだけの人員を運ぶための船  
を数日中にこっちに寄越すなんざ。しかもそれが無事に着くかどう  
かも怪しいしな。 >

「……。」

じつさい、低速とはいえ帝都とあの拠点まで数日も掛かるのだ。  
軍の高速船でもG・Bまでになるともっと掛かるだろうそれに問題  
は他にもある。

< だから頼む。もっと出世して、上を目指してこんな戦争をおこさ  
ねえように……。 >

「……それがラリーさんの夢？」

< ああ、この戦争に参加したのだからお前と似たようなものだから  
な。じゃあ、そろそろ時間なんぞな。相棒も待っていてくれる。  
なあに、今の相棒もお前に劣らずげえ奴だし俺もすげえからな。  
死にはしないさ。じゃ、あばよ。 >

それつきり通信は切れた、他の人にも連絡はしてみたが皆同じよ  
うなことを言われてしまった。

「そんな、また会うつて約束したのに……。」

「ママ様。」「今は何ができるか考えましょう。」「落ち込んでいても何も解決しません。」

「ええ、そうね。でもどうしましょう……。諦めるなんて論外だし。」

「軍高官を説得しようにもあてもないですからね。」「また、彼が言ったとおり救出しようにも現在帝国が保有している輸送船では危険が大きい。」「距離だけならば来るまでにすれ違ったあれらが向かえば何とかなるでしょうが。」「」

現在の帝国の勢力圏とG・Bの間には連合の部隊も居るだろうし何よりG・B周辺は完全に連合の勢力範囲だ。護衛艦があればいいけど……。

「護衛艦もとなると集結する頃には戦いは終わっている可能性が高いわね。」「」

手詰まりね……。まって、何で帝国軍だけを使おうと考えてるの。

「ねえ、あしゅら。」「」

何も帝国軍の機材だけである必要はなかった。ちょうど私には護衛機も輸送機もある！

「現地の指揮官に話をつけてぎりぎりまで接近するにしても…、何でしょうマミ様？」

「グールいえ、ブードやサルードも動員すれば何名まで救える？足りないなら飛行機械獣を護衛につけて輸送船を派遣するとか。」

各要塞シリーズも積みめば1個師団は入るでしょうしサルードなら2個か3個、それにグールの速度ならピストン輸送もしてもいい。飛行機械獣もそれなりの数は居る。

「そうですね、グールやブードを使えば2、3割はいけまじょうか？」  
「輸送船は現地で交渉してみないことにはなんとも言えませんが。」  
「敵地に向かうわけですからあまり多くの船は使えないでしょう。」

「それでも頑張ればかなりの数の人達を救えるわね。」

「その可能性はありますが、まさか！」

「ええ、戻るわよ。」

「しかしそれでは。マミ様が。」

「ここであの人達が死ぬかもしれないのを黙ってみている事の方が私には問題よ！例え帝国軍から追い出されてもやれる事だつてあるわ。」

今動かなかつたら私は一生後悔する事になる。それにあのゼウスならこんなとき友のために動かない人なんて好ましく思わないでしょうしね。

「「わかりました。このあしゅらマミ様のためならどこまでも着いていきます。」」

「ありがとう。じゃあ、ぐずぐずしてられないわね。来なさいグール！」

すぐさまグールに乗り最大速で来た道に戻っていった。

「お願いします。輸送船を1隻でもいいのです。救出に向かわせてください！」

グールで戻ったため数時間で元の場所へ戻った私は司令部に直行し司令官の人に輸送船の要請をしている。

「しかし、君もわかっているのだろう。それがどれだけ危険なの事なのか。私もこの作戦に思うところがないわけではないが。だからといって部下をむやみに死地へ行かせるわけにはいかん。」

「護衛部隊はやはり。」

「単なる領域内での輸送任務だったからな。精鋭師団も輸送船だけできている。」

「護衛ならあてがあります。救出船もですが1隻でも多く欲しいの

です。」

「しかし……。」

やっぱり、あまりにも無謀すぎるため。相手の返事は良くない、でも諦めるわけにはいかない。再度口を開こうとしたとき1人が入ってきて。

「司令。」

「あなたは？」

「私はここまで帝都の精鋭達を運んできたものだ。司令官殿、話だけでも聞いてみては？できないはそれから判断しても。」

「しかし、輸送船を出すとなると。」

「私達は喜んで行こう。他の者は志願制にし腕のほうも私たちが確かめます。航路も多少迂回すれば危険は減らせるでしょう。連合の反抗も明日か明後日には始まりません。ならば今すぐにも決めなければ手遅れになってしまいます。」

「わかった話を聞こう。しかし、無理と判断したときは出させないぞ。無論君もな。」

「ありがとうございます！」

集まってもらった人達に考えた作戦を説明した。

内容はいたってシンプルでG・Bの連合側の地点は私が単身赴きグール以下要塞を展開機械獣と私で足止めをしているうちに収容撤退。オステイア側は飛行機械獣の護衛の下輸送船団が海上を迂回しながら接近同じく収容後離脱となる。

この内容に輸送船の艦長は海からアプローチすれば連合の艦隊に捕らえられる可能性があるから最終段階では陸を進むと提案し、参謀の人は肝心の機械獣の力を見たいといったのでジェノサイダーF9などを見せて納得してもらった。

他にも残っている部隊で陽動をかけるなど打合せをし、志願者の募集・選別をおこない24時間後に作戦を発動することが決定した。

「我俣を聞いていただきありがとうございます。」

「何かまわんよ。私も助けることができるなら助けたいからね。ただまだ、博打的要素はあるが最初のような絶望的なものではなくなったからね。輸送船の船長たちも思ったより多く集まったのだし。」

あの艦長以外にもこの作戦が危険だと気が付いた人達は救出作戦の参加を希望してくれたおかげでより多くの人員を輸送できそうだ。

「それでも、危険なことに付き合わせてしまいますね。」



「我々はそれが本分だ。それに彼らは志願したのだ、あまり自分のせいなどと言うと彼らに失礼だ。」

「すいません。」

確かにそうね。彼らも自分で決めているんですから。これ以上の心配は彼らの決意を馬鹿にすることになるわね。

「それに危険度で言えば君のほうが遥かに危険だ。最強の2体を輸送船団に付けさらに多くの機械獣をだすのだ。君のほうは君自身が囷となり防波堤となるのだらう?」

「ええ、それが一番成功率が高いのですから。」

移動速度と陸戦機械獣の召喚という仕事もあつて私は一足先に戦場につくことになる。付き次第グールなどの搭乗をしてもらうことになるが輸送船団がより安全になるように私は前面に出て敵を引き付ける必要がある。

「しかしいくら傭兵だからといって。」

「大丈夫です。私はあの紅き翼と戦えるのですよ。それにもう決めたんですから。覚悟はありますよ。」

「ふふ、そうだな。確かにこれでは君に失礼か。私はつてを頼って噂の真実を確かめよう。もし本当ならこの作戦にも意味が出てくる。」

「はい、お願いします。」

もし本当に交渉がおこなわれているなら1時的にでも攻勢を抑えれば終戦が見えてくる。

「なら、健闘を祈る。」

「はい。」

#### 24時間後

作戦会議から24時間後。すべての準備が整い、輸送艦の周りには飛行機械獣がたたずんでいる。グールもすでに準備を終えていつ。しかし、すでに連合が奪還に向けて大規模攻撃をかけており一刻を争う事態になっている。

「じゃあ、あしゆら。飛行機械獣の指揮任せたわ。」

「お任せください、このあしゆら命に代えても船団護衛を果たしてみせます。」

「ええ、頼りにしているわ。それじゃあ、艦長さんまた会いましょう。仲間たちと一緒に！」

「ああ、また皆で宴を開けるよう連れ帰ってこよう！」

私達はそれぞれの機に乗り込み見送りのならG・Bに向けて飛び立っていった。

「進路グレート・ブリッジ！飛行要塞グール高度1万m、最大巡航速度へ！」

皆、なんとしても助け出すわ！

( side 船団 )

「やはり心配ですか？主のことが。」

「ふん、あのお方は私が心配するほど柔ではない。むしろその後が心配だ。」

「王族付きの護衛官を蹴ってきたのですからね。」

「まあ、我主はそのことは気にしていないようだがな。それで、進路はどうするのだ？」

「いったん海上に出た後G・Bに近づいたらそこから陸沿いで行く。それなら発見の可能性は少なくなるだろうが。」

「G・B周辺で連合の部隊と鉢合わせになる可能性が高いか。」

「ああ、そこは君たちに任せるよ。時間は速度と距離のせいで2日ほど掛かるが機械獣たちは大丈夫なのか？」

「進むだけなら問題はない。だが最悪は帰りの護衛が居なくなる事になるかもしれないがな。」

「帰りは何も考えずに飛ばせばいいだけだから心配要らない。それにその頃にはうるさい八工は全部片付けてくれるんだろ？」

「無論だ。」

これから2日連合に見つからないように彼らは低空を迂回しつつ進んでいった。

(side グレート・ブリッジ帝国軍)

時は少し戻りグレート・ブリッジの帝国陣地。

「もうそろそろかな。」

「だろうなここはメガロに近いからな敵も必死だろう。」

「だが敵を撃退すれば戦争終了。で、俺達は英雄だ。」

「そうだな。そのためにはなんとかしても生き残るぞ！」

「「「おっ！」「」」

陣地の各所では同じように互いを励ましあいこれから必死で奪還

のために攻めてくるであろうそのときに受ける圧倒的恐怖に打ち勝つために。

ここで踏ん張れば戦争が終わると信じて。傭兵達はこの作戦の無謀さに呆れているが、正規軍の将兵たちはここで自分たちが頑張ることが帝国の勝利につながると信じていた。

噂ではここを短期間でも占領すれば現在進められているという交渉にめどが付くとあったからそう信じているのだ。

「あつちは張り切っているな。」

「だな、どうする逃げるか？」

「どこにだよ？帝国には戻れねえし、連合に逃げてもどうなることか。」

「だな、結局こっちで戦うしかないんだよ。お前だって自分の手で故郷を焼きたくはないだろ？」

「当たり前だ。」

傭兵達は正規軍ほど希望を持っては居ないがこの大戦が従来の戦争と違って逃げたところで助かるものではないと知っている。自分たちの故郷がある帝国で戦うしかないと決めていた。

「それに噂が本当だってんなら、踏ん張るしかないだろ？」

「他にいい案もないからな。」

「ああ。」

「じゃあ、勝って帰ってまた宴を開くか！」

「「「ああ！」「」」

正規兵たちとは違った。しかし、大本は同じ決意を胸に彼らも連合の攻撃を待ち構えた。

それから数時間後。

「来たか。」

双眼鏡を覗いていた、指揮官の目に水平線を埋め尽くさんばかりの連合軍艦艇が映った。

「オスティア方面およびメガロ方面からも部隊が進行中のようです。」

「要塞の防衛システムは？」

「現在60%です。今も進めていますがおそらくこれが限界かと。」

「技術仕官以外は戦列に復帰させよ。なんとしても耐え抜くぞ！」

「は！」

「マイクをくれ。」

「どうぞ。」

「うむ、<諸君！ついに連合がここを奪還するために戦力を差し向けてきた！これからはつらい日々が続くだろう、だが！この攻勢を耐え切ったときこそが我々の勝利だ！そしてその勝利は終戦という形で大いなる勝利をもたらすだろう！諸君、なんとしても生き延びて皆で勝利を味わおう！>ふう、どうだったかな？」

「すばらしいです。皆もより奮起しています。後は連合の攻勢を抑えれば、我々に有利な条件で戦争を終わらせられます。」

「そうか、終戦か…。いや、ならばなんとしても奴らを跳ね除け生き残らなければな。」

彼もまた決意を胸に連合の艦隊をみすえた。

「ええ。」

「將軍！精霊砲の発射準備完了しました！」

「よし、まずは奴らのご真ん中に打ち込んでやれ！」

「了解！第一目標 連合軍艦隊弩級戦艦！精霊砲圧力上昇、臨界まで残り10秒！」

「発射スイッチです。この戦闘の狼煙を！」

「うむ。」

4…3…2…1

「精霊砲発射！」

…0

グレート・ブリッジより放たれた一筋の光。今大戦最大の激戦地、連合名「グレート・ブリッジ奪還作戦」の幕が切って落とされた。



## 大分裂戦争<グレート・ブリッジ1>（後書き）

グレート・ブリッジ戦まだ導入だけど長くなってしまったので、分けることに。下手したらもう2話いきかねないなあw

わりと否定的な人が多いように書いてしまいました但那れなりに樂觀視している人もいます。ただ、原作を見直していると載っている帝国の勢力範囲からグレート・ブリッジってかなり遠いんですよね。それより増えているなら早々逆侵攻なんてことにはならないでしょうし…。って事で何か否定的な人が多いようなことになってしまいました。

時系列とかも色々弄くる事になりそう。（タカミチ少年とガトウもう合流させちまおうかな・・・）  
次回からは機械獣を大暴れさせる予定です。

本文中の師団とかは目安程度です。大体これくらいかなって感じで。ちなみに師団は1万人くらいです。

大分裂戦争くグレート・ブリッジ2 (前書き)

グレートブリッジ編2です

前回の倍近くとなってしまいました……。

## 大分裂戦争<グレート・ブリッジ2>

(side マミ)

「グレート・ブリッジまであとどれくらい？」

「残り3時間ほどかと。」

飛び立ってもう数時間くらいかしら。連合との接触を避けるコースを飛んだから時間が掛かってしまったわね。これだと、ピストン輸送をしても1日2回が限界か。戦況にもよるけど、現地部隊もいつまで持つか・・・、そうなると10回もする事はできないでしょうね。

「マミ様、通信です。」

「わかったわ。繋げて。」

ちなみに要塞シリーズの兵員はなぜか鉄仮面軍団だった。やっぱり鉄十字軍団だと問題があるのかしら？

<マミ君か？今どのあたりだ。>

「もう3時間ほどで到着します。」

<戦況はまだ安定しているとはいえいつ崩れるかわからん。撃破された鬼神兵もいるようだ。>

空挺部隊だけを最前線に送ったようなものだから当然か。

<また、例の噂なのだが。>

「どうでした？」

<どうやらまったたくのでたらめらしい。友人に聞いてみたところ彼も会談を成功させるためにこの作戦を了承したらしいのだがそのよ  
うな話はまったくもってなかったそうだ。>

「そんな、そんな嘘をついてまでおこなうなんて。」

<まったたくだ、そのものたちは処分したらしいが、それでどうなる  
ものではない。>

そこまでしてだなんて。前から思っていたけど、この戦争は違和  
感ばかりだ。本格的に調査したほうがいいのかも。

<ともかく救出作戦は続行だ。会談が無い以上このままあそこに留  
まってもしょうがない。1人でも多くの者を救ってくれ！>

その違和感はとりあえず置いてきましょう。今は目の前の作戦  
に集中しないと！

「わかってます。一人でも多く連れて返ります！」

<頼む！>

お願い間に合って！

(side 帝国軍)

今やグレート・ブリッジは向こうの世界の戦争と間違えるほどの濃密な砲火と血で覆われた。

最初帝国軍は連合は波状攻撃をかけてくるだろうと予想していたが、本拠地至近に陣取られた連合は必死に各地から戦力を集め絶え間ない攻撃をかけてきた。

インターバルも何もないその攻撃に元々物資や兵力に不安がある帝国は徐々に押されだし、鬼神兵も一機また一機と失い当初の予定を上回る勢いで消耗していった。

「うち！まさか本当に1、2日しかもちそうに無いとわな！！」

「いっててもしょうがないだろ。こちらの損害は？」

「お前は冷静だな。かなりヤバイな向こうの正規軍もかなり削られているようだ。陸からの侵攻軍も雪崩れ込むのは時間の問題だ。」

「こんなときだからだ。……そうか、負傷したものをオステイア側に向かわせて再編成しよう。」

「少しでも逃げられるようにか？」

ホント冷静だなこいつは、だがもう負けはほぼ決定しているか。なら生き残る算段をつけないとな！

「それにお前が話してた彼女が来るかもしれないだろ？なら、少しでも長く踏ん張らないとあ。」

「アイツか……、確かに来そうではあるがアイツ1人じゃ。」

アイツがいろいろ呼び出せることは知ってはいるがこんな数を運ぶなんて無理だ。

「何も彼女だけともかぎらんだろ。それにどうやらきたらしいな。」

「なに？」

サイファーが何を捕らえたかすぐ知ることになった。俺達の向こうグレート・ブリッジの連合側の端で爆炎が上がった。その上空には銀色の光るものがある……。

「あれは確か飛行要塞グール！」

「だろう？さあ、倒れるわけにはいかなかったぞ！」

だな、あいつが来たんだ少しは希望が見えたかもな。しっかし、馬鹿やっちゃまってよ。どうなってもしらねえぞ！

グールが目撃される少し前、彼女は帝国軍の指揮官と撤退について話し合っていた。

< 作戦内容は以上です。私が連合を少しでも抑えるのでその際に撤退を。 >

「しかし、それほどの戦力と輸送力があるのならば。このまま占領維持できるのでは？ 貴様も速やかに戦列に加わり帝国の勝利に貢献せよ！」

こいつは本当に参謀なのか！ 先ほどの説明を聞いてもまだこんなたわごとを抜かすとは！

< ですから、機械獣をもつてしても戦線の一時的な維持ならともかく恒久的に占領することは不可能です！ 一度戻したものは24時間復帰はできなくローテーションをしたら戦力が足りません。グール1機では補給線の維持など不可能ですし。何より連合が封鎖作戦をおこなえばより困難になります。 >

彼女の保有する輸送機ではグールがもつとも速く現在の状況に適しているが1機ではとても足りん、他に2機は輸送量こそ多いが今の状況では手遅れになりかねん。それに…

「それ以前に紅き翼もいる……か。」

彼らが暴れられたら陣形の意味さえ失いかねん。

< はい、彼らに暴れられては帝国は持ちません。 >

「そのようなもの貴様が！」

「そいつを摘み出せ！ここにいっても邪魔だ！！」

まともな意見を言わず先ほどから邪魔ばかりを！無能は味方ほど怖いものは無いとはよく言ったものだ！！

「な！何を將軍ちまよ」さあ、こっちです。「貴様！放せ！！私を誰だと思って！……」

邪魔者を憲兵が追い出してやっと静かになったことで息を吐き彼女と向き合った。

「すまないな。作戦のほうは了解した、負傷者を優先的に撤退させるとしよう。陣形もオステリア寄りに変えよう。」

少しでも帝国に近い地へ後から来る船団に速やかに乗れるようにしないと。

<ありがとうございます。私は帝国側に爆撃後グール以下輸送船は中央に配置後、連合の足止めに入ります。>

ならば我々がする事は1つだな。

「ありがとう。聞いたか皆のもの今より我々は撤退に入る！より多くの兵を帝国の地に送り返すことが作戦の成功となる！」

「了解しました！各指揮官に伝達します。」

「要塞の防衛システムの掌握も進めさせます！」



そういつて、皆自分ができるところのために走っていった。

「すまないな、君には多くの負担をかけてしまう。」

「いえ、自分がやりたいことですからか。」

「そうか。では、健闘を祈る！」

その後、作戦通りグールは爆撃による足止め後グレート・ブリッジに着陸した。

(さあ、これからが正念場だ！負け戦だろうがこのままで終わらせるものか！！)

(side マミ)

降り立った私は挨拶もそこそこにブード、サルードを呼び出し鉄仮面軍団と分身に護衛と誘導を頼み急いで前線に向かった。

連合の艦隊も要塞の砲火を沈黙させつつ徐々に近づいてきている。総攻撃まで時間は少ないかもしれない！

「さっきの爆撃でいったん引いてくれたみたいね。皆聞いて！司令部が今から陣形をオステイア方面に変えるわ。また負傷者も後方へ

の護送を決定したわ。まだ戦えるものは徐々に後退しながら連合を押しどめろよ！」

「しかし、それでは作戦が！」 「和平交渉があるって話だぞ！」  
「けど俺は返りたい！」

「連合の予想以上の反撃に早期撤退を決定したの！大丈夫、連合も何時でもここを攻撃できるとなれば会談を強固に突っぱねないですよ。」

「それならば……。」「頑張った意味はあるのか。」「返れるのか俺達！」 「ああ、連合がまだごねるのならまた来ればいいって事だな！」

「今はとにかく後退を！このままじゃ連合の攻撃に耐えられないわ！」

「わかった！負傷者には誰か付いて運んでやれ！腕に覚えがあるものを中心に連合を押し止めるぞ！」 「「「「「おおおおおおおおお！」「」」」」

ふう、何とかなつたわね。後はここで頑張らないと。

「よお、また馬鹿をしたもんだな！」

「チョッパー！良かった無事だったのね。」

「そう簡単にやられるかよ。今から前線に行くんだろ？案内してやる。」

「ええお願いするわ。」

彼や他の人たちと一緒に前戦にいきそこでラリーさん達にからかわれたが今後の作戦をいい私はさらに前に出た。

<おいおいあぶねえんじゃねえか？>

「でも、これが一番成功率が高いと思うわ。それに私が皆の側にいたら紅き翼も来ちゃうかもしれないわよ。」

<確かにそれじゃあ、俺達はひとたまりも無いか。>

「安心して大船に乗ったつもりでいて。泥じゃなくて超合金Z製の頼もしいやつだね。」

<超合金Zが何かしらねえが、頼りにしているよ。じゃあ、死ぬなよ！>

「ええ、もちろん！」

さあ、派手にいきましょうか！

「参陣せよ機械獣軍団！！！」

その声と共にダブルスM2がガラダK7がキングダムX10がバ



( side 船団 )

「マミのほうは到着し参加したらしい。撤退も順調なようだ。」

「そうか、艦長後どれくらいでつく?」「」

「そうだな12時間といったところか。機械獣だけでも先に送るか?」

「いや、先ほどの話だと我々の戦力が最終段階での護衛戦力のすべてになりかねん。」「」

「そうだな。歯痒いが予定どおりいくしかないか。」

( ) ( マミ様、今しばらくお待ちください。このあしゅら必ずお役にたって見せます。 ) ( )

「グレート・ブリッジ」、大分裂戦争最大の激戦地と後に語られる戦場は短期的に見れば帝国有利。長期的には連合が圧倒的有利で進んでいた。

バマミの参戦、機械獣の投入は一時的に戦線を押し戻し順次後退後防備を固めており連合の損害は増えてはいた。

だが、帝国の損害もまた激しく前線戦力は撤退戦ということもあ

り急速に低下していた。その中で機械獣の活躍は目覚ましいものがあった。

キングダムX10の太刀が鬼神兵を次々に切り払い、トロスD7が敵に突撃し多くの兵を巻き込み、ストロンガーT4の突風が海上より接近魔法使いを吹き飛ばした。

アブドラU6が鬼神兵を潰しつつ空中艦艇に狙撃を行うなどまさに圧倒的な力でDr・ヘルが世界征服を決意した理由がわかるほど大暴れしていた。

「機械の獣」「鋼鉄の怪獣」「何で鬼神より獣が強いんだ!」「あいつらやたらおどろおどろしいんですけど。」「など多数の異名が誕生し知れ渡った。ただの兵器が、である。

マミも活躍してはいるのだがそれ以上に機械獣が目立っているのは確かだった。紅き翼とさえ渡り合っているのだから。しかし、その機械獣といえど無敵ではなく艦砲射撃や大規模殲滅魔法をくらいい機また一機と数を減らしている。1日目は機械獣に多くの犠牲が出たが紅き翼を後退させたところで開始より続いていた戦闘がほんの少し止まった。

予想以上の損害に連合も足を止めてしまったのだ。

だが、帝国もあまり良い状況ではない機械獣の大半が傷つき半数近くは戦線より離脱している。沖合いに集結している艦隊やメガロ

方面の陸軍の部隊も鬼神兵などが乱立している。おそらく明日に総攻撃が開始されるのだらう。鬼神兵を機械獣が多数撃ち破ってはいたがそれ以上に補充されている。

帝国が悲壮な覚悟でいるときに1つの吉報がとどいた。輸送船団が残り2時間の距離に到達したらしい。その報告を受け帝国軍司令部はオスティアに向けての進軍を決意敵を打ち破って少しでも早く接触するためだ。幸いブードとサルードは兵員を満載しすでに出発している陸に場所を打ちしても問題は無い。しかし、それは同時に連合にこちらが撤退していることを完全に悟られるということだ。総攻撃も間近かさにかかって攻撃してくるだらう、その攻撃を受け止める必要がある。

殿として残る部隊を募集し残り全軍でもって帝国は輸送船団とのランデブーポイントへと進撃を開始した。

それを察知した連合は予定を早め総攻撃を開始。膨大な血が流れたグレート・ブリッジ戦その最終章が幕を開けた。

(side マミ)

「く！物凄い数ね！！」

「戦果の拡大ともう2度とこんな事させない為だらう！！」

「だろっな！実際二度も三度もされたいモノじゃないだろアチラさんも！」

私達は今、連合の包囲網を突破して收容作業に入っている本隊と船団に敵を近づけないためにグレート・ブリッジで激しい戦闘をしている。

艦隊のほうは飛行機械獣たちが気を引き付けてはいるがいい加減まずい。私はともかく他の人はそろそろ撤収に入らないと……。

「マミ様！」「兵員の收容」「および脱出の準備完了しました！」「現在船団は帝国領内に向けて負傷者を中心に全速で退避中。健全なものは陸路をたどって帰還するとの事。」「」

やっぱり全員は無理だったか。

「なお船団の指揮官より最大船速で離脱するゆえ護衛は不要との事。また、追撃を分散するために船団をといて各個に離脱をおこなうもよう。」「飛行機械獣は連合軍艦艇の足止めを、陸軍に対してはグロイザーXシリーズを使って足止めをおこなっております。」「このあしゅらとガラダブラ皆様の撤退支援のためもう一働きします」「」

船団に護衛がないのは少し心配だけど引き付けてくれているなら何とかなるかしら？どの道、喰いつかれたら船団なんてひとまわりも無いか……。

「へへ、おっかない外見だがこんなときは頼もしいな！」

「ああ、頼りにしているぜ……！」



「任せて置け！このあしゆらがついたからには勝利は間違い無しだ！」

「ええ、皆グールが戻ってくるまでもう一踏ん張りよ！」

「「「「「おおおおおお！」「」「」」」」

グールが戻ってくるまで後1時間といったところかしらね。彼らはまだいないし何とかなるかしら？

(side 連合)

「えええい！まだ敵の殿を突破できんのか！！」

「はい、頑強に抵抗しているようです。先ほど増援がありましたのでよけい……。」

こちらは連合軍艦隊の旗艦、その中で今作戦の総指揮を取っている提督が一向に帝国の殿部隊を突破できないことに業を煮やしていた。

「あの傭兵連中はどうした！？他の戦線はほぼ終結しているのだろっ！」

「彼らは昨日から戦い続けています。少しは休息を与えなければ。」  
「今働かせずして何時働かせるのだ！あの化け物どもその後ろには帝国の本隊がいるのだぞ！少しでも多くの者を討たねばまた同じことをされる！そうなれば次は無いかもしれんのだぞ！！」

実際、今回の作戦は帝国のほうが大打撃を負っているが連合とて楽な戦いではない。もう一度それも決定的な場面で同じことをされれば……。ならばこそこのような作戦がおこなえる帝国の精鋭部隊を少しでも多くたたいておかねばならない。まして今回大量に確認された化け物 機械獣 の存在がある。もしあれが直接転送されたら……。鬼神兵を遙かに上回る能力を持っているのだ！体でもどんな被害が発生するか。

だからこそ帝国があせってへまをした今回は千載一遇の機会、帝国と連合の差がわかつているゆえ指揮官は檄を飛ばしているのだ。

「紅き翼だったかあいつらはすぐに向かわせる。確か撤退中の部隊は航路と陸路で分かれたのだったな？」

「はい、突破した帝国軍を追撃した部隊の話によるとそうです。しかし、陸空共にあの化け物がこちらを攻撃して思うように追撃できていません。」

「空はおそらくニヤンドマ周辺を突破するつもりだろう。あそこは数週間前に襲撃があったせいであまり多くの兵力は残っていない。陸路はウエスペタリア近辺を通るしかないな。」

「それぞれ高速艇を派遣し襲撃をかけますか？」

「陸はそれで良いだろうが空のほうは高速艇だけでは危険だな……。」

「ならば、高速艇団は迂回しニヤンドマ周辺に展開。艦隊は通常の追撃をしつつあいつ等を引き付けますか？」

「それが一番だな。少々危険だが単独行動の禁止と対空砲火を密にし必要以上の追撃を避ければ被害は少なくできるな。」

連合の追撃作戦は決定し帝国軍殿部隊への最後の攻撃が開始された。

(side 紅き翼)

「まったく、人使いが荒いぜ！」

俺達は前回マミとあった後久しぶりに前戦に復帰そこで八面六臂の活躍をしていた、そこに来て今回のことだ！

当然俺達も参加してすでに多くの戦果も上げているぜ。あの機械獣だったか？あいつらも何体か叩き潰した！

あいつらは鬼神兵と違ってだいぶ強いし何より全て違っていてもしれえ！この戦争が終わったら全部と戦ってみてえ。

「人気者はつらいって事よ。そのれこの作戦終了のあかつきには報酬もがっばりだ！張り切っていこうぜ！」

「たつく、でも殿にはマミもいるんだったか？それなら楽しめそうだ！」

アイツも強いからな。なんとしても仲間に加えたいぜ！

「ちよつと待て！次は俺だつて約束だぞ！！」

「良いじゃねえかよ。じゃあ、俺はあの変な奴にするかな、詠春あいつ強いんだろ？」

「そうだな。パワーだけならあの怪物然としたモノの方が上だろうが意思を持っている分厄介ではあったな。」

「じゃあ、そつちとやるかな！詠春はあの髑髏な！」

あの髑髏も面白そうだが今回はこつちだな。

「なら私とゼクトは周りの機械獣の相手をしますか。」

「あの2体より弱いといっても十分厄介ではあるじゃろつな。」

「つと、見えてきたぜ。」

マミが居るらしき所は機械獣が多数暴れていて要塞の一部が崩落さえしていた。

( side マミ )

「サンダー・ブ레이크！つと、そこ！ティロ・ファイナーレ！」

連合の私たちに対する最大規模の攻撃が開始された。そのおかげでさつきから休む暇さえない。

「突破されても困るがいい加減、引いてくれても良いってのによ！」

「まったくだ、こっちにかまうなってんだ！！」

「まったくね！マジンガーブレード！はあ！！」

マジンガーブレードで近寄ってきた兵達をなぎ倒しているが本当にきりが無い！

「もう一回、グレート・ブリッジに光子カビームを撃ち込んで足止めをするは皆は下がって！」

「了解！」

私は飛び上がりグレートブリッジを斜めに見る場所に移動し現在の最強の武器をはなった。

「光子力！ビーーーーーーム！！」

眩い超高密度のエネルギーの奔流がグレート・ブリッジの構造を直撃、大穴を開けた。そのまま向きを変え雑ぐように動かしただめ広範囲で構造材が消滅崩落し始めた。

その上にいた兵士たちは慌てて退避を始めたが私たちと連合軍の間には十メートル近い溝が出現しとうぶん圧力が低下しそうだ。

「はあはあはあ。やっぱり短時間での連続照射は疲れるわね。」

疲れても威力が変わらないとはいえあまり喜ばしい特徴ではないわね。

「グール到着まであと少し！これなら。」

「よお、マミ何ださっきのすんげえな！」

来てしまったか。

「久しぶり？なのかな、でも今は会いたくは無かったわね。」

「でしょうね。彼方は帝国でこちらは連合。」

「見逃してはくれないわよね？」

「こっちも仕事なんだな。それに帝国に連合を討たせるって分けにもいかなえし。」

やっぱりそうよねえ。でも、私がいるから他の皆に被害が及ばないって思っておきましようか……。

「今回は誰が誰と？」

「今回は俺がお前とだ！あれからどれだけ強くなったか見せてみる！」

「俺はあの顔が左右で分かれている奴だ。詠春はあの髑髏な。」

「私たちも今回は戦いますので。」

紅き翼全員と私＋機械獣軍団か物凄く豪華ね。映画が1本作れそうなくらいタイトルは「紅き翼対マミ軍団vsグレート・ブリッジの決戦」かしら？つとそんなこと考えてる暇はないわね。

「あしゅら、ガラダブラ」

「ははっ！」「グルルウウ！」

「グル到着まであと僅か場合によってはあれも使うわよ！」

「了解しました。」「この小僧めに負ける私ではございません」

「吉報をお待ちください」

「へへ、準備は良いようだな。じゃあ、いくぜ！」

(side ナギ&あしゅら)

「さてとあしゆらだったか早速だがいくぜ！」

「ふん小童がひねり潰してくれる！」「最強の機械獣の称号は伊達ではない！」「くらえ！ルストハリケーン！」

開幕と同時にあしゆらが放ったルストハリケーン強風もそうだが何よりの脅威はその強酸である。鋼鉄さえも一瞬でボロボロにしてしまう威力。生身人間ではひとたまりもない。

ナギは前回マミと戦った時の経験と天武の才ゆえの勘でその危険性を察知、危なげなく避けたところで魔法の射手を放ち詠唱に入った。

「来たれ 虚空の雷 薙ぎ払え 雷の斧！へへ、どうだ！俺だって伊達に最強は名乗ってねえよ。」

「ふふ、確かにそのようだな。」「それは素直に謝ろう。」「だがこのような人間用の小技では私には効かん！私を倒したいのならばもっと威力のあるものを撃ち込むのだな！」

事実、先ほどの連携をまともにくらったはずのあしゆらには損傷らしきものは見当らない。

「へっその言葉後悔するなよ！すぐにスクラップに変えてやるよ。」

「さあ、仕切りなおしだロケットパンチ！&ドリルミサイル！」

あしゆらが腕を飛ばしその断面から小型ミサイルを発射して弾幕を展開。ナギが避けるスペースを奪いに来た。例え避けたところでロケットパンチや他の武器が襲い掛かる。



普通はそこで諦めるか全力で防御に入るが彼は違った。魔法の射手で迎撃しつつ後退し詠唱の時間を稼ぎ。

「南洋の暴風！」

3つ目の選択肢弾幕を消し去ってしまうことを選んだ。

「なに！ぬおおおおお！」

「なめるなって言っただろ！」

迫り来るミサイルの群れを薙ぎ払った南洋の暴風は勢いをそのままにあしゅらに直撃。海上へと叩きつけた！

「はははは、マミ様が手合わせしたいと思うわけだ！」「見事よ！」「あの男より楽しめそうだ！」「おおおおお！」

浮上したあしゅらには今度は損傷といえるものがしっかりと刻まれていた。しかし、彼はそんなものなどともせず攻撃を再開した。

その後、二者は激闘を続けまた長期戦になろうかと思われたとき。

(side マミ)

「やっぱり俺の見込みどうりだな！あのへっぼへぼのど素人がここまで大化けするとはよ！」

「ラカンさんも相変わらずすごいですね。」

「あつたりまえだ、何せ俺は最強だからな！」

前回よりも激しく戦っていると

<マミ！グールが到着したぞ！戻ってきて援護を頼む。あの2人のせいで機械獣はほとんどやられちまっているこのままじゃまずい！>

「わかったわ！」

「なんだあ！もう終わらせる気かよ。」

「ええ！今回は戦うことが目的じゃないからね。」

「だが<はいそうですか>と行かせるわけにはいかないぜ！」

そうでしょうね。普通に突破したところで彼らもついて来たんじや意味がないしあしゅらとガラダブラも来て欲しい。……あれを使いたくないか。

<あしゅら、ガラダブラ><なんでしよう。><グール>

<20秒後にアレを呼び出すわ。その後全速で帰還グール搭乗の支

援を>

<了解しました。しかしアレを使うことになるとは>

<贅沢は言ってられないわ。>

グレートタイフーンを叩きつけ距離をとったところで

<いくわよ!>

「来なさい!地獄王ゴードン!」

普通の召喚とは違う巨大な光の輪が形成されその中から60mはあろうかという巨大な人が光臨した。

地獄王ゴードン、Dr.ヘル最強の機械獣その力はあのカイザーと1対1で戦えるほどの力を持っている。

しかし、そのあまりにも出鱈目な性能せいかアーティファクトの入っているゴードンは未完成版のものだ。力などはそのままなのだ。活動限界が存在しどこぞの巨人張りにわずか3分、自立機能もかなり低くこちらが指示を出さないと木偶の坊、最悪暴走を引き起こしてしまう。再召喚に掛かる時間もあしゅら達でさえ24時間なのはこちらは48時間。戦力としては期待できるものではない。

けど今は、その3分が何よりも貴重だからこそ呼び出した。

「ゴードンその3人を抑えなさい！」

ただ一言単純な命令を放ち私達は全力で現在紅き翼の2人と連合の部隊がいる箇所に向かった。その後ろをゴードンの巨大な剣が通り過ぎた。

(side ラカン)

おいおい、トンでもねえもん残していきやがったな。何だコリヤ動きは微妙だが凄まじい力だ。

「ラカンお前も逃げられたのか？」

「詠春もかこいつに気を取られているうちにな。」

「なぎもそのようだな。しかしどうするか。」

まあ、驚くよなあこんなのがいきなり現れたら。下の連中の足元ですげえ騒ぎになってるし。あ、あの2人が吹っ飛んでいった。あいつらもか。

「なに、アイツが今まで出してこなかったんだそれなりの理由があるんだろう。まともに相手することはねえよ。」

「確かにそうだな。これほどのものを最初から投入されていなければ戦いなんてすぐに終わっているだろう。」

「じゃあ、しばらく付き合いますかね!」

(side マミ)

ゴードンに気を取られていた残り2人をすぐに排除できたのは僥倖だった。今はさらに後退しグールに乗り込む人たちの支援をしている。

「あなた達も早く撤退を!」

「無茶言わないくらお前とあの2体でもこの数は無理だ突破される!ならここで踏ん張っていたほうがあいつらに被害が及ばないんだよ!」

くっ、確かにそのとおりだ連合の攻勢はゴードンが現れたことでよけいに遮二無二突っ込んできている。このままじゃ。

「マミ!まずい連合の奴ら鬼神兵を大量投入しやがった!」

まずいあの数じゃ抑えきれない!

「マミ!グールを発進させろ!このまま雪崩れ込まれたんじゃ全滅しかねん。」

「でもそれじゃあ。あなた達は！」

「そんなときゃ、歩いてでも帰ればいいそれか、お前たちに抱えられてな。」

何にか方法は……。アレを使えば。でもかなり危険だし。って、そんなことより今は

「グール聞こえる！」

<何でしょうマミ様！>

「現在の収容状況は？」

<残りあと僅か10分いえ、5分もあれば>

「5分以内に必ず終わらせて！終わり次第緊急離陸！」

<しかしそれでは！「いいから！！」了解しました！>

5分かなかなか難しいわね。ゴードンももうすぐ消えるしどうするか……。 「グールウ！」

「ガラダブラ！？」

突如ガラダブラが単身連合艇兵を蹴散らし鬼神兵の群れに突っ込んでいった！

「マミ様奴は単身時間稼ぎをするつもりの方ですよ！今のうちに

残った機械獣と部隊の再編を！他にも考えがあるようですしその準備を！」

「ええ！彼の犠牲は無駄にはしない！！」

(side ガラダブラMk01)

彼にはあしゆらのような人間と同じような思考をするようには作られていなかった。ただただひたすらに最強の機械獣として最強の兵器としての本能があるだけであった。

だがその本能が主のために敵の中に突入することを選ばせた。それは兵器ゆえによけいな感情がない故なのかもしれない。

彼とて先の戦いで少くない傷を負っている。詠春とて決して弱くはない。しかしそれでも少しでも時間を稼ぐために、帰還なき侵攻を開始したのだ。

「ガアアアアアアアアアアアアアアアアアア！！」

獰猛に咆哮し足元の連合兵を蹴散らし中央の髑髏の目より突き出した機関砲を乱射、蛇状の首からは破壊光線を撒き散らせつつ、先頭の鬼神兵に突っ込んだ！

鬼神兵も押し止めようとしたがパワーが根本的に違うのだ、正面

だけでなく背中より突き出た翼に当たったものも容赦なく吹き飛ばした。

そのまま中央付近で縦横無尽に暴れだした。豪腕により胴体を粉碎されるもの尾の一撃で首がへし折られるもの破壊光線により爆散、投擲された鎌に切り刻まれるもの。

一騎当千といえる光景であった。ゴードンが消えて攻撃がより激しくなっても彼は暴れ続けた。

味方のだ真ん中ということもあり大規模殲滅魔法こそ無かったが、より強力な鬼神兵の投入、紅き翼の戦闘参加、遙かに多い数。

これではいくら紅き翼級の力があるといっても多勢に無勢すぎる。

翼が吹き飛び、首の一つが切断され、腕がもげる。徐々にしかし確実に崩壊へと向かっていた。

しかし彼はついに目的を達成したのだ。

< 収容完了！グール飛翔します！！ >

兵員の収容完了とグールの飛翔。それらを見届けるように彼は連合の攻撃を一身に浴び還っていった。



(side マミ)

ガラダブラ…、ありがとう。

「マミ様次は私が」「艦艇も近づいてきています。」「チャンスは今しか。」「では、また後ほど!」「」

「あしゆら!……みんな今から帰還するためのモノを呼ぶけどこれはかなり危険よ。」「」

「帰れるんならなんでのいいさ!」「」

「ああ、危険はもとより承知の上だ!」「」

「陸路で歩いて帰るよりいいだろう。」「」

「ありがとう。で、問題なのはこれには座席なんて気のきいたものが無いって事と最低速もかなりの速度なの。」「」

さつき確認しても問題なくOVA版だったこれなら乗れはするけど、速度と乗る場所はどうにもならない。人員輸送用じゃないのだから。

「それにタイミング的に1回が限界よ。私は自力で離脱するけど彼方たちは必ずしがみついで。」「」

「ああ、死んでも放すもんか。」「」

「おいおい、死んだら帰れないぞ。」

「ああ、皆で帰ろう！」

「だな、マミ頼む！」

「わかったわ。来て！グレートブースター！！」

その掛け声と共にどこからとも無く巨大なモノが飛来してきた！

「皆来るわよ！」

「「ああ！」「

「ドンと来い！」「来い来い来い！」

ぎりぎりまで速度を落とすとしてもなお速いグレートブースターは彼らに向けて突っ込んできた。それにタイミングを合わせ彼らは跳び

「「「「「「「「「「しゅあああああー」「

無事に全員が飛び移ることができた。

「残っている人は……、いないわね。じゃあ、私も行きますか！ ス克蘭ブルダッシュユー！」

私も翼を展開し徐々に速度を上げているグレートブースターに追いついた。

(side あしゅら)

「無事行かれたか。」「後はここより先に」「一兵たりとも通さ  
ん！」「」

今までは翻弄することに重きを置いていた彼も先のガラダブラの  
ように鬼神のごとく戦い最後は突出していた船に突っ込み果てた。

このガラダブラMk01とあしゅらP1は連合そして帝国双方に  
強烈に印象に残った。後年、この戦いで英雄とまで呼ばれるように  
なった紅き翼のライバル役として名前が残るくらいに。

---

---

「ふむ、どうやら作戦は成功したようだな。」

「多少誤算があつたがこれで帝国は精銳の大部分を失つたか。」

「逆侵攻こそできそうには無いですが、だらだらと続けるにはちよつどいいですね。」

「しかし、こやつは少し厄介だな。」

「ああ、前回の誤算もこいつが原因でしたからな。」

「しかし、今回の事は誤算ではありませんがちよつどいいのでは？」

「うむ、護衛官を蹴って命令違反と越権行為、帝国軍から追い出しかかわりを禁じるにはちよつどいい。」

「連合に流れないでしょうか？」

「あそこでアレだけ暴れたのだ。連合に入らせない理由などいくらかもある。」

「それもそうですな。」

「アチラのほうは大丈夫でしょうか？」

「そっちも問題ない。あれらを調べていた奴を仲間にしたらしい。」

「ほう、なら。」

「ああ、あれらがそのうち処分するだろう。」

「なれば今回はこれで、終わりですかな。」

「くくく、あの方の復活が待ち遠しいですね。」

「ああ、それでは。」

## 大分裂戦争<グレート・ブリッジ2> (後書き)

機械獣とガラダブラ、あしゆらの回でもあったりしますw

どうでしょうか？最強の機械獣らしさが出ていたらいいなあ。

ちなみにあしゆらはミネルバXも入れてみました。光子力ビームは無いけど。ってかこれならあしゆらマジンガーも入れてミネルバとあしゆマジがあしゆら状態のほうがいいかも…。

マミさんの魔法もちよこつと出しましたけどこつちはまた別に機会にw

2、3日で撤退つてもものすんごくスピーディーになっちゃいました  
があまり時間をかけるとらくらく撤退。って事になっちゃいそうで  
^^；

機会があつたら書き直したいなあ。途中で長距離転送で補給ライン  
確保できんじゃね？とか思ったりも少し戦闘を長引かせられたか  
もなあ。

ともかく、最後のほうで何かやってる人たちも満足してマミは帝国  
軍から追い出されることにやっと大戦編を終わらせるコースに乗せ  
れます。学園編どうしよう…

### 次回予告

「無事に皆を救出できたマミ。しかし彼女に待ち構えていた運命は  
追放。彼女はこの大戦の裏を知るため調査を開始する、時を同じく  
連合でも……」

真ネギま マギ力Z 大分裂戦争<完全なる世界>



大分裂戦争<完全なる世界>(前書き)

え〜と、実は前回ブロッケンV2シユタイナーを出そうと思ってたんですが…

完璧に忘れてました〜なので今回、彼に活躍してもらいます！



## 大分裂戦争<完全なる世界>

グレート・ブリッジでの戦いの後、私は帝国軍より追放されてしまった。その理由は、王の命によって呼び出されていたのにそれを無視したこと、傭兵の領分を超えた作戦に対する越権行為や凄いもので無理な撤退を許容したことで損害を出したことに對する反逆罪つてモノもあった。

実際に最初の二つ、とくに越権行為のほうは完全に事実であった、最悪処刑つて話もあったらしいが撤退作戦に尽力したこともあつて追放で済んだ。最後の物はおそらくだが作戦失敗の責任をいついでに取らせようとしたものじゃないかしら？

あの戦いに参加した帝国軍はその数を7割近く失つてしまった。帰還者事態はその逆に7割に上るが、重傷を負い前線復帰が難しい者、復帰は可能でも長期療養を必要とする者。無傷な者はいなく良くて軽傷、多くが重症だったため帰還した者でも半数以上がとうぶん戦線復帰が不可能なためだ。

いくら治癒魔法があるといつても今は戦争中、数が圧倒的に足りないのだ。そのため、重症患者の命を繋ぎとめ自然治癒でもって回復を待つしか方法が無くこの結果となつてしまったのだ。

いくら一部で作戦を強行した者がいたとしても、この損害はその者を処分するだけで終わらせるわけにはいかなかった。作戦内容に無理があつたのは当初から分かつていた事、口車に乗つてしまひましたで済むはずがなく何人かの処分が必要になつてしまう。

しかし、ここまでの大打撃を受けた帝国にそんなことをしている

余裕は無く。ちょうど、傭兵でありすでに重大な問題を起こしている私にその責任もかぶせることでお茶お濁したんじゃないかしら？

あの戦いの指揮官さんもそのことについては謝りに来ていたほどだ。

ともかく帝国軍を追い出されてしまった私だがこれはある意味でいい機会かもしれない。今回の戦いもそうだが最初の頃からあったこの戦争に対する違和感。誰が始めて誰が継続を望んでいるのか、帝国の方は今までも聞いて回っていたから連合にもいつてみよう。

違った視点からこの戦争を見れば、それが判るかも知れない。

「なら膳は急げって言うし早速行きますか。来なさいグール！」

私はグールに乗ると一路連合その盟主の首都であるメガロメセンブリアに向けて出発した。

(side 紅き翼)

よお、ナギだ！俺達はあの戦いの後、帝国軍を追撃オスティアに迫っていた部隊を押し戻すなど大活躍したぜ！

ガトウって仲間も新たに加わり、「千の呪文の男」って二つ名やファンクラブができたり絶好調だ！

が、そこまでいったはいいがその後はまた戦況は膠着して、大戦の終わりは全く見えねえ。

「俺の故郷があるあっちの世界じゃ、超強力な科学爆弾が発明されててこんな大戦はもうおこらねえみたいだ。始めたとたん皆まとめて全滅するかららしい。でもよ、こっちの戦いはいつたいつ終わるんだ？帝都セラスを滅ぼすまでか？やろと思えば、こっちの世界にだって科学爆弾以上の魔法だってある。こんなこと続けてどうなるってんだ？意味ねえぜ！！まるで……。」

「まるで誰かが世界を滅ぼそうとしている。ですか？」

無茶苦茶なことだとは思う。だが、この戦いを見ているとどうしても思っちまう。

「ある意味ではそうかもしれないぞ。」

「ガトウ」

こいつが新しい仲間のガトウだ。なんでも凄腕の捜査官なんだとか。弟子のタカミチもいるな。

「やっと、掴む事ができた。連合・帝国双方の中枢までに入り込み戦争を長引かせている連中。その秘密結社の名は<完全なる世界><sup>コスモエンテレケイア</sup>」

「で、何だよ。わざわざ首都まで呼び出してさ。」

「完全なる世界の話をした後また戻って行ったガトウに今度は呼び出されて本国首都にまで来たはいいんだがなんなんだ？」

「あつて人、協力者がいるんだ。」

「協力者？」

「そうだ」

「ん？だれだ…って。」

「マクギル元老院議員！」

「おいおい、大物じゃねえか。」

「いや、主賓はあちらのお方だ。」

「違つのかよ。でも、元老院議員が敬語って。」

「ウエスペルタティア王国：アリカ王女、彼女が協力者だ。」

「また大物が出てきたな。それもこの大戦の中心とも言えるオステイアを王都に構える国の王女とは。」

俺達はく完全なる世界は武器商人や国際マフィアつまり「戦争で儲ける」やつらが作った組織と踏んでいたんだが。

アリカ王女の話の聞くとオステリア内部にもシンパがいるらしい。

「彼らに世界全てが操られている。」

って、アルの言葉がどつりにけれど、真の正体は謎のままの組織。

そこで俺達は休暇を利用して奴らについて独自に調査を開始したんだが、俺やラカンは調査向きじゃないから休暇を満喫。

……つとよきたかったんだが。俺はあの女のおもりでそれどころじゃなかったぜ。

「アリカ王女を一昼夜連れまわした挙句、敵の本拠地を壊滅させた  
!!!」

また、姫さんの付き合いで首都をみて回っているときに奴らの刺客から攻撃をくらったから乗り込んだだけじゃねえか。

「何のために秘密捜査をしていると……。それにもしもアリカ王女にもしもの事があつたら……。」「ガミガミガミガミ……」

手を出してきたのはアイツ等だぜ。それに

「姫さんノリノリだったぜ？」

楽しかったーっとかつて。

「嘘をつけ！！どうせ貴様が無理やり…！姫にこんな迷惑を…！国際問題級の…！」くどくどくど…

へーへー、次は気をつけますよ。

まあ、タカミチと師匠が入ってきて姫さんが笑ってお礼お伝えてくれたって言うてたっていつたら、黙っちまったがな。

「それに、ちゃんと証拠も見つけてきたぜ。」

と、そいつら宛てのメガロメセンブリアの執政官が送った書を見せた。

後で聞いたんだが、ガトウも掴んでいたらしい。メガロメセンブリアの執政官さえもあいつらの手先つてのには驚いたが、少なくともこれで戦争は終わらせれるだろう。＜完全なる世界＞のことはまだ何もわかってねえが、ガトウは何かを掴んだらしい。それは戦争が終わってからでもできる。

姫さんは戦争を終わらせることができる。その情報を持って帝国の第三皇女と接触をするために出発し、俺もガトウ、ラカンと一緒にマクギル議員の元に向かった。

そして、奴らが現れた……。

「マクギル元老議員」

「ご苦労、証拠品はオリジナルだろうか？」

「ハ…、法務官はまだいらっしやいませんか。」

「法務官は…、来られぬこととなった。」

何でだ…、ん？このマクギル議員…。

「少し考えたのだがね。先の戦いで帝国は大打撃を負った。…ここで慌てて休戦して水をさすのもどうかと思ってるね。」

「…ハア……。」

やっぱり、こいつは…。

「いや、私の意見ではなく元老院でもそう考える声が多くてね。今が攻め時だと。時期が悪い、ここで休戦だなど言っても味方は少ないだろう。君たちも無念だろうが今回は手を引き時を待つのだ。そうすれば…「待ちな」…何かねナギ君？」

ハッキリしたぜこいつは違うな！

「あんだ、マクギル議員じゃねえな何もんだ？」

先手必勝！偽者に魔法を叩き込んだが…。

「「な…。」」

「ちよー！ー！ー！ナギおま……！何やってんだよ！！」

「元老議員の頭いきなり燃やしてってもう火達磨だし！」

「バーーーーカ、よく見ろおっさん」

「何っ…。」

マクギル議員が居た所には1人の男が立っていた。

「よくわかったね千の呪文の男。こんなに簡単に見破られるとはもう少し研究しないとね。」

その後2人が乱入してきたが。強さと感じから言っただけ雑魚じゃねえおそらく幹部クラス。マクギル議員にはわりいがかく完全なる世界が大きな証拠が向こうから来てくれた！ラカンじゃねえが政治じゃない勝ちの相手だ、遥かに楽で戦い易いぜ！！

…が、結果を言えば俺達は負けた。といっても戦えば勝つ自信はあるんだが、あのやろう。マクギル議員の声で俺達が議員を暗殺しに来た帝国のスパイだと言いやがった！

結局、見失った上に昨日までの味方と戦うわけにもいかず脱出。今は今後のことについて話し合っているところだ。



「これからどうします?」

「どうもこうもこのままここに居る訳にもいかないからな。オリンポス山の隠れ家に行ったん移るか。」

「それがいいじゃろうな。」

「それと姫さんの行方が心配だ。」

「なんだあゝ、やっぱりお前。」

「茶化すなよ。俺達でもこれだったんだ。姫さんも無事じゃねえだろ。」

「つまんねえな。ま、実際そうだろうな。王女様もあの証拠については知っているんだし。」

「そうなると辺境を迂回しつつ隠れ家にその途中に姫の行方に関する情報も探ったほうがいいな。」

「方針が決まりましたし、行くとしましょう。何時までもこんなところについては…」

「見つかったやつものね。」

「「「「「!」「」「」

く!もう追っ手がって…、お前は!!

「久しぶりね。」

「マミ!」

何で帝国にいるお前が?お前がこっちにいるって噂聞いたことねえぞ。

(sideマミ)

マミが連合で調査を進めているときまで時を戻す。

さて、なんとか見つからずにメガロメセンブリアに入れたわね。

いくらなんでもグールで乗り付けるわけにもいかないし、ちよつとかかってしまったなあ。

「宿もとつたし道具の準備も整ったから早速開始しましょう。」

調査要員なのだけれどあしゆらは有名になつちやつたしそれ以前に目立ちすぎるからなあ。顔は仮面で隠せるけど、二重の声はどうにもならないし。まずはガミアちゃん達を呼び出して後は忍術も使えるブラザスS1・S2も聞き込みと調査に向かわした。彼女たち

は人間大の機械獣だから何かあっても大丈夫だしブラザは潜入任務もこなせるだろう。ただ、機械獣って事もあってあしゆらほど細やかかってわけじゃないところが少し心配なのよね。

もつとも、そのための手も考えてある！私自身が行けば一番なのだけれどそのままいったんじゃさすがに拙い。顔を変える魔法道具を買ったのだけれど犯罪に使われても困るので、大幅に変えることはできないみたい。そこでこの身体の利用するってわけ！…できれば利用したくなかったなあ。

まず、身体を分身させた。戦闘力を保持したままだと3体が限界だけれど一般人と同じくらいなら10体まではいける。機能を限定したり自動にすればもつといけるだろうけど今回の目的だと自分で操作をする必要があるからね。

その身体の上に人形の頭部を置き少し細工をした後にさっきの魔法道具を使用する。これによって10種類の私とは全く違う顔をもった私ができる！後はこれにローブや眼帯、仮面を装備すれば多少の違和感を無視できるだろう。これらをメガロ各所に放って噂や怪しいって言うところに忍ばせてみたりをしていた。

ちなみのその最中に女の人を連れたナギらしい人や妙な感じがするスーツの集団を見かけた。ナギは休暇中としてあのスーツの集団はなんだったんだろう？全然似合ってたわね。

それで暫く調査を続けていたのだけれどこれといった収穫は無し。帝国と同じように武器商人がどうの主戦派の議員がどうのって話は

聞くけど決定的なものじゃないのよねえ。武器商人にしたってこの戦争にこだわる必要性は無いわけだし、主戦派の人にしたって各国に1人はいるような人で国全体が戦争継続になるようなものじゃなかったわ。

そんなこれといった進展も無い日が続いていたある日。街中で大規模な魔法を使った事件が発生した。ちょうど近くを歩いていた分身体の1体を派遣してみるとナギの目撃情報がその周辺であった。話を聞いてみるとナギが女の人を連れて魔法を放ってきた人達を追っていた。

ナギが事件に巻き込まれたのは事実としてその理由は…、話の中にナギと女の人を狙ったように見えたつてもものがあつたからもしかしたら戦争を続けたい人が英雄のナギを狙った？ものすごく短絡的ではある、単なる犯罪者の突発的犯行や帝国の暗殺や破壊工作つても考えられる。

でも、これといった進展も無い現状ではとにかくナギを追ってみる事が一番ね。ナギの実力を考えてブラザを派遣してガミアちゃん達と分身を紅き翼の監視をさせた。もし何か動きがあれば見張っていて損はない！

ブラザの情報だとかこの拠点を襲撃したらしい。監視は宿泊している場所はわかったがそれ以上はどうすることもできず見張るしかないと思っていたが。ナギが帰ってきて暫くして動きがあった。それも特大の。

ある日彼が仲間2人（一人はラカンさんだけでもう一人は知らないわね。）と一緒に議員事務所に入って少ししてその事務所が巨大な石柱を生やして爆発した。潜入させていたブラザの情報だとナギ

たちが議員を暗殺に来て失敗したとか。

あの2人に暗殺なんて器用なことできるはずが無い！やるならば事務所後と吹き飛ばしている。彼らの暗殺はゴルゴのような細やかなものじゃなく目標付近を爆撃して葬り去る感じだろう。

おそらく、あの襲撃した拠点で何かを見つけてそれをもとに何かしようとして罠に嵌められたってところだろうか？とにかく今は紅き翼の動きを徹底的に追わないと分身を3体にし機動力を上げ私も出撃し徹底的に探索したところやっと見つけることができた。

どうやら、彼らはこの戦争を継続しようとしている人達を知っているようなね。彼らも連合を追い出されたみたいだし、前から誘われていたし私も一緒に行ってみようかしら。じゃあ、声をかけないかね。

「方針が決まりましたし、行くとしましょう。何時までもこんなところには……」

ふふ、そんなセリフを聞いたら言ってみたくなくなっちゃうわね。

「見つかったちゃうものね。」

うん、こんなセリフ1回は言ってみたいものよな。まあ、そのおかげですごい形相で振り返ってきたけど。ふふ、驚いてる驚いてる。「久しぶりね。」

「マミー」

さて、どこから話そうかしら。

(side 紅き翼)

「何でお前がメガロに！？ いったい…。」

「驚かせた私が言うのもなんだけど、今は移動した方がいいんじゃない？ 連合もその内嗅ぎ付けるわよ。」

「それもそうだな、話してくれるみたいだしとりあえずここを移動するか。」

「それで、声をかけてきたのですから何か案でも？ このまま帝国に突っ突は無しですけど。」

「違うわよ。私も追い出されたし。その辺境に行くまでの足の提供があるのよ。そこでなら落ち着いて話もできるしね。」

と、いつてマミは海の方に移動を開始した。どうするか少し迷ったが畏じゃ無さそうな事と追い出されたって話しも気になるし後を追った。

「ブード、来なさい！ 速さならグールが一番なんでしょうけど、空

を飛ぶからね。こつちなら潜水型だから潜ってしまえば見つからないわ。」

海へ移動したあいつは突如巨大な船を出現させた。これがアイツのアーティファクトなんだろうがやるうと思つたら1人でメガロを壊滅できそうだな。

驚いたばかりいるわけにもいかず潜水艦に乗った俺達は目的地をオリンポス山に設定してもらい改めて話し合いに入った。

「それにしてもすげえな。こんなモンまで呼び出せるのか。」

「色々制限もあるけどね。このまま外洋に脱出すればそこからはグールで一ツ飛びできるけどどうする？」

「そうですね、そのグールはある程度は見つからないようにする装備はありますか？」

「ええ、あるわよ。」

「それなら俺とタカミチを乗せてアリカ王女が会談をするために向かった場所に届けてくれ。」

「そうだな。俺達はこのままでいいが姫の安否、もしさらわれたならその行方は一刻も早く知っておいたほうがいいからな。」

姫さん無事でいてくれよ。

「わかったは、でもその前に互いの状況を確認しないと。」

「む、そうだな。じゃあ、どっちから話すか。」

「私から話すわ。私はあの後……。」

マミの話だとあの戦いの後、責任を取らされて帝国軍を追放。元々この戦争に違和感を覚えていたから連合のほうも見にきてみた。その調査中に俺達を発見して接触してきたらしい。

「何だそりゃ！何でマミのせいになってんだ！！」

「責任の是非はともかくアレだけの活躍をしたあなたを追放という話もおかしいと言えればおかしいですね。」

「ああ、大打撃を負ったのなら彼女は手放せない気もするが。」

「どうせあいつらの仕業だろ？それより、お前も紅き翼に入るのか！

「歓迎するぜ！今度手合わせしようぜ！！」 「おい！今度は俺だぞ。」 「いいじゃねえかよ。あ、詠春もまげてやらねえとな。」

仲間はずれは駄目だからな！

「今はそんなことはしてる暇は無いだろ。まあ、興味はあるが。」

「しかし、いよいよ我々紅き翼もチート、バグ軍団化してきましたね。」

「じゃな、ナギとラカンでも十分じゃがさらにマミもか。」

「ふふ、よろしくね。」



次は俺達のことも話したら<完全なる世界>の名前になんか反応していたけど。どこかで聞いたのか？

その後沖合いでガトウとタカミチ、それにガミアって奴をグールって飛行機に乗せて分かれた俺達はオリンポス山の隠れ家に向かった。

( side マミ )

<完全なる世界>そういえばそんな人たちもいたような…。原作のことかなり忘れてきてるわね。メモツといた方がいいかしら？

どうやら転生後色々あったせいで原作のことはかなり忘れつつあるようだ。

( side 紅き翼 )

無事に隠れ家に着いて今後のことを考えていた俺達にガトウから通信が来た。

「それでガトウ、姫の行方はわかったのか？」

< ああ、どうやらアリカ王女は「夜の迷宮」に監禁されているらしい。俺も今からそっちに向かう、救出するにしても早くしたほうがいいだろうからな。 >

そこに姫さんがいるのか！なら早速。

「ナギ少し落ち着きましょう。」

「そうだけ、愛しの彼女の行方がわかったからって張り切りすぎだぜ。」

またその話か。何回言えばわかるんだよ！

「ラカンの話とはかく無策で飛び込めば姫にも危害が及んでしまいかもしれん。少しは作戦を立てないと。」

む、それもそうか。

「一番確実なものは罠を使ってそのうちに救出なのでしようが。」

「向こうも奪還されることは予想しているだろうからな。俺達が行っても罠とばれてしまうだろう。」

「マミなら我々と関係が無いため大丈夫でしょうが。一人ではさすがに難しいでしょうし。マミ何か案はありませんか？」

「機械獣を使ってもいいけれど下手をすれば籠城されるわね。」

「注目を集める意味ではいいかもしれんが、籠城をされると困るな。いくらなんでも攻撃するわけにもいかんし。」

「ええ、冷静に対処されては困ということがばれてしまいかねませんね。」

「冷静に…、たしかアレが。」

さつさと突っ込んで行けたら楽なんだがなあ。ラカンなんか船の中を見に行っちまってるし。ん？何かマミが考えてるな。

「ねえ。あなた達の中で霧か砂嵐を起こすことができる人っていない？」

「起こすことはできませんが。敵の視界を塞ぐものとなるとかなり接近しないと使えませんよ？それでは近づく前に…。」

「いえ、敵の近くで起こすのじゃなくて…。」

マミが言った作戦に詠春とアル、師匠は啞然として俺と戻ってきたラカンは大爆笑した。

「あっははははは、トンでもねえな！でも、それなら相手のドギモウ抜けるだろ！！」

戻ってきた、ガトウとタカミチにも話したが何か頭を抱えていたな。

作戦も決まったことだし行くか！

( side夜の迷宮 )

「おい、あいつらの様子はどうだ？」

「大人しいですよ。」

ここはアリカ姫と帝国皇女が監禁されている<夜の迷宮>その警備兵たちがつめている待機所だ。

「連合の紅き翼はどうやら追い出されたらしいぞ。」

「馬鹿な奴らだな。傭兵は傭兵らしく命令ど通りに戦えばいいものを。」

「まっただ。」

と、今日の上から命令された王女の監視という暇な任務をこなしつつ一日が過ぎていくはずだった。……あの報告があるまでは。

彼らがその後も話していると突如あわただしい足音と共に1人に同僚が駆け込んできた。

「た、大変だ！」

「どうしたんだ？外に何か見えたのか？」

「あ、ああそ、外に！」

「とりあえず落ち着け。竜の群れでも見たのか？」 「はは、そりゃ確かに大変だな。」

と、駆け込んできた同僚に話しかけつつ持ち込んでいた酒を飲んでいると。

「そんなモンじゃねえ！たぶん150Mはある巨人がこっちに向かってるんだ！！」

「ブウーーーーー！！」

そのあまりにも予想外な一言にそろって呑んでいた酒を噴出すると問い詰めだした。

「ひゃ、150Mだあ、何の冗談だよ。」

「全身は見えないんだけど頭部は確認できているんだ。とにかく来てくれ見てくれればわかる。他の奴らも集まってる！」

にわかには信じられないが、とにかく向かってみることにした2人はそこでココにほとんどの兵が騒いでいるところを発見した。

「おいおい、マジかよ。」 「誰か望遠鏡を貸してくれ！」 「ほらよ。」 「真っ直ぐこっちに来るぞ！」

「嘘じゃないみたいだな。」

「違いますよ、これで見てください！」

貰った双眼鏡で他の奴らが見ているのと同じ方向を見た彼の目には。

霧のせいで身体は見えないが周りの物から推測すると20Mはありそうな巨大な頭部を持った男がこちらに近づいてくるところが移った。

「マジかよ……。」

「船が張りぼてじゃないのか？」「あんな悪趣味な船があるかよ！」

「張りぼてじゃないぜ、さっき近づいた竜を触手で打ち落としてた。」

「そもそも地響きも聞こえるじゃねえか！」

「足元が見えないのでわからないですけど、頭部の大きさから150Mは超えますよ。」「150M以下ならよほど寸胴だろうな。」

「顔だけって事は……、すまん忘れてくれありえねえな。」

これが王女奪還のために向かってきた艦隊が装備する鬼神兵ならまだ彼らも冷静に対処できたかもしれないが、鬼神兵ではなくどうにも髪や髭らしき物がある巨大な人間の頭部を持ったものが単独で

来ているといったわけがわからない状況のせいで大混乱におちいつていた。

「とにかく！騒いでもしかたなねえ。あいつ等を連れて脱出するぞ！軍ならまだ人質と立て籠もってもいいがあんなのと戦ったって意味がねえ！」

なんとか、冷静さを取り戻した1人が今後のことを言ったがそれは少し遅かった。

「それは困るな。また探さなくちゃいけなくなる。」

「な！だれだ…。」

言い終わる前に彼らの意識は深い闇に落ちていった。

( side 紅き翼・陽動班 )

「どつらや、ナギたちはうまく潜入できたようですよ。向こうは大混乱のようです。」

「それはそうじゃろ、こんな物が来るなんて想定しているわけが無いのじゃからな。」

「だからこそ陽動の意味があるんじゃないですか。」

私が陽動用に呼び寄せた機械獣は150Mを超える強力な機械獣では無く100m近くあるが建設用で戦闘力は低いタイタンG9とブロッケン伯爵の頭部を模した巨大な顔のブロッケンV2シユタイナーだ。

やったことはタイタンにブロッケンを掲げさせてそれがばれなように霧で胴体を隠しつつ接近しただけだ。大きさもそうだがブロッケンV2シユタイナーはかなりブロッケン伯爵のつまり人の顔に近い形なため遠くからだと巨人が接近してきているように見えるのだ。

100M超とそれだけでもトンデモナイのに人間にごく近いように見える頭部を持った物体ということが強烈なインパクトを与えることに成功しナギ達の潜入に役に立ったようだ。

「後は、ナギ達しだいね。」

成功を確信しつつ私達は撤収準備に入った。

(side 紅き翼・突入班)

のんびりしていた所にアレがよほど聞いたのか警備兵は殆どがアレを見に行っていて中はがらがらだった。



「ガトウから連絡だ。あつちは無事に制圧したらしい。油断していたが無駄に大量にいたから苦労したってよ。」

「この様子だとほとんどあつちだろうな。マミの作戦は大成功だな！」

「アレだけ俺様を爆笑させたんだ、成功するに決まってる！」

「物凄い目立っているだろうな……」

「だな、それにしてもマミのトンでもないがあんなのが入ってるア  
ーティファクトもトンデモナイな！」

「っと、ココだなまさかここもないとは」

「楽でいいじゃねえか。」

「鍵もねえし…オラア！」　バガン！

「おい！ココも遺跡だぞ？」

「しるか、あいつらが壊したってことにすればいいだろ。っと、よ  
お来てやったぜ姫さん」

「遅いぞ我が騎士」

姫さんといでに居たもう一人を連れて俺達は隠れ家に戻った。  
姫さんにも見せてやろと思ったがマミの奴がもう戻してた。

(sideナギ)

で、隠れ家に戻ってきたんだが

「なんだ、これが噂の紅き翼の秘密基地か！どんなところかと思えば…、掘っ立て小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだこのジャリはよ。」

「秘密基地が見たいならサルードを呼びましようか？アレは秘密基地っぽいわよ。」

「何だ貴様、無礼だろう！」「へっへえ。あいにくヘラスの王族に貸しはあっても…。」「なにい？貴様…。」「まあまあ。」

「あのやけに元気な少女が。」「ええ、ヘラス帝国の第三皇女です。」

あつちはやけに賑やかだなあ。

「さうて、姫さん助けたのはいいけどこっからどうする？連合にも

帝国にも、そしてあんたの国にも味方はいねえ。」

「恐れながら事実です王女殿下。殿下のオスティアも似たような状況…。最新の調査ではオスティア上層部がもつとも「黒い」という可能性さえ。」

本当に味方が待たたくいねえな。それにしても姫さんの国が一番黒いとは。

「やはりそうか。」

ん？あんまり驚いてないな。

「我が騎士よ」

「だからその「我が騎士」って何だよ！姫さん。」

俺はクラスでいったら魔法使いだぜ？

「もう連合の兵ではないのだろう？ならもはやお主は私のものじゃ。」

な…、どんな理論だよ！これが王族か！！

「連合に帝国、そして我オスティア…。世界全てが我らの敵というわけじゃな。」

改めて聞くととんでもない状況だな。

「じゃが…、主と主の＜紅き翼＞は無敵なのじゃろ？世界全てが敵。」

良いではないか、こちらの兵はたった8人だが最強の8人じゃ。ならば我が世界を救おう。我が騎士ナギよ我盾となり」

へへっ、ココまで言われて答えられないなんて男じゃねえな。

「剣となれ。」

それに、魔法使いだったの。

「やれやれ、相変わらずおっかない姫さんだぜ。」

なら、言うことは一つだな。

「いいぜ、俺の杖と翼あんたに預けよう。」

世界が敵か、元々世界を操ってる奴が敵だったんだかわらねえか！

さあ！反撃開始と行くか！！

## 大分裂戦争<完全なる世界>(後書き)

やっと、紅き翼と合流できた！ついでに久しぶりにブロッケンの能力が役に立ったw

大戦編ももうあと少しで終了です！その内、外伝で色々な間の事とかも書けたら良いなあ…。

### 次回予告

「反撃を開始した紅き翼。しかし、完全なる世界も一筋縄では行かない相手。6ヶ月の大激闘、そしてついに部隊は最終決戦の地へ！」

次回 真ネギま マギカZ」

「

(前書き)

今回は短めです

真のサブタイは最後にあります！

あの誓いの後私達は「完全なる世界」に対して反撃を開始した。といつても相手の全貌は未だに不明なため。彼らが世界に対してちよっかいをかけるのに使う下部組織である武器商人やマフィアの壊滅、私腹を肥やしたり利敵行為をしていた役人を法廷に突き出したりと、外堀を埋めつつ。お姫様たちが連合や帝国内で理解者を増やし味方にしたりといった事をしていた。もっとも、敵味方の判別や証拠集め、説得は主にアルビレオやガトウと言った紅き翼の頭脳担当に任せていたのだけれどね。ナギとラカンの2人は致命的に向いてないし、私も前世はごく普通の一般人で転生後も剣闘士と傭兵くらいしか経験が無い。ガミアちゃんや諜報に使えるような機械獣を貸し出して入るけどもっばら敵拠点の殲滅が仕事だ。

もっとも、いつも敵拠点に襲撃をかけてるわけでもなかったからナギやラカン、詠春とも何度か手合わせしてもらった彼らとの手合わせのおかげで超一流相手にも何とか勝てるようになったかしら？彼らのような使い手との戦闘経験はものすごく貴重ですものね。

そのんな戦いが6ヶ月続いた。そしてついに彼らの本拠地を突き止めるにいたった。そこは意外なようでその歴史と上層部の多くが「完全なる世界」に染まっていたことを考えると当然とも言える場所。世界最古の都、王都オステイア空中王宮最奥部「墓守人の宮殿」  
。そこが彼らとの最終決戦地だ。

「不気味なくらい静かだな。」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ。」

「私たちがここに居ることは知っているはずなのに未だに動きが無いものね…。」

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました。」

「こっちの準備は完了したわね。あ、彼女はセラスさんアリアドネーの騎士団の方だ。アリアドネーは中立国の中でも少し特殊な方針で動いていることとそれなりの規模の戦力を持っているので今回、来てもらったのだ。」

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ。」

「今まではそっちも自分たちでしていたのだけれど敵は幹部たちと  
言うこともう一つ理由があつて余り時間をかけるわけには行かない、だから紅き翼全員で突入し速やかに拠点を制圧する必要がある。」

「ハッ！…それで、あの…ナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか。」

「おお？ああ、いいですねくらい」



「ふふ、人気者ね。」

「そ、尊敬してました。」

ふふ、真つ赤になっちゃって。決戦前にこんな事を言える余裕があれば大丈夫かな？あ、連合に交渉に行っているガトウから通信が。

「連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることはできないか？」

「無理ですね。私たちでやるしかないでしょう。」

「すでにタイムリミットだ。」

「ええ、彼らは始めています…。<世界を無に帰す儀式>を。世界の鍵<黄昏の姫御子>は今、彼らの手にあるのです。」

「ああ！（待ってるよ…、姫子ちゃん！）」

そうこれが私たちが急ぐ理由と部隊が混成といっても主にアリアドネーの部隊で構成されている理由だ。ただ、彼らの目的は未だに信じられない。世界を無に帰す…、そんなことをしていったい何の意味が？

「よおしつ野郎ども」

つと、それは彼らをとめてから考えましょう今は。

「行くぜ！」

儀式をとめないと！

混成部隊の人たちがつくってくれた、道を行き私達は無傷で「墓守人の宮殿」内に突入することができた。そしてそこには、

「やあ、く千の呪文の男>また会ったね。これで何回目だい？僕達もこの半年で君に随分と数を減らされてしまったよ。この辺りでケリにしよう。」

どうやら幹部がそろい踏みね。でも、この人達を倒せば！

数はちょうど同じ、それぞれが戦闘にと突入していった！

(sideMIII)

「あなたと戦つのはこれで何回目かしらね？」

「ふん、何回だろうが同じだ。貴様は我々の計画成就のためになん

としても潰させてもらおう！」

私の相手は髑髏をあしらった頭巾をかぶりボロボロのローブを着た顔色が悪い人だ。ただこの人、顔色は悪いけど身長は3m近くあって戦闘方法もリング状の光を投擲したりそれで直接切りつけてくるなど接近戦が得意なようだ。他にも足元から強烈な風を起こしたり、呪術も使えるようなんだけど。ただ、私が一番気になるのはこの人のことを見たことが有る気がするからだ。転生後じゃないことは確かだから、前世？でも、こんな人が居るわけもないし。

「さあ、語り合うのもこれが最後だ！もちろん互いのかを見ることも……！」

何にせよ今はこの人を倒さないかね！！

その後のことはよく覚えていないが激戦であったのは確かだ。マミさんの魔法によって弾幕をばり、相手は対抗するように呪術で分身を作り多方向からの同時攻撃、マジンガーブレードで切り裂きアトミックパンチで吹き飛ばし、突風で吹き飛ばされたところをリングで切られた、手を掴み至近距離からブレストバーンをおみまいした……、そしてついに。

「はあはあはあ、これでやっと終わりね。」

分身を全て倒し片腕を切り飛ばし、今残ったもう一つの腕にブレードを刺して縫い付けることに成功した！

「く、やはり！やはりお前は……！このようなところで私があ……！」

「恨み言はあの世でお願いね。もっとも、その前に自分たちが殺した大勢の人の恨み言を聞かされるでしょうけど。」

止めを討つためにブレストバーンを発射する瞬間に

「このような所で人形共とともに滅びてなるものか！あの御方のためまだ私は！それに貴様は！貴様の力だけは！」

あの御方？まだ他に誰か？そのことを聞きたくもあつたが時間をかけて回復されても困る！

「見苦しいわよ。これで終わりよ！ブレストバーン！！」

「があああああああ！！見ておれ今に必ずお前を…！！」

最後まで恨み言を言いながら彼は炎に焼かれて消えた。

「ふう、なにか化けて出そうね。」

皆は…、いたいた。どうやら皆のほうも終わったみたいね。ナギがリーダの青年を捕まえている。

(side ナギ)

「見事…、理不尽なまでの強さだ…。」

「黄昏の姫御子は…どこだ？消える前に吐け。」

こんな状態だったのにまだ余裕面でいやがる。

「まさか君はいまだに僕が全ての黒幕でトップだと思っているのかい？」

「なん…だと？」

なに？まだ上が居るってのか。

バスッ！！

(sideマミ)

それは一瞬のことだった。突如としてナギが青年ごと後ろから撃たれたのだ。そして撃った者がいると思える方向を見ると。

……………アレは、なに？禍々しいって言葉さえまだ生易しいような。って、まずい！！

アレが、何かを放つ直前ギリギリでナギとの間に入ることができて防御したが。

ゼクトが張った絶対防御の多重障壁をクッキーでも砕くかのよう  
に粉碎し同じく防御に入ったラカンの腕を消滅させ盾として掲げた  
マジンガーブレード 超合金ニューZ を粉碎し、私たち全員を吹  
き飛ばした。アレはこちらがもう戦えないと判断したのか姿を消し  
た。おそらく儀式の場所に向かったのだろう。

「く、皆！大丈夫！？」

って、聞くまでも無いわね。ラカンは両腕消失、ナギも撃ち抜か  
れているから同じく重症だし。詠春だって、ナギを守って攻撃を受  
けたせいで戦える状態じゃないだろう。

「マミお前は？」

「こんなときは自分の頑丈さに感謝ね。私はあれの後を追うわ。皆  
は態勢の立て直しを。」

「待てマミ！お前一人じゃ無理だ！！おい！！」

わかっているわよ、それくらい。でも、ここで引き返すわけにも  
行かない。

私はみんなの声を振り切って宮殿の奥へと向かった。

いた！それにしても禍々しい気配ね。さっきより増してるんじゃないかしら？

「ほう、あれをくらってこつも早く追ってくる者が居るとわな。」

「ふふ、頑丈なのは私のとりえの一つでね。」

実際に防御力は超合金ニューZのおかげで最高クラス。それにウル・ジエムも付いているから魔力があれば超回復も可能。スパロボ風にいえばHP回復（大）ってところかな。もつともその魔力が今は残り少ないのだけれど。

「はあっはっはっは、なかなかどうして。どうだ、我元に来ぬか？貴様ほどの力、無為に散らすは惜しいな。」

「お生憎、そんな要求は聞けないわね！」

「ならば、死して我の力にしてくれようぞ。」

出し惜しんでたつもりは無いけど、全力全開。後先考えずいくしかないわね！

「マジンパワー！発動！！」

体内の光子力エンジンをフル回転させ膨大な光子力をまとっていく。これを使えば切れたときが最後…、正真正銘の最後の切り札。

「む、その力は！！くくく、ははは、はあっはっはっは！！まさか

もう一度その力を見るとは、なるほどそれならば納得できるな。そしてお前はここで我がじきじきに消滅させてくれる。」

なに？いきなり笑い出してそれに光子力のことを知っている？…まさか！

「おおかた、奴が送り込んできたといったところだろう。」

「まさかあなたは！！！」

そんな！よりによってこんな時に！！じゃあ、もしかしてこの儀式の目的って！

「その様子だと聞いているらしいな。よからう冥土の土産に聞くがいい！我名は！」

真ネギま マギカZ第13話

「闇の帝王」



(後書き)

これがやりたいがために短くてあのサブタイになりましたw  
次回も短いと思います^^;長い戦闘シーンなんて無理です…

ついに登場した大ボスこと闇の帝王様！ハーデスって言った時から気がついてた人は多いかな？魔法との相性もよくて兜一族製の魔神の敵ってことでこうなりました。ちなみに今回マミと戦ったのは“彼”です。

設定のときにちょびっと書いてたソウルジェム、しっかり装備？しています。

マジンガー的にパイルダーって感じで丁度よかったですねw

6ヶ月間のことは後々外伝でしていきたいともありますねえ。

次回予告

「ついに現れた真の敵、それは使命で倒すべき相手であった。だが、今の状態で勝てるのか…。」

次回

真ネギま マギカZ 「決戦」

この次回予告も学園編だと変えないとなあ。

## 決戦（前書き）

今回で大戦編は終了！

ちなみに闇の帝王の姿は原作の創造主と同じです。

## 決戦

(sideナギ)

「くそ！マミの奴、普段は無茶するなって言っておきながら自分が一番無茶じゃねえかよ！」

くそ、確かにあいつは強いし傷も浅かったが、だからと言ってアレは魔力が少ない状態でどうこうなる相手じゃねえぞ！

「アル、お前の残り魔力全部で俺の治癒を！」

「な、いけませんナギ！そんな無茶な治癒では、それにアレはそんな状態で…。」

「30分ももてば十分だ。それにマミの奴だっている。」

無茶なのは割ってる。だが、あいつだけ戦わせるわけにはいかねえ。

「ふふ、よかるう。ワシも行くぞナギ。ワシも傷は浅いほうじゃからな。」

「お師匠…。」

お師匠も居てくれるなら心強え。

「待てナギ！奴はマズ過ぎる！今までの奴が雑魚に見えるくらいだ。マミを連れ戻して態勢を立て直してだな。」

そんなことわかってるよ。だけどよ。

「バーカ、そんな時間残ってねえよ。らしくねえなジャック。それに、マミも誰かが来ると信じて先に行ったんだろう。」

ならその信頼に答えてやらないと男じゃなえよ。

ドゴオー!!

どうやら追いついたみたいだな。なら早くいかねえと!

「それにな、俺は無敵の千の呪文の男なんだぜ?俺達は勝つ!任せとけ!!」

「ナギ!!」

俺と師匠は全力でさっき爆発が起こった場所に向けて出発した。マミすぐ行くからな!

(side)

「マジンガーブレード！」

剣を振りかぶり全力で彼に切りかかる。

「ふん！その程度。」

剣は弾かれたがそのまま次の攻撃を叩き込む！

「ブレスト！」

「させるか！」

く、攻撃を中止して回避をしたためまた距離が開いてしまった。

「ふふふ、どうした？その程度か。」

く、やっぱり一筋縄ではいかないわね。さっきから攻撃をあてるけどあまり効いてないみたいだし…。

あの身体から出ている炎。あれが強固な障壁として機能しているみたいけど。

「我を倒してこの儀式を止めるのではなかったのか？ふふふ、このままでは寝起きの一杯にすらならぬな。」

「ええ、例え使命を受けていなくてもあなたは絶対に止めるわ！」

「勇ましいな。ふむ、なにやら2つの力が近づいてきておるな。」

ナギ達かしら？でも、大丈夫なのだろうか…。来る前に見た限り

だとゼクトの傷は比較的浅かったけど。

「ふむ、3人なら少しは楽しめるか？ならそれまでに先ほどの貴様の質問に答えてやろう。」

「あら、やさしいのね。」

「帝王たるもの下々の者には優しくせねばな。それにこれから死ぬのだ。地獄への土産話も持たせないのでは帝王の名折れだ。」

向こうが時間をくれるならその間に回復と攻略法を！

「この騒乱は我が起こしたとかいっていたな。残念ながら我はつい最近まで眠っていてな。この器の元々の持ち主がやったことだろう。儀式の目的は大方の見当は付くがな。」

「あら、そうなの。その身体の持ち主はあなたのことを？」

「知らぬよ。その必要もないのでな。だが、この儀式を利用すれば我もある程度の復活は可能か。そこは褒めてやらねばな、ふははははははは。」

絶対に彼を倒して儀式を止めればいけないわね。彼が復活するなんて悪夢以外の何者でもないはね。

「もっとも、アヤツ等も少しは何かやっていたようだがな。」

ん？何か違和感が…。「完全なる世界」の事じゃなさそうだし。

「アヤツ等？」

「我がミケーネは滅びてはおらぬと言う事だ。さて、土産はこれで十分だろう。今来る2人には持たせてやれぬが我と直接顔を合わせただけでも名誉だ。貴様は1人で来た褒美だ。せいぜい自慢する事だな。」

な…、ミケーネが滅びていない!?それはいつたい…。

「マミ!無事か!!!」

「ナギ!それにゼクトも!」

「全く無茶をしよる。」

疑問は後だ!今は全力で立ち向かうしかない!!

「ふふふふふ、さあ楽しませてもらうぞ!」

ゼクトにはサポートに回ってもらい私とナギ2人で切り込んだ、威力の低い攻撃は相変わらず炎によって防がれているが3人になった事で炎の防御を突破できる攻撃を放つ隙を作る事ができている!

「ち、3人だとさすがに厄介だな。」

「どうしたそんなものか!」

「あまり調子に乗るな！」

「くー！」

「ナギ！プレストバーン！」

「ぐお！」

これなら勝てる！

「マミ！デカイのいくぞあわせる！！お師匠！」

「任せる！マミお前はナギに合わせる。」

ナギは千の雷の詠唱に入り、私に変わってゼクトがあいつに攻撃を仕掛け気を引き付けているうちにグレート最大の攻撃の準備に入った。

「ちいっ！ちょこまかと。」

「余裕ではなかったのか？油断しすぎじゃな。」

全くそのとおりね！でも、そのおかげでこっちは戦えてるのだから。ゼクトも離脱した！ナギのほうは詠唱を完了したみたいね。私もエネルギーのチャージは終わってる！

「千の雷！」

「ダブルサンダーブレイク！」



2つの巨大な落雷が闇の帝王を襲った！2つの巨大な雷は互いに影響しあい威力を高めた結果。それは最早、雷ではなくプラズマの塊だ。温度がどうなっているのか見当も付かないこれなら！

「やったか！」

ナギもこの光景に相手の敗北を予想したみたいだ。……だが、相手の力はそれ以上のもようだった。

闇の帝王を焼いていたプラズマが巨大で禍々しい炎で吹き飛ばされ、その中から無傷のやつが出てきた。

「ふふふ、今の攻撃はなかなか危なかったぞ。確かに油断をしすぎたようだな。だが、もうそれも終わりだ。我にはまだやらねばならぬ事があるのでな、貴様らの地獄への土産も十分だろう。」

く！本当に最近まで眠っていたのかしら？ここまで強大だなんて

「ナギ、後どれくらい戦える？」

「もう余り魔力も残ってねえな。でかいのを1発2はつって所か。お前は？」

「私よりはいいわね。私は出せて1発かしら？それに……。」

マジンパワーも、もう維持限界だろうこれが切れたら非常にまずい。

どうやって彼をしとめるか……。再度先ほどの攻撃を仕掛ける……。駄目だ出力不足だろう。光子カビーム……。おそらく防御を突破でき

るだろうがそう易々とくらくしてくれるか。それにあの炎を完全に吹き飛ばすには出力不足だろう。

く、まずいわね。光子カビームなら何とかかなりそうだけど、命中するかと防御を突破、なおかつあの炎を吹き散らせれるか。ダメーヂを与えられてもあれがあったらナギの攻撃が通らない。私が何とかしないと！

あの炎を完全にかき消すとなると光子力じゃないとまず無理だろうし、そうなる…。

はあ、こんな手しか考えつかないなんて。もっと、修行をしていれば良かったわね。今更ではあるか。

「ナギ、今から私が全力で彼に攻撃をかけるわ。障壁を完全に消せるだろうから私に何があってもかまわず彼を倒して。」

「マミィ？」

怖くはある、いやものすごく怖い。できれば今すぐに逃げ帰りたい。でも、そんなことをしてどうなる？私が逃げればナギとゼクトは負けて死ぬだろう。そうになると儀式は止まらない、魔法世界は無に返るだろう。転生してから知り合った人たちも…。

それに彼を野放しにすればきつと向こうの世界も無事ではすまない。第3次世界大戦が勃発する可能性だって、いやもしかしたら北斗の世界になるかもね。逃げたところでどうにもならない、そ

れに今ならナギがいる。彼ならきつと…。

「ならば、私がするべきことをするだけね。まだ怖いでも逃げて後悔するほうがもつと怖い！」

「光子力エンジンのフルドライブ！行くわよ！」

「む！まだそんな力が！！」

残っていたありつたけの力を全て光子力エンジンに供給し膨大な光子力エネルギーを放ちながら私は闇の帝王に向かって突っ込んだ。

「じゃあね、ナギ」

闇の帝王に抱きつき溜め込んだ膨大なエネルギーを解放。私の意識はなくなった。

(sideナギ)

「私に何があってもかまわず彼を倒して。」

「マムム？」

そんな、ことを言ったあと、アイツは膨大な力を感じる光を身に

纏って敵の親玉に突っ込んでいった。

その力から何か大きなことをする事は想像がついたが漠然とした不安が湧き上がってきた。

そしてその不安は現実のものとなった。

「じゃあね、ナギ。」

その言葉と共に敵に掴みかかったマミは膨大な力を解き放って、敵諸共自爆した。

「マミイイイイイ！」

「な！なんてことを…。じゃが、ナギ！」

「おう！」

悲しんでいる暇なんてねえ！そんなことをしてたらマミのやった事の意味がなくなる。俺はありったけの魔力を、後先考えない全力の1発を敵がいるだろう場所に向けて撃ち込んだ！

## 決戦（後書き）

真ネギま マギカZ 完！！

嘘です。すいません…。

うう、文才が欲しい。もうちょっとかっこよく書けたらいいんですけど今の私の文才ではこれが限界です…。グレートもあんまり活躍させれなかったなあ。

次回はまたゼウスとの語らいと帰還です。

その後、何話かしたら麻帆良学園行きです。

主人公設定も整理をかねてちょこっと載せます。

設定の不備等、気がついた事があつたらどうぞ遠慮なく言ってください。

大戦期の外伝のネタも募集中ですw

帰還と新たな決意、新しい仲間（前書き）

新章開始です！

## 帰還と新たな決意、新しい仲間

「ここは？」

周りを見ると古代ギリシヤをほうふつとさせる部屋が見えた。

確か私は敵の最後の拠点に乗り込んで……。

「そうだ！敵の親玉が闇の帝王だったんだ。それで、何としても倒そうとして私は……。」

「あの後どうなったのかしら。ナギは勝てたのかな。…いいえ、ナギならきつと勝ってるね。」

「彼ならきつと大丈夫だろう。」

「それにしてもここはどこかしら？あんな事をしたんだから死んだと思うんだけど、転生したときの場所とも違うみたいだし。それとも天国ってこんなところなのかな？」

と、疑問に思っている。

「おお！目が覚めたか！あれから全く目覚めぬので心配したのだぞ。」

「この声は。」

「ゼウス様！」

「ゼウスでよい。」「そんな「かまわん」わかりました。」

彼が居るってことはやっぱり。

「ここはやっぱり…」

「さて、色々と話したいことがあるがまずは。」

言葉を途中で切り彼は私の前に座りそのまま手をつき私に向かつて。

「すまぬ。」

謝罪の言葉をかけてきた。

「私の見込みが甘すぎたようだ。アヤツの力が年々増している事はわかってはいたが、まさかあそこまで力を取り戻しているとは。」

「いえ、確かに驚きはしました。でも、闇の帝王の復活が早まった原因は私たち、人間にあります。ゼウスさんの想定を上回ってしまったほど彼に力を与えてしまっていたのでしょうか。」

闇の帝王が設定どうりならその力の根源は憎しみや絶望のはず。つまり、2度の世界大戦やそのほかの人間社会がつくってきた闇が彼に力を与えて、ゼウスの想定を超えるスピードで力を蓄えてしまったのだらう。



「闇の帝王それが今の奴の名前か。なるほど、奴に相応しい名だ。だが、私の見込みが甘かった事は事実だ。それに他にも謝らねばならぬ事もある。」

「他ですか？」

「ああ、以前に本来の体の話をしたね。」

「そういえば今（前？）の身体は仮だったわね。」

「その身体はとある遺跡に封印してあったのだ。君が力をつけたときに場所を教え、自力で得てもらったために。だが…。」

「嫌な予感がするなあ。」

「あの戦いの後、その遺跡が荒らされ身体の行方が分からなくなってしまったのだ。本来の持ち主以外に操れはせぬとはいえ…。」

「彼がミケーネは滅びてはいないといっていました。やはり協力者が？」

「そのようだ、すまぬ。あの身体はオリジナルだから私から与える事ができなかったとはいえ。」

「あの後どうなったか。教えてくれませんか？それと私が今どんな状態なのか。」

「死んでしまったのならもう1度転生するのだろうか？」

「そうだな。」

それから、色々と話してもらった。ナギがあの後勝った事、無事儀式が止められた事、そのせいでアリカさんのオスティアが滅んだ事、アリカさんが捕まったことナギに助け出された事、今は闇の帝王の力がごく微弱なものだという事、あれから10年の時間が過ぎてきている事。

そして…。

「マミ、お主は生きている。」

「え？」

生きている？そんなどうやって、あんな事をしたんだから死んだと思っただけだ。

確かに嬉しいが、余りにも意外すぎて。驚きと疑問のほうが多い。

「運が良かった。そうしか言えぬな。」

そうつぶやくと当時のことを話し始めた。

「あの戦いは私も見ていたのだ。自分の不甲斐なさ、言ってお前たちを助けてやれぬこの身の無力さに嘆いていた。お主が命を持って、勝利するための道を作った時など特にの。」

戦士である彼には悔しかったのだろう、顔がゆがんでいる。

「だが、無事封印も終わったとき、ふとお前の力を感じたのだ。その後は無我夢中だったな。ようやく調整が終わったお主のサポート役をすぐに派遣し搜索させ、何とか発見できたのだ。」

サポート役か、どんな子なんだろう？そしてすごい不安を感じるのも何故だろう？？

「見つけたお前は頭部だけでその状態も酷いものだった。」

頭部だけってことは、爆発のときに偶然外れてしまったのだろうか？ブロッケンボディーに命を助けられるときが来るなんてね。

「魂を封じた器も損傷していたからな。そのものに安全な場所まで運び込み目覚めるまで守れと命令し。お主の魂はこの場所に召喚し力を注ぎ回復を促したのだ。それでも目が覚めるまで10年も掛かってしまったがな。」

ソウルジェムまで損傷していたなんて…。本当に運が良かったのね。でも、身体はどうなっているのだろうか？あっちは確実に爆散したはずだし。聞いてみよう。

「む、身体の事か？安心しろちゃんと用意してある。といっても以前の身体を強化したものなのだがな。あのときの身体は奴の力の大部分を共に散ったからな。」

グレート時のことかな？グレート、今までありがとう。そして、おやすみ。

「あのような事になってしまったお主には辛いと思うがどうか奴を止めてくれ。今回の事でわかった、奴は封印などといってられぬ。例え今再び封印したとしてもいずれまた復活するだろう。」

そうね、ゼウスがどんな封印をしたのかわからないけど。それさえも破って復活しかかっているのだ。今の人間の封印術じゃ、またすぐに復活してしまうかもしれない。

「奴とはかつては仲間であった。考えの違いから対立し封印する事態となったが。封印されているうちに考えを改めるかと思っただが、それもかなわなかった。もやは奴をあの世界に残しておくわけにはいかん！」

改心してくれると信じていたけど、時間がたっても。いえ、年月を経た事でよけいに性質が悪くなってそうね。

「奴の封印されている地、奪われた身体、そして奴自身の力。これがどれほど困難な事かはわかってる。だが、どうか再びあの世界に行つて奴に引導を渡してくれ。」

その後も封印の地であるバードス島の状態を聞いたりした。確かに無茶なお願いね。完全な状態じゃなくてもあれだけの力を誇つたのだから。なのに、彼に終止符を討つには彼の本体とも対峙しなくてはいけない。

そのとき身体に魂が有るか判らないが前回とは比較にならないだろう力なのは容易に想像が付く。

逃げてしまいたい、そう思わなくもない。

…でも。

「わかりました。次こそは必ず彼を倒してみせます。」

もう決めているものね。ここで逃げているのならばあの時あんな事はしてないもの。

「すまぬ…。」

でもそうになると、色々と準備をしなくちゃね。彼の詳しい情報も必要だし、何よりこれは1人でできる事じゃない。彼に本当の意味で終止符を討つなら大勢の、いえ世界規模での協力者がいるわね。

「いえ、私がやりたいのです。やらせてください！」

「わかった、私も色々と協力したいのだが干渉できる時は限られている。サポート役を介して少しは協力できるようにしよう。」

「ありがとうございます。それで早速なのですが彼についての情報が欲しいのですが。」

「わかった、と言いたいのだが封印後の奴の情報は少なくてな。だが現在奴が活動するために奪っている魂の事ならわかる。」

「奪っている魂？」

「ああ、詳しくはわからぬが、今奴の精神が取り付いているのは向こうではく始まりの魔法使いく創造主くと呼ばれるものだ。」

創造主、それが本来の完全なる世界の首領だったのかしら？

「大方偶然バードスにたどり着いた者に魂に寄生する代わりに力を授けたといったところか。」

色々調べる必要がありそうね。

「わかりました、残りは向こうに行ってから調べてみます。」

「すまぬな。協力すると言っておきながら…。体の事と奴の行方はこちらでも調べてみるわかり次第連絡を送ろう。」

でも、彼の復活の原因を考えるとこれは私たちが解決しなければならぬ事だろう。

「では、あの世界に送ろう。サポート役はすぐ側に居る。仲良くしてれ。」

楽しみね。それに、心配をかけてだろう皆にも顔を見せないね。それに対峙する時のために修行もしないと。ふふ、忙しくなるわね。

「ではな。武運を祈る！」

今回はアレはなかったわね。とくだらない事を思いつつ私は帰還して行った。

「ここは。」

目が覚めて周りを見渡すと始めてこの世界で目が覚めて時のような石造りの部屋だった。

「戻ってきたのね。なら、早速行動しますか。あ、そういえばサポ  
ート役の子は？」

気合を入れて立ち上がり、周りを見てみると。

「やあ、目が覚めたみたいだね。」

「あ、そっちなのね…。え？」

振り向いた先そこには身体の大きさは猫くらいの可愛い顔にルビ  
ーのような綺麗な紅い目を持ち、その身体は純白の毛で包まれてい  
て声もかわいい小動物がいた。でも、これって…。

「僕の名前は“キュウベえ” 聞いていると思うけどゼウス様から君のサポートをするように言われているよ。これからよろしくね。」

何でキュウベえ！君どっちかって言うと闇の帝王側じゃない？

あの時感じた不安ってこれか！

私のもものすごく不安そうにしているぞ。

「あ、心配しなくてもあのインキュベータってのみたいに実は黒幕ってことはないから。だから闇の帝王が送り込んだスパイじゃないから安心してよ。」（まんまじゃ面白くないからね！by作者）

それならいいのだけれど。あと変なコメントも入ったような…。

「ごめんなさい。いきなり失礼な事を思っちゃって。」

「いやいや、彼の事を知っているならしょうがないさ。じゃあ、改めてよろしく。」

「ええ、これから一緒に頑張りましょう。」



妙な事になったけど私はまた帰ってきた。そして今度こそは彼を必ず倒そう。

私は決意を新たに外へと踏み出した！

## 帰還と新たな決意、新しい仲間（後書き）

主人公帰還と彼登場ですw

主人公の真の身体、伝説の剣よろしくダンジョンに隠してたら魔王一味にはくられたでござる。

その他、創造主がああなった過程とかは後々書いていきます。

で、サポート役は彼ですw彼にも色々暗躍させようかなあ〜とw  
次回は設定です。

## 人物設定（前書き）

主人公とその他の設定です。

## 人物設定

主人公

名前 巴マミ

かつての身体は大戦時仲間を救うため爆散。現在は一番初めの身体をパワーアップしたもの。グレート時の強化したZとさせていただき。

グレート時からの変更点で。

マジンガーブレードなし。(アイアンカッターもない)

サンダーブレイクの機能なし。

各兵装の出力が若干ダウン。

スクランブルダッシュがなくなり、飛行するときには1回1回スクラonderを呼び合体する必要あり。付けたままでもいいが日常生活や接近戦では邪魔になる。

身体自体のパワーや防御力には変化はなく、ブロッケンの機能やマミさんの魔法も問題なく使用可能。

アーティファクトも健在、あしゅら達もいるけど当分ガミアQくらいしか出番はたぶんない。

強さは紅き翼クラス。ラカンの強さ表でいくと1万とかそんなくらい。

打倒！闇の帝王。のために修行をする事を決意、また協力者を増やす事も画策中。

キュウベえ

ゼウスが主人公のサポート役に遣わせた白くて憎いアイツ。

闇の帝王の手先じゃないのでご安心を。

でも、基本的な性格はアレっぽくする予定w

カモ君のライバル。

闇の帝王（旧名ハーデス）

ミケーネ帝国の支配者

かつてゼウスと意見を違い戦った後、居城であったミケーネ島ごと封印された。

その後、色々あって原作の創造主に寄生。復活のために力を蓄え、ついに復活！…って、ところで主人公と紅き翼にやられて弱体化。

その後、創造主として振舞っていたがまたナギ達にやられて現在は原作の状態です。

ちなみに闇の帝王やその他の話はマミにしかしていなく彼女も話す前に行方不明になったので原作キャラ全員は現時点では闇の帝王のことを知ってません。

完全なる世界の面々も同じく、彼のことは原作と同じ創造主と思っ  
てます。

## ミケーネ

大戦編で最後のほうに何かやってた人たち

かつてのミケーネ帝国の末裔で闇の帝王復活を悲願として活動中。  
周りからの認識は完全なる世界の下端と思われる。

現在はとある計画を実行中。

## バードス島

闇の帝王の居城で彼の本体があるところ。現在は封印されています。

## 人物設定（後書き）

学園編はギャグ主体で行く予定です。

また、学園編、魔法世界編はネギ君を主役として主人公はマミさんの皆のお姉さんなポジションで行こうかなと。

麻帆良へは数話後に出発かな？

では、最終回まで頑張っていきます！

マジーン・ゴー！



再開の旅と騒動と（前書き）

やっとネギ君登場！

## 再開の旅と騒動と

「それでマミ、これからどうするんだい？」

「そうね。闇の帝王の事とかやらなければならぬ事はあるけど、まずは紅き翼の皆のところ顔を出さないとね。他の皆にも帰ってきたことを言わないと。」

肩の上のキュウベいに今後の予定を話しつつ近くの町に足を向けた。

あんな分かれ方をしたんですもの。無事を知らせてあげないと。ふふ、皆びつくりするだろうな。

その後、チョッパーやラーリーさん達に無事を知らせる挨拶をしながら紅き翼の事を聞きいたら、フラガさん達のところ顔を出したときにラカンが近くにいらしいことを聞いて、現在そのいらしい場所に向かっているところだ。

「皆の話だとこのあたりね。」

「だね、それにしてもすごかったね。どうやら君は慕われているみたいだね。」

「行く先々で宴会が開かれちゃったものね。でも、嬉しいけどそれだけ心配をかけてたってことだからちよっと申し分けないなあ。」

「君は謙虚というか何と言うか。…っと、あれじゃないかな？」

前方にオアシスが見えてきた。たぶんあれだろう、私は足を速めて目的地に急いだ。

「誰もいないわね。」

着いたのはいいけど、そこには家やイスなどはあるのだけれども的に人物が見当たらない。

「君の話からすると居る事に気がつかないようなおとなしい人物じゃないだろうから、街に行ってるんじゃないかな。食料もないからその調達だね。」

「そうね、寝ていたとしてもすぐわかるような人だし。…って、キウベえなに勝手にのぞいてるの。」

「ここが使われているか判断するためさ。当然だろ？ゴミとかもあるしここが別荘ってことはなさそうだね。ゴミも比較的新しいみたいだし。」

確かに別荘かどうかは調べたほうがいいだろうけど、人の家なんだから。…なんでこんな所はあのQBと同じで人の感情とかを横に置いたような行動するんだろう？

「ここを第3者に見られたら思いっきり泥棒みたいでしょうね。」

「おい！人の家でなにやってるんだてめえら！」

「そうそうこんな感じに…え？」

何か早速そんな事態にそれにこの声って。

「ふてねえ野郎だ。だが俺様の家に侵入したのが運のつきだな。つてことで行くぞ！」

「え！ちよ…！ラカン、私よ…！」

「俺の知り合いにこそこそする奴はいねえ。」

その後、数時間ほど戦い何とか誤解が解けた。というより彼、途中から私だって気がついていたわね。だって…。

「マミ！生きていたのかよ！」「ええ、だから…！」

「あれから10年くらいか？どこに居たんだよ心配させやがって。」  
「だから。それを…！」

「こうやって戦うのも久しぶりだな！宴会の用意はしてねえからこれがその代わりだ！」「だから、人の話を聞いて！」

と再会祝いの代わりで延々と戦うはめになって…。

昼くらいに始まって、終わったときにはもう夜だった。それで。

「いやあ、それにしても懐かしいなあ。生きてたんなら知らせるよ」

「ごめんなさい。でも、それだけ酷かったのよ。つい最近やっと動けるようになったのだから。」

「そうか、ナギの話を聞いてると生きてる事自体奇跡とも言えるか。」

その後、あのあと何があったのか10年の間、完全なる世界を追っていた事。そして…。

「そうナギとガトウが…。」

「ナギのほうは生きちゃいるとは言え、な…。だがあいつはその選択に後悔してねえよ。それは確かだ。向こうの詠春たちにも会いに行くんだろ？その前にガトウの墓にもいってやってくれ。」

確か原作でも死亡や行方不明ってなっていたわね。でも、やっぱり知り合いがそんな事になるとわかっていても辛いわね。

詠春は京都か。アリカさんはナギの故郷のウェールズに向かったみたいだし、麻帆良つてところに居るアルとタカミチ君、アスナちゃんはその後になるかな。クルト君にも会いに行かないとね、それにしても元老院議員を目指すなんてすごいわね。

「それにしても闇の帝王とミケーネ帝国か…。」

「ええ、おそらくそれが創造主の真の正体と完全なる世界の裏に蠢いている組織よ。」

闇の帝王の事やミケーネの事もゼウスの事は少しぼやかしたが今もって居る情報は全部話した。ナギがその身を賭して封印したとは言っても、相手は神がかけた封印を破ってくるような相手だ。

いずれ復活してしまうだろう。ならば何年後かを目安に封印を解除してナギを救出し今度こそ完全に倒してしまう。今はまだ戦力が足りなく困難だろうが必ず実現してみせる。

その後夜を明かして語り合いラカンからクルト君に連絡を入れてもらい、私はメガロに向かった。

「マミさん！生きていたんですね！！」

「ええ、心配かけたわね。それにしても大きくなったわねクルト君。」

クルト君も完全なる世界撲滅に動いているみたいだがそれと同時に大戦後に貶められたアリカさんの名誉の回復のために動いているみたいだ。

ミケーネ帝国のことについては協力を是非させてくれって言われて議員の中でもまともな人に話して協力者を増やすつもりのようなようだ。

ヘラスのテオドラさんにも期を見て連絡を取るつもりのようなのだ。私自身が訪ねたいけれど最終決戦時に死亡したって事になってるしそれに10年たっても容姿が変わってなかったりで…。

そんなわけで生存報告とあわせて話してもらおうことにした。そのあとはクルト君の職場での愚痴を聞いていた。汚職がどうの…、本当に世界のことを考えてるか！とか…。

「それに最近報告で魔力の減少が例年よりおおとか…。」

そのときは大変ねえ。と思っていたが後でまさかあんな事になるなんて。

クルト君は明日も仕事のようだったから夜明かしでって事はなくほどほどのところで分かれた。

イギリスへのゲートは2週間後になるらしくまた向こうの世界の年は1994年みたいだ。

94年かあく確かとんでもない事件が日本であったよつな…。

ガトウさんのお墓にお参りをすませ、ゲートの時間までメガ口の街中を見て回っていた。終戦10年以上たったせいとかそれ関連の書籍がいろいろあったので少し買ってみた。

「これが大戦や紅き翼の記録かい？そのわりには君の事があまりな

いようだけど。」

そう、自分の事はどうなってるかなあ。と思って買ってみたが…、あんまり書いてなく地味にシヨックを受けていたりする。

元々紅き翼が連合で活躍していたせいかなギの事はよく書かれてあるのだけれど。帝国で活動していてもその時は機械獣のほろが目立っていたせいもあって、私の事は途中で合流した協力者その1つて感じだったりする。

最終決戦の事はちよびつと載ってはいるが居たのは紅き翼の皆だけだったせいで詳しくは載ってなく、勇気ある人物がいいところだ。

結果資料不足や知名度の影響でちよこつと書かれているくらいだった。写真も戦後の撮られた物が多いから私の写真はなかったし…。帝国では違う事を祈りたい。

別に英雄としてもてはやされたいわけじゃないけど、仲間との差がここまであるとさすがにへこむ。

「君たちは何でそんなことに囚われるのかなあ？結果さえよければそれが誰がやっても同じだろうに。」

キュウベえのそんな声を聞きつつその日は不貞寝した。



ゲートをくぐり久しぶりであり転生後は始めてのこちらの世界に  
来た。イギリスの地だから全て初めてではあるけど、なんとなく懐  
かしい気分にはなった。日本だとうなるのだろうか。私的にはこ  
こって過去の世界になっているわけか。

感慨にふけっっているのも程ほどにしてアリカさんがいるらしいナ  
ギの故郷に向かったが…。

「そうですか、彼女はもう…。」

「ええ、自分がここに居てはあの子に迷惑がかかるからと…。」

彼女が身籠っていた事は聞いていたが、まさか行方をくらませて  
いるなんて。確かにあの戦いの後のことは聞いているが…。村の人  
に行方を聞いても皆知らないようで、ここで情報がないならおそら  
く見つけることは困難を極めるだろう。

アリカさんにあつたら日本に行こうと思っただけだけど、  
ナギの子供のネギ君の事を聞いて暫く滞在することを決めた。子供  
一人という事ということが心配だしね。

「ネギの事ありがとございます。本当なら私が側に居たらいいの  
ですが…。」

「気にしないでいいわよ。それにあなたも子供なんだから大人の私  
たちに任せて置けばいいのよ。魔法学校の勉強だつてあるんだから。」

「はい、でもママさんが言うと言得力は余りないですね。」

「ふふ、褒め言葉としておくわ。」

この身体って歳を取らないっぽいよね。嬉しい事なのだろう…たぶん。まあ、それプラスに日本人って事でさらに幼く見えるみたいなのだが…。

あ、ちなみのこの子はネカネ・スプリングフィールドネギの従姉妹に当たるらしい。

「もう少ししたらネギも魔法学校に入学できる歳ですので、そうなれば向こうで暮らす事もできます。」

「そうね。そうなれば私が居なくても大丈夫かな？」

「やっぱり日本に？」

「ええ、昔の仲間も居るみたいだからね。」

「寂しくなりますね…。」

「そうね、でも二度と会えなくなるわけじゃないんだから。大昔と違って電話もあるし飛行機だってある。寂しくなったらまた会えばいいのよ。」

私はそれにプラスして裏技もあるしね。

「ネギは今、アーニヤちゃんど？」

「ええ、アーニヤちゃんも久しぶりにあえて嬉しいみたいです。」

トントン

「噂をすれば帰ってきたかな？」

「そうですね、もう夕飯の時間ですし。」

そんな感じで私がネギ君の面倒を普段は見て1ヶ月に何回か帰ってくるネカネちゃんやんと世間話をしたり、ネギ君にナギ達の事を話せる範囲で話したりする日々を過ごしていたある日。

「ねえ、お父さんと会えないってどーゆーこと？」

どうも誰かからナギが死んだ事を聞いてしまったらしい。

「お父さんとーくにお引越ししちゃったの？」

む、ここはネカネちゃんに任そうデリケートな問題は苦手だし…。そこ！へタレとか言わない。

「そうね、遠い遠い国に引っ越しちゃったの。それがく死んだっていつのはそういつのことよ。」

ちなみにキユウベえはさつさと退場してもらった。彼が居たらドストレートに言っちゃうだろうからなあ…。

でも、ナギの事が…、ネギ君のためにも絶対に何とかしなくちゃね。

「お父さんは来てくれるもん！」

「あんた馬鹿ね！死ぬって言うのは…！」

ありゃ、ちょっと考え事していたらなにやらアーニヤちゃんと喧嘩しちゃってる。

「はいこれ。あなたにあげるわネギ。」

「これは？」

「初頭魔法の練習用の杖よ。あんたも来年から魔法学校に来るんでしよう？」

あら、もう仲直りしちゃってる。アーニヤちゃんも素直じゃないなあ。

帰る前に何か暖かいものを飲もうと思って村のパブに寄ってみると。

「スタンさん、こんにちは。」

「おお、ママミ達か。」

この人はスタンさんっていて昔ナギにいろいろ苦労させられたみたい。

「全くあいつがいなくなっただけでせいぜいしたわい。あいつには毎日苦労かけられたからな！」

「飲みすぎですよスタンさん。」

もう、ネギ君だっているのに。

「お父さんは悪い人だったの？」

「ああ、悪ガキじゃったわい。あいつの後始末を何度させられたか。村が巻き込まれた事だっただけ。」

まあ、間違っても品行方正じゃなかったわねえ。

カランカラン

「あ、ネギ！すいませんマミさん、私。」

「ええ、追いかけてあげて。私はもう少ししたら戻るわ。」

「じーさん、もっと言い方ってもんがあるだろ？」

「ふん事実じゃわい。」

「それにしたって相手は子供なんですから。いくら寂しいからって…。」

「誰があいつのことを寂しがつてるんじゃない！あんな子供と奥さんをほったらかして死んじまった奴なんて…。」

ふう、この人も意地っ張りね。

でも、私のときも皆こんな感じだったんだろうか？私も人の事言えないわね。

その翌日、ネカネちゃんとアーニヤちゃんが魔法学校に帰っていった。またしばらくは私とネギ君の2人だけの生活だ。

ネギ君もナギの絵を描いたり魔法の練習をしたりしている。

（私が魔法を見てあげたら良いんだけど、この身体魔法どころか気すら使えないみたいだからなあ。）

何回か試したり大戦中に皆と模擬戦や修行をしたときにもぜんぜん使えなかったのだ。

（当たり前だよ。君の身体はゼウスの身体を元につくったもた。この世界の法則で創られているわけじゃないから使えなくて当たり前だよ。）

キュウベいから回答がいきなり来た。なるほど、私の身体はいつてみれば神のイミテーションだから人間用の技術は使えないって分けね。

それはいいとして、しょうがないとは言えアリカさんのことをネギ君が全く知らないってのは…。アリカさんの現在の評判を考えれ

ばしょうがないんだろうけど。いつか教えてあげたいな。

そんなこんなで毎日が過ぎていったあるとき。

「ネギ君がいたずらを？」

「ああ、木から飛び降りたり、犬の鎖を切ったりしてな。まったく似なくていいところが似てしまつて。」

「いやいや、あれくらいの年頃の男ならそんなものでしょう。元気があっていいじゃないですか。」

「私のほうからもそれとなく言ってみます。」

「ああすまんな。」

ネギ君がいたずらをねえ。そんな性格じゃないと思つただけどころというのなのかな？ 転生前は男だったとはいえ記憶も感覚ももうほとんどないからなあ。

とりあえず、注意して様子を見ましよう。

ん？前から物凄く慌てた人が…ってネギ君！

その人の背にずぶぬれで酷く弱ったネギ君が背負われていた。

どうやら少し遅かったみたいだ。

その後、ネカネちゃんも飛んできたりと大騒ぎになり今は状態も落ち着いてネカネちゃんが側に居る。

「はあ、面倒を見るって言うておいてこんなことになるなんて。」

もう少しネギ君の事をしっかり見ておかなきゃいけなかったわね。

「いや、お前さんは頑張っているよ。」

「スタンさん。」

「お前さんが悪いのなら、この村全員が悪いってことじゃ。本来なら村人全員で見守り叱ってやらねばいけないんじゃないじゃ。それをあの馬鹿や彼女が親なことを理由に今まで大丈夫だろうと甘えていたんじゃないわ。」

しばらくして、ネギ君が寝たようのでネカネちゃんが出てきて話している。

「ピンチになったら現れるね…。」



「ええ、それであんな事を。」

「ネギ君にとってナギはまさにヒーローですものね。わかったは大丈夫だとは思っけれど、これからは目を離さないで置くわ。」

「すみません、いつもいつも。」

「いいえ、今回の事は私が悪いわ。ネギ君が色々いたずらをしていたみたいだからね。もっと早く聞いておけば防げたかもしれないのだから。」

「ありがとうございます。」

それからネギ君がどこかに行くたびにについていくようにして行けない時はキュウベえに頼んで様子を見てもらっている。

日々がたちネカネちゃんがまた帰ってくる日が来て、今日は近くの湖に釣りに来ている。

「ネギ君、そろそろネカネちゃんも来る頃だし帰ろうか?」

「あ、そうだね!じゃあ、はやく帰ろうママとお姉ちゃん。」

「ええ、>ピピ<あら何かしら？ごめんねネギ君、先に帰っていて私もすぐに行くから。キユウベえ彼のことよろしく。」

「わかったよ、マミ。」

「うん、マミお姉ちゃんも早く来てね。」

彼らを見送ったああと通信相手を見てみるとクルト君だった

「クルト君から来るなんて珍しいわね？」

そう思って繋いでみると。

<よかった！つながった！>

「どうしたのそんなに慌てて。」

<それがついさっき元老議員の1人がネギ君を殺すために悪魔の大群を召喚して送り出したそうなんです！>

「何ですって！」

<今ここに居ます！？急いで彼の保護を！>

「それなら大丈夫、今ちようどそのネギ君の居る村に居るわ。」

<おお！なら早く！聞き出したのはさっきですが送り出したのはだ  
いぶ前のようです！>

「わかったはそっちもよろしく！」

< ええ、必ず裁いて見せます！ >

く、こんな事なら先に行かせるんじゃないかな！最近、やる事が後手に回ってばかりね。

「来てスクランダー！」

その掛け声を受けてどこからともなく紅の翼を持った物体が飛来してきた。

「スクランダークロス！お願い、間に合って！」

合体し全速力で一路村に向かった。

「く、酷い。」

着いたときには村は火の海で包まれていてすでに何人も人が石になっていた。

< キュウべえ！ネギ君は！ >

< 彼の事は任せて君は敵を。でも、急いだほうがいい今にも走り出しそうだ。 >

< わかったわ。あなたはそのままネギ君をお願い。村人もそっちに非難させるわ。 >

キユウベえとの通信を切り村を見据え。

「一気にいくわよ！」

久しぶりにアーティファクトを呼び出しガミアちゃん達人間大の機械獣を召喚し、私は無数の銃を滞空させて悪魔の群れにへと突っ込んだ。

「皆！丘の上に避難して！悪魔は私が何とかするわ！！」

「すまん、腕に自信はあったのだがこいつら上級悪魔のようだ！君も気をつけてな。」

「ええ、丘の上のでっかい物は味方ですから安心して盾にしてください。」

通常サイズの機械獣もついでに呼び出して丘の上に待機させて悪魔を追い払ってもらっている。

「それにしても、数が多いわね！」

パンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパンパン

次々に銃を召喚しては撃ち続けて減らして入るが減ってる気がしない。

「マミ君！」

「スタンさん、ネカネちゃん！よかった、無事だったのね。」

「ワシらはな。じゃが何人がやられておる。ネギは？」

「丘の上に避難させています。あなた達も早く。」

「すまん！ネカネいくぞ！」

「はい！マミさんどうかご無事で！」

後どれくらい人が残ってるの！

その後しばらく悪魔を蹴散らしていると

<マミ様、生体反応がある村人の救出完了しました。現在丘にて待機中です。>

「わかったわ。ネギ君の事を見ていて飛び出していきそうで心配だから。」

<了解しました。>

あとは悪魔を駆逐するだけね！

「……、まだでてくるの？」

気合を入れたとたんまた地面から悪魔がわいてきた。これはさすがにしんどいわね。

「どうした、しばらく見ない間になまっちまったか？」

ん？この声は！

「……………！！雷の暴風！」

ちよ！

「これで大半は片付いたか？」

「ちよつと、石化した人とかいるのよ！もう少し考えて…。」

「あ……、大丈夫だ！寸止めにしてある！」

この馬鹿っばさ間違いなくナギね。今のどこが寸止めなのよ？

「まあ、再会は後回しで今は殲滅を優先させましょう。」

「だな！」

程なくして悪魔の殲滅も完了した。丘のほうにも何体か向かったらしいが問題なく撃破されたみたいだ。

今は丘に向かっている途中で。

「まさかお前が生きていたとわな！なんですぐに姿現さなかったんだよ。」

「こつちも出られる状態じゃなかったのよ。それで相打ちであれを封印したんですって?」

「ああ、今は麻帆良ってところにある。」

「はあ、人の事言えないけど自分の子供を心配させるなんて。」

「そついえば居るんだな。あそこに。」

「ええ、無事よ。しっかりと話してあげなさい。どうせ当分出られないのでしょっ?」

「当分てより最後かな…。」

「当分よ。必ず助け出して決着をつけるわ。」

「へへっ、それは頼もしいな。」

そんなことを話しながら丘に到着すると皆、幽霊を見たみたいにびっくりしていた。

が、時間もあまりなくナギはネギ君と少し話して彼の杖を預けて消えていった。

犠牲はあったが多くの人が無事な人も多かったからよしとするしかないかな。そのあとはネカネちゃんとなぎ君を魔法学校のある町いかせて残った人で復興作業と石化した人達を魔法学校に運ぶことになった。

私は今、魔法学校の校長先生の部屋に居て今回の件の原因とまたもしかしたら裏に居るかもしれないミケーネ帝国のことについて話し合っていた。

「なるほどのう。ネギ君を邪魔に思った元老院議員の差し金か、そしてミケーネ帝国か…。」

「ミケーネが裏に居るかはわかりませんが今後、どこかで暗躍を始めるのは確かかと。」

「おのが主が封じられているならそうじゃろうな。それで君はそのことを話してどうして欲しいんじゃ？」

「ミケーネの事は心に止めておいてくれれば今はそれでいいです。けれどネギ君のことは…。」

「そうじゃな、今回だけが特別。などと甘い事は言えんじやろうからな。」

ナギの事、アリカさんのこと狙われる可能性は今後も十分にある。

「彼をこのままこちらに置いておく事は危険か…。ふむ、そうじゃな彼を近衛門のところに預けてみるか。」

「近衛門？」



「ああ、ワシの知り合いでの。日本にある魔法使いの拠点の長をしているんじゃない。そこに卒業試験もかねて送ろうかとな。」

「大丈夫なのですか？」

「大丈夫じゃ、日本、というよりアジア地域はワシら魔法使いにとつてアウェーじゃからの。メガロがちょっかいをかけてくる確立も減るじゃろう。とは言ってもこれから話し合ってみんことにはなんとも言えんがな。」

「それならば、私もその麻帆良でネギ君を見守りましょう。元々日本には行く予定でしたので。」

「そうか君がいてくれると心強い。ネギ君がこっちに居る間は我々に任せてくれ。」

「ええ、任せてください。ネギ君のことよろしくお願いします。」

その後2、3話し合いネギ君たちにもわかれることを伝えて私は日本へと。懐かしの故郷へと旅立った。

## 再開の旅と騒動と（後書き）

やっと、原作介入らしい原作介入をしましたw  
本作では悪魔襲撃時でも多くの人があつてます。

ミケーネ帝国と闇の帝王の事は話して回っていますが闇の帝王の事はともかく、ミケーネについてはこんなのが居るらしいってくらいなので具体的な行動とかは起こしません。

次で日本の詠春とタカミチなどと再会です。このまま次の話で一気にマミが入学するまで行くかも？話を切ったりするのが下手なので長くなったり短くなったりします…。

新しい次回予告が決まらないなあ…。他の作品のように作品内のキヤラと対話形式の漫才や小ネタでも入れてみるか…。

感想など受付中！作者のやる気がアップしますw

おいでませ麻帆良！

「着いたわね。帰ってきた…、なんだかとても懐かしいわね。」

私は今日本に居る。転生してから初めて生まれ故郷である日本の地に降り立ったのだ。

転生してからもう15、6年。意識があつた時間でも5、6年短いようで長いような時間が過ぎた。そもそもこつちの世界に返ってきたのもつい最近だが、やっぱり日本に居る事で帰ってきたと実感できる。

とは言っても前世とこの世界が同一ではなく、まして私の感覚では今は過去の世界になるわけだ。生まれ故郷の街にも行ってみたいし、東京見物もしたいが今は麻帆良のタカミチ君と近衛門さんに会いに行くことが先決だ。

詠春の所にも行きたいが、彼は今じゃ組織の重鎮みだいだからアポ無しで行くわけにもいかない。今から会いに行く近衛門さんが詠春の義理の祖父になるって校長も言っていたからその時に連絡を入れようかな。

降り立った羽田から電車を乗り継ぎ埼玉県にある麻帆良学園にきたのだが、どうでもいいことに懐かしんでもいる。

電車の混み具合や正確さ等々、どうでもいいことで日本に帰ってきたなあと改めて実感している。

「なんで、あんな不快感しか感じない状況でそんなに感動できるん

だか。君たちの感覚は本当にわからないね。」

人が感動に浸ってるのにこの子は…。確かに混雑していたりしたけど、懐かしいんだからいいでしょ。

で、現在タカミチ君との待ち合わせ場所の麻帆良学園中等部駅前にいるのだけれど、見当たらないわね？まだ来てないのかな。

と思っていると。

「ママさん！お久しぶりですー！」

あ、着たみたいね。

「久しぶりタカミチ君。ふふ、大きくなったわね。」

「本当に…本当に生きていたんですね！クルトから聞いたときは何を言ってると思ったのですが…！」

あらあら、本当に心配させちゃったわね。

「ごめんなさいね。あの時はああするしかないと考えたから。それより詳しい話は後で、ここで生きていたやら見た目年下の子に“さん”付けはおかしいでしょ。」

「そうですね。学園長室まで案内します。」

「ええ、お願いするわ。」

道すがらチヨコチヨコと話しつつ向かっていった。

「あとで、アルさんにも顔を見せてあげてください。彼も喜ぶでしょう。」

「彼もいるの？」

「ええ、少し込み入った事情がありますが…。」

「そのことは近衛門さんも交えてやったほうがいいわね。でも、あのタカミチ君が先生かあ通うことになったらタカミチ先生って呼んだほうがいいかしら。」

「え！そんな今までどおり君が呼び捨てで結構ですよ。」

「そういうわけにもいかないでしょ？アスナちゃんは今幸せに暮らしているのね…。」

「はい、けれどネギ君の事を聞いたら果たしてそれでいいのか…。」

「時間は多くはないけれど少なくともないわ。そうね、彼女が高校生になるまでに決めればいいと思うわ。もちろん彼女の意思も大切だけれどね。」

「そうですね。今は友達と楽しく遊ぶのが一番でしょう。」

ネギ君もそうだけど、彼女の事も何とかしたほうがいいわね。

そうこうしている内に現在、学園長室前。

「でもなんで、学園長室が女子中等部内に？」

「僕も最初は不思議に思ったんですけど、どうも世界樹のほかに魔法的や霊的重心地がこの中等部近辺みたいなので学園長室、と言うよりは魔法協会の会長室を設けてあるそうです。学園の運営を行う部署などは他のもっとしつかりした所にありますよ。」

「なるほど、そんな理由がね。」

「では、入りますね。学園長！バمامィさんをお連れしました！」

中から了承の聲がして入るとそこには…。

妖怪がいた。

「身体の左右で性別が違ったり、首が分離飛行できたりする人もいるけど後頭部が長いなんてまた奇抜だね。いや、大男の上に小男よりはましなのかな？」

「ちょ！キュウベえそのとおりだけど本人に向かって！あと、最初の二つ全部私関係じゃない、とくに後ろ！」

「すみません、近衛学園長！この子色々ストレートな物言いで！」

「いえ、マミさん今の発言も結構……。」

「い、いや、気にしてないぞ。大丈夫じゃ……そのくらい……そのくらいで……。ワシってそんなトンデモナイ人物と一緒になのか……首はともかく左右で性別が違うものと……。」

「思いつきりへこんでるわね……。ここは何事もなかったかのようにするのが一番！……のはず。」

「申し送れました、私はバマミと申します。タカミチさんから聞いていると思いますが紅き翼に所属していました。それとこの子はキュウベえ君で私のサポーターです。」

「よろしく願いますよ。」

「うむ、ワシはこの麻帆良学園に本拠地を構えている関東魔法協会会長の近衛近衛門じゃ。君の事はタカミチ君とウェールズの彼から聞いて居る。今回は先の襲撃の件と他にもいくつか話したいことがあるそうじゃな？」

よし、近衛門さんも何とか立ち直ってくれた。

「はい。そのことなのですが先ほどタカミチさんからアルビレオさんの事を聞きましたので詳しくは彼を交えて後ほど話したいと思います。」

闇の帝王とミケーネについては彼も交えたほうがいいでしょうかね。

「それほど重要だと？」

「はい、ここにある。彼の者も関係しています。」

「！それについてはどこから？」

「ラカンさんから聞きました。」

「なるほど、彼なら話しそうですね。」

「あいわかった、彼に連絡を取って近日中に話し合いの場を設けよう。後は…ネギ君のことじゃな。」

「はい、校長先生は卒業後の修行先をこちらに指定したいと。こちらならメガ口の干渉を最小限にできるだろうつからと。」



「確かに魔法学校にいる間はともかくそのあと欧州はまずいかな……。了解した、そちらも受け入れ態勢を整えておこう。こちらに来るのは履修終了が7年じゃから2005年かの？」

「そうですね。ナギのように中退したり、1999年にあの予言が当たらなければそうなりますね。」

「ふおおおお！確かにそうじゃの。あの予言が本当ならワシらは大忙しじゃ。」

まだ20世紀だからあの予言前なのよねえ。懐かしいわねえ。

「それで、お主はどうするか？よければここで警備員として働いて欲しいが。なにぶん人手不足で、専用の人員を用意する予算も乏しく兼任の魔法先生や生徒で何とかやっている状態での。」

「そうですね。詠春さんの所にも行って来たいのでその後でしたらかまいません。ネギ君が来たときには彼の側でサポートしようとも思っていますので。」

「そうか！君がいてくれれば百人力じゃの。正式に採用するときには顔合わせと腕試しの場を設けたいのじゃがいいかの？」

「はい、よろしく願います。あ、できれば私が紅き翼に所属していた事は内密に。」

「ひょ？何故じゃ？知らせたほうが皆も喜ぶじゃろつに。」

「あまり注目を集めたくないと言うのもありますが、紅き翼が2人もいるとわかれば何がしかの恨みを持つものがこないとは限りませ

ん。ここは戦場じゃ無いのですからそこまでして士気をあげる必要は無いかと。」

「確かにそれもそうじゃな。あいわかった、君の事はウェールズの魔法学校からの研修生としておこつ。それと婿殿への紹介状も一筆書いておこつ。明日取りに来なされ。」

「重ね重ねありがとうございます。」

「うむ、それでは詳しいことはまた後日じゃな。」

「はい、それではありがとうございました。」

その後はタカミチ君とアスナちゃんが住んでいる家にお邪魔してご馳走になってそのまま泊まり。次の日に近衛門さんから詠春への紹介状を貰い京都に出発した。

おいでませ麻帆良！（後書き）

主人公、日本と麻帆良の地を踏む！でした。

学園長に關してのお約束と麻帆良についての独自設定です。

次回は詠春やアルたちと話したあとで腕試しになるから長めになるかな？

呪術協会と内情と（前書き）

PV2万&ユニーク3千突破！  
これを励みに頑張っていけます！

## 呪術協会と内情と

そつだ、京都に行こう！

つて、訳でもないけれど今私は京都の呪術協会に向かっている。

京都はさすがに前世に行った時とそんなに変わってないわね。いえ、魔法なんてモノがあるから実際は一番変わっているかもしれないわね。

つと、のんびり観光するのは詠春にあつてからね。予定の時間までそんなに間がないし急がないと。待ち合わせ場所の協会の入り口はこつちね。

「ここが入り口のカガビコノヤシロね。立派な鳥居ね、それに伏見神社の千本鳥居みたいなものもあるわね。」

一般公開しているみたいだけれど大丈夫なのかしら？学園長の話だと呪術協会詰めの際陽師の自宅でもあるみたいだし。

とりあえず入ってみますか。待ち合わせ場所はこの中の休憩所みたいね。

しばらく歩くと自動販売機と休憩所らしきものが見えてきた。周りを囲む鳥居はその先も途切れる気配が無いからこんな場所も必要なのね。全体でどれくらいあるんだろう？

そう思つて近づくとすでに相手はきていたようだ、待たせてしまつたかしら。

「お待たせしました、近衛詠春殿の古い知り合いでバママミと申します。この度は日本に越して来たのでご挨拶に来ました。こちらが近衛近衛門さんの紹介状になります。」

「いえ、まだ約束の間ではなのでこちらが早く来すぎたのでしよう。私は案内を仰せつかつた橘楓と申します。」

綺麗な人だなあ、それにやっぱり巫女さんはいいわね。っと、どうでもいい事考えていたら相手が続きを話し始めた。

「この度は遠路はるばるご苦労様です。本山に案内しますので私の後についてきてください。ここより鳥居の全て抜けるまで振り返らぬようお願いします。」

なるほど何か秘密の通行方があつてそれで本山と社を分けているのかしら。

そのあと話しつつ無事鳥居を抜けこれまた立派な門をくぐり呪術協会総本山に着いた。

「大きいわね。それにこんな季節でも桜が？」

「本山は数々の呪具や書物の保管場所、他にも集会場所や陰陽師の自宅の他にも社としての機能が移築されているのでここまで巨大になったそうです。桜は魔よけもかねています。」

麻帆良ではある程度は分散していた魔法関係の施設が全部一箇所に集めてあるからか、それだとこのくらいになるのかな。

詠春と話す場所まで案内される間の話だところに有る物はほんの一部で多くは各地の寺院や国の管理施設にあるそう。その中でも使用頻度が高かったり扱える事ができるのが陰陽師だけだったりする物はここにおいてあるそう。

話を聞いているとGS 神であった東京の地下に有る呪術要塞？ 見たいなモノがこの世界はありそうね。怖くて聞けないけれど。後はバチカンにも興味本位でいつてみたいかも。……立川にもいつてみようかしら。

そのあともあの二人がとある世界に光臨したらどうなるんだろう？ など心底どうでもいいことを考えていると、襖が開き懐かしいかを見れた。

「やあ、待たせてしまったかな？だが、本当に生きていたのだな。」

「いえ、大丈夫よ。ええ、このとおり足はあるわよ。」

そのまま再会を祝して！っていきたいけれど、詠春もそんなに時間が無いみたいだから闇の帝王とミケーネ帝国のことを話し警戒と協力者作りに協力してもらおう事になった。

その後は自分が居ない間に何があつたかなど話していて、

「そう、奥さんが。」

「ええ、元々体が丈夫ではなかつたところにこのかを生んだ影響でしばらくして…。だが、あいつは最後まで幸せだった。だからこそ私はこのかを守っていこうと誓つたのだ。」

「そう、しっかりとお父さんとしてこのかちゃんを守らないとね。」

「それで何か心配事が？」

「顔に出ていたか？やはり私は長なんて器じゃないな。…ここに来るまでにうちの者が何か失礼をしなかつたか？」

「そんなこと無いと思うけれど、少なくともあの二人よりは…。ん、そんな感じはしなかつたけれど。」

「そんな感じはしなかつたわよ。」

「それならいいのだが。実はこれはこのかの事も関係していてな。」

詠春の話によると先の大戦の影響がこっちの世界にも飛び火して日本も少なくともあるがダメージを負つた事、元々魔法使いとの仲は良い訳ではないけれどこの一件でさらに微妙な事になってしまつて  
いる事と。

日本全体が余りよくない運氣に包まれているみたいで過激派の人



の中には麻帆良に侵攻し世界樹を奪取しそれによって陰気を祓おう  
って言う意見が出てきていたり協会内がごたごたしているようだ。

前ならそんな意見は全く相手にされなかったが今は全大戦の事で  
反魔法使いと言ってもいい人達と日本全体を包む閉塞感をどうにか  
しようと思っている人達がそれなりにいる事。

他にも協会内で多数の派閥が形成されていてそれぞれがどうした  
らいいか分からずバラバラで動いているせいで上層部もうまく統制  
が取れていないらしい。

詠春は大戦を通して持つ事になった魔法使いたちに対する太いパ  
イプをかわれて現在の地位に居るが気苦労が絶えないらしい。

その中で生まれたこのかちゃんは強大な魔力を保有していて、こ  
の事がさらにごたごたを助長させたりと…。詠春もこのかちゃんの  
保有魔力を考えると魔法使いか陰陽師になったほうがいいと思っ  
てはいるのだけれど。

「今の協会の事を見ていると心配だと？」

「ええ、流石に権力闘争から来る暗闘は起こっていないがこのかの  
才能を考えるとおそらく長となる事は確実だろう。そうなると今の  
私と同じかそれ以上の苦労を強いる事になるのは確実だ。私はそ  
れが心配で。」

なるほどね。でも、今更ながら部外者にここまで内情を喋っちゃ  
っていいのかしら？それだけ心配なのと苦労してるのかしら…。

「あなたの心配は分かるけれど。結局は決めるのは本人だと私は思

うわ。今すぐ出す答えでもないのだからしっかり考えたら？」

「そうだな、焦っていたのかもしれないな。このかが長になる前に私達が問題を解決してしまえばいいのだな。」

「親なんだから当たり前だと思うわよ。彼の事についても私達がやり残した事ですものね。次の世代に残さず私たちで片をつけないとね！」

「ああ、そうだな。そういえばお前は麻帆良に住むそうだな？」

「ええ、そうするつもりよ。近衛門さんから？」

「ああ、義父さんから聞いている。お願いがあるのだが。」

「なに改まって？」

「来年にでもこのかを麻帆良に転校させるつもりだ。このかを守ってはくれないだろうか。」

「いいけれど大丈夫なの？」

「皆には見聞を広めるためとでも言おう。これから協会内はより荒れるだろうからな、少しでも安全なところにと。」

「私はかまわないわよ。でも、護衛は別に雇ったほうがいいと思うわ。専門じゃないしね。それに信用できる人くらいにはしっかりと話した方がいいわよ？」

「ありがとう。そっちは心当たりがある。話すものはこれから見極

めるつもりだ。」

「心配無用だったみたいね、分かったわそれとなく見ておくわ。」

そのあとも昔話に花を咲かせていたが詠春の予定が押してきたので私達は分かれて、私は本山を降りて京都観光に繰り出した。

## 呪術協会と内情と（後書き）

きりが良かったので詠春と呪術協会の話しで終了しました。  
呪術協会の内情については完全に捏造で言ってますw無理があるかな？

今回はちゃんとバトル入れます！

小ネタコーナー

作者（以下作）「うん。」

主人公（以下主）「どうしたの？」

作「次の腕試しで誰を生贄にしようかと。」

主「生贄って…」

作「タカミチが相手としてちようどいいんだけど出自誤魔化してあるからね。」

主「無名の人が原作最強クラスと互角ってのは変ですものね。」

作「よし！瀬流彦先生、君に決めた！やられ役お願いします！」

主「ちよつと、それは色々…」

作「大丈夫しつかり手はある。」

主「瀬流彦先生、できる限り手加減します…。」

次回「顔見せと腕試しと模擬戦と」

瀬流彦先生は生き残れるのか！ってかあの人の時期（97年）って教職なのか？

彼女も出ますよ！

どうでしょう？これを次回からの次回予告にしていこうかなど。  
もう一つ愚痴…：京都弁が分からない！！

## 顔見せと腕試しと模擬戦と

京都観光のあと麻帆良に帰ってきた週の週末に顔見せと腕をこの人たちに披露する場が設けられることになった。

「もう一度確認しますがマミさんは魔法世界出身でこちらでの職を探しているときに知り合いのウェールズ魔法学校の人に麻帆良学園での警備員の事を聞いてきたという事になっています。また、僕とも向こうで知り合っていてその伝もあつたということになっています。」

「そっちは問題ないわ。それで腕試しって何をするの？」

「純粋に力量がどれくらいあるかも示すためですが、捕縛もできるかも見せる事になります。面倒かもしれませんが人員が少ないからこそ互いを知って信頼関係を構築する必要があるのでこのような方法を取っています。」

「いいえ、実際もともとここで働いていて人達からすれば私は見ず知らずの、それこそこちらの世界を知らなかったかもしれない人になるのだから。だったら最初にしっかりと共に戦える仲間だつてことを示さないとな。」

「はい…。それと、アルビレオさんとの話し合いの場なのですが向こうは了承してくれたのですが学園長の予定があわずにしばらくは無理そうです。」

「そう、まあ1、2週間でどうにかなる事じゃないからね。しっかりと話し合える事が年内にでも出来ればいいわ。それと、年の事は

どうするの？」

何故だか不老みたいなのよねこの身体。

「向こうの世界の長命種の血がわずかに入っているという事になっています。」

なるほど、魔法がある世界ならではの理由ね。

そんなこんなで顔見せ当日。私は集合場所の世界樹前広場に向かっている。

「こういうことは初めが肝心ですからね。しっかりやらなくちゃ。」

「こんな事はトップか人事担当が知らせれば終わるのに何でこんな非効率なんだろうね。」

人がやる気を出そうとしてるのに……。それに挨拶は普通の会社でもするでしょう。いや、彼の事だからシステムチックに通知だけでいいってことか……。

それはいくらなんでもこれから一緒に仕事をやっていく仲間としてどうなの。

そのあとも今更だけれどキュウベえが他の人には見えるのかとか

を話していると、ちなみにキュウベえが見える見えないを選べるみたい。広場が見えてきた。もう結構な人がいるみたいだから急がなくちゃ。

「すみません、遅れましたか？」

「いやいや、まだ時間には間がある。ワシらがちと早く来すぎたよっじゃ。」

ほ、よかった。初日から遅刻は流石にまずいからね。周りを見回しても知らない人ばかりね、といっても原作の魔法教師なんて3、4人くらいしか出てないし知らなくもあるけれど……。

原作開始が確かネギ君が麻帆良に来たときだから7年後かな？そうなるって生徒で原作キャラはいないわね。原作時点で大学生でもないとここにはいないでしょうし。

と思っていると1人心当たりがある人物がいた。綺麗な金髪をした人形みたいなかわいい女の子、おそらくエヴァンジェリンだろう。彼女は吸血鬼だから年なんて関係ないしあの馬鹿が原因で確かここを出られないはずだったし……。彼女たしか修行に便利な道具を持っていたはず、仲良くなれないかしら。後でタカミチ君に紹介してもらおう。

っと、いけないいけないこれから彼のことは先生って呼ばないよね。今の私は向こうの世界出身の立派な魔法使いを目指していてこ



つちに来たって事になってるのだから。

「タカミチさんもこの度はとりなしてくれてありがとうございます。ごさいますた。」

「いえいえ、未来ある若者に道を示してあげる事が僕たちのやるべき事でもありますから。マミ君もここで働いてみて自分が目指す立派な魔法使い像を持ってください。＜やっぱりマミさんをこう呼ぶのは慣れませんか。＞」

＜あなたは女子生徒にも君付けでフランクに話してるんでしょ？それが私だけさん付けで丁寧だったりしたら変でしょ。＞

＜そうなのですが、マミさん達は今でも僕の憧れであり目指すべき目標なので先生って呼ばれるのも変な感じですよ。＞

そう思ってくれているのは嬉しいけれどここはしっかりやらないとね。

そんな事を念話で話していると人も集まってきた約束の時間になった。

「さて、これで集まれるものは全員集まったの。それでは本日より警備員として働いてくれる事になった者を紹介しよう。こっちへ来てくれ。」

呼ばれて学園長がいるところに向かい他の人達を見回した。

「紹介しよう、バ MMI 君じゃまだ若いが腕は確かじゃ。MMI 君、皆に挨拶を」

「バ MMI です。こちらの世界に来たのはつい先日ですがこちらの常識などは把握しています。まだまだ若輩ですがよろしくお願いします。」

挨拶を終え周りの人達を見てみるとやはりというか不安そうな顔がそれなりにあった。その感情は至極当然だ。普通の会社にしてみたらちよつと前まで外国にいた人が突然自分たちの職場にきたと同じなのだから習慣や常識とかが違ったりして一緒にやっていけるか不安になるだろう。

少しガヤガヤと話し合っていると

「皆もそしてMMI君もお互い相手のことを知らんからの不安になるのは当然じゃ。じゃが、そこはこれから互いに接して知っていつてもらわんといかん。MMI君のプロフィールなどは最近導入し始めた学園内の情報をまとめたライブラリーにすでに掲載してある。MMI君もそこに魔法先生などのことは載っておるからそれを見ておいてくれ。」

そういえば、まだこの年だとそこまで電子化は進んでないのかな？前世で記憶があるころは情報化社会だったからなあ。

「また警備の腕は今見せてもらおう。そうすれば皆の不安はとりあえずなくなるっ?」

学園長の言葉に不安そうにしていた人もそれならばとつなずいてる。

「相手はそうじゃのお。瀬流彦君がいいかの。」

「ええ！僕ですか！？」

選ばれた人も驚いてるわね。確かに見た目も雰囲気も荒事向けじゃなさそうですものね。

「そんな、無理ですよ！マミさんの腕がどれくらいなのか知りませんが僕じゃあ……。」

「なに本気でやり合うわけではない。手加減なども捕縛技術のうちなのじゃから。それに君の防御系の腕はなかなかと見ておるよ。ちよど良いだろう、君だって警備員として働くならそんな事を言うてる暇はなくなるぞ。」

「うつつ……、確かにそうですね。分かりました、マミさんよろしくお願いします。それとお手柔らかにね。」

「ええ、こちらこそよろしくお願いします。」

「それでは両者は下の通りに、またあくまでもマミ君の腕を皆に示すためじゃからな、勝敗に関わらず数分で終了とする。くれぐれもやりすぎんようにの。」

瀬流彦さんと下に降り向かい合い後は合図を待つだけだ。

「それでは両者……、始め！」

開始と同時に私はうってでた。

時はちよつと戻ってマミが到着した時間。

( sideエヴァ )

ほう、あれがタカミチが言っていた巴マミか。ふむ、見た目はガキだがあいつの話だと10年前もあの姿のようだからな。爺は長命種の血が入ってるというがどうだかな。実際は私と同じ化け物といったところか？<否定できないわね byマミ>

しかし、そうになると奴は紅き翼のメンバーつまりあいつと同クラスの腕を持っているはずだ、それが何故こちらの世界しかもこんな極東に？

爺が呼び寄せたのか？しかし何故…、世界樹や図書館島の防衛にしても過剰戦力過ぎる。牛刀で鶏を捌くどころかスリに騎士団を全て投入するようなものだ。

…駄目だな、情報が足りなさ過ぎる。爺に聞いてみるか？それかタカミチを介して接触してみるか。ただ待っているのは性に合わんしな。何よりそれでは求めるものなど得られんからな。

今は奴の腕を見てみるか、あいつが相手ではるくに分かんたろうが何もわかってない今よりはましだろう。

時は戻って対戦開始！

(side 瀬流彦)

うう、了承はしたけれど不安だなあ。向こうの人って結構荒っぽいかったりするからなあ。でも、学園長の言葉ももっともだ！いくらここが平和な日本とは言っても警備員なんて仕事をするんだから少しは荒事に慣れておかなきゃね。とりあえず時間まで耐えることを考えよう。

何をやってくるのかな、でもとりあえずは障壁を張って…。

パン！

何か撃ってきた！それたのかな？当たってないね。障壁も無事に張れたこれならそうそう破れないぞ。あ、早速来たようだね。とにかく時間待て耐え切って！

パン……

「え？」

え？そんな！障壁がこうも簡単に！って、そんな事考えてる場合じゃ。次の行動に移さないと！

わあ！何だこのリボン？は身体に絡み付いて。

「わ！わわ！」

慌てて拘束から逃れようとしていると目の前に手のひらが…。

「わぷ！」

「うー」

「うっ！」

何か後頭部に硬いものが当たった感覚と顔が温かいものに触れている感触を感じつつ僕の意識は闇に落ちた。

分かりにくいので視点を変更して！

(sideエヴァ)

さて、始まったかあっちのボウズは障壁か？消極的だな。

あいつは…。

パパン！

な、銃だと？いったいいつの間に…。さっきまで持っていなかったはず。奴のアーティファクトか？狙いはそれたようだが元より当てる気は無かったみたいだな。

発砲を囮にして接近したがどうする気だ？すでに相手は障壁を張っているそのまま行ったところで…。

パリン…。

「な。」

何だと…、障壁が破られるのは問題ない力の差というのもおこがましいほどの差があるのだ破られる自体は問題ない。

だが、気も魔力も使わずに破っただと？

……どういうことだ、いくら力の差があるといつても強化せずに破れるほど柔な障壁ではなかったぞ。

私とて単純な筋力であれを破れるか…。いくら吸血鬼だからといって限度がある。だというのに奴はまるで紙でも裂くかのようにあれを突破した。

む、考え込んでいるうちに終わってしまったようだな。

障壁があっさり破られてパニックしているところに、あの拘束魔法か？をかけられてそのまま叩きつけられたか。

あの魔法も見た事がないな、こちらは魔力を纏ってはいるが…。

ふふふ、これは今日にでも接触してみるか。

先ほど私を確認してもこれといったアクションを起こしてないところを見ると知らないか頭の固い魔法使いとは違うか。

ならば早速。

「おい、タカミチ。」

視点は主人公に

(side)



あちやゝ、やりすぎちゃったかしら？それに障壁を素手で砕いたのも大丈夫かな？

「マミ君、やり過ぎん様にと言ったじゃろうに。だれか彼に治癒魔法を。」

「すみません。拘束して押し倒すだけで済ますつもりが…。」

向きが悪かったわね。そのまま頭をたたきつけるようになった。つた。

「おほん！少しアクシデントがあつたが、これで彼女の腕は分かつたじゃろう。少々手加減が不慣れなようじゃからなそこは皆が教えてあげてくれ。それではこれで解散。」

「わざわざありがとうございます。」

学園長が解散を告げると皆は帰路に着いた。彼にも一言謝つておかないとね、どうやら気がついたみたいだし。

「すみません。少し力みすぎたようで。」

「ははは、今度は気をつけてくださいよ？でも、僕ももう少し修行しないとなあ。ここまであっさり負けちゃうとは思わなかったよ。」

「すみません、もう少し自重します…。」

「もう頭の痛みも引きましたし、大丈夫ですよ。それに、これからはよろしく願います。」

「はい、よろしく願います。」

そのあと周りの人と2、3話して帰路につこうとした時に。

「マミ君、このあと時間空いてるかな？」

タカミチ君が呼び止めてきたけれどどうしたのだろうか？

「はい、あいていますが何か？」

「家に送っていくがてら学園を案内しようと思ってね。＜紹介しておきたい人がいまして、マミさんもあって損はないと思いますよ。」

>

「ありがとうございます。それじゃあよろしく願いますね。＜紹介したい人？分かったはとりあえず会ってみましょう。」

「それじゃあ、行こうか。＜ありがとうございます。」

それからタカミチ君に案内されて着いた先は、学園の市街地より少し離れた森の中のログハウス風の家だった。

（なにか、覚えがあるような？）

着いた家になんとも見覚えがあるなと思っっていると。

「エヴァ、もう帰ってきているかい？」

ああ、エヴァンジェリン邸か。あつて欲しい人ってエヴァなのね。しばらくして中から声が聞こえて。

「開いている、入って来い。」

無用心だなあ、まだ茶々丸はないのかな？ファンシーな内装の家の中にはエヴァが1人でお茶を飲んでいた。

「こんばんは。」

「ふふ、よく来たな。色々聞きたい事はあるが単刀直入に言おう。貴様何者だ？」

「それはさっき…。」

「私が聞きたいのは表の履歴ではない。タカミチからある程度は聞いているが、さっきの試合を見てな。貴様、気も魔力も使わずに障壁を破っただろっ？」

やっぱりばれてる…。

「もう一度聞こう貴様は何者だ？」

ん〜、彼女に話しても問題はないか。言いふらす様な人じゃないだろっし。

「いいけれど、少し時間がかかってしまうわよ？」

「ふむ、そうだな。それに貴様の事だけ聞くのもフェアじゃないな。」

「それならエヴァあの中で話したらどうだい？あそこなら時間は問題ないだろう。それに聞いて欲しい事もあるからね。」

あそこ？なんだったかな、確か修行に便利なアイテムが確かそんな感じだったような。

「そうだな、最近まで貴様が使っていたからすぐに出せるだろう。その代りに手伝えよ。」

「分かってるよ、その代りに1つ聞いて欲しい事があるんだ。マミさんこつちです。」

話しながら奥に進んでいく二人を追って家の地下に入っていた。

その数分後、目的のアイテムが何だったのかを思い出した。

「すごいわねえ。」

「ふははは、そうだろうそうだろう。」

「時間が短いものはそれなりに有りますけどこれほどの物はそうそ

う製作できませんからね。」

これこれ、いいなあ。普通なら寿命とかで使いにくいだろうけれど、私だと大丈夫そうだからなあ。修行用に貸してくれないかしら？ちよつと交渉してみましようか。

「さあ、ここなら時間に関係なく話すことができるぞ。貴様もどうせまともな人間じゃないんだろう？老化などは関係ない。」

「いや、僕は関係あるよ。」

「いいけれど条件が一つあるわ。」

「ほう、なんだ？」

「ここを修行用に貸して欲しいの。」

さてどうかな。

「なんだ、まだ強くなるうというのか？それに貴様の情報と私の情報で等価だ。ここを貸す対価にならんよ。」

「いいえ、あなたの情報は要らないわ。」

「なに。」

「あなたの情報は調べればそれなりにでてくるわ。それにタカミチ君に聞いてもいいしね。」

「それはお前の情報もそうだろう。」

「いいえ、私の情報は連合傘下のここではまず手に入らないわ。タカミチ君も私のことをそこまで詳しくは知ってないものね。」

「確かに僕も知らないことはありますね。」

ここに来る前に連合内で出回っている書籍だと私のことがほとんど書いてないのは確認済み!………なんだろう悲しくなってきた。

「私はあなたとはお友達になればそれでいいわ。だからあなたの過去を急いで知る必要もないしね。」

「ふはははは、私のことを知っていてお友達か。だがその友達は相手の事を知らなくていいなんて言うのか?」

ぐ…、痛いところを。ちょっと言葉を間違えただけじゃない!

「ふふ、気に入った。だがそれでもまだ対価には足りんぞ?私もゆつくりと調べればいいのだからな。」

そうなるわよねえ。じゃあ。

「じゃあ、私の血はどう?大量にはあげられないし、眷属にするのも無しだけれどね。」

「ほづ。」

「ちょ!マミさん!」

ここは修行をするにはうってつけの場所。闇の帝王に勝つために

絶対に必要だ。そのためならこれくらいは全然問題ない！

「ふむ、その場限りの嘘というわけではないな。何か決意もしているか…。」

「どうだ？」

「いいだろう。その条件で飲んでやろう。ああ、お前の情報は追々話してもらおうことにしよう。楽しみは後にとっておこう。」

ふう、よかった。でも、心配があるとすれば彼女の牙が私の肌に刺さるのかと光子力が混じってそうな私の血を吸血鬼が飲んで大丈夫なのかって事よね。

「ママさん良かったのですか？エヴァはむやみに殺人などをしないとはいえ。」

「ええ、問題ないわ。それにここで修行する事は絶対に必要よ。」

「それはやっぱり。」

「今度全部話すわ。」

「はい。」

けれど話をしないってことはこの後どうしよう。

「おい、何ごそこそ喋っている。」

「いえ、なんでもないわ。それよりこの後どうするの？確か24時

問たたないと出られないのよね。」

「ふむ、そうだな貴様の体のことを聞いてもいいが…、おいタカミチ。」

「なんだい？」

「こいつと戦え。もちろん全力だぞ。」

ええ！何でそうなるの！！

「ちょっと。」

「貴様から直接聞いてもいいがもう一度自分の目で見てみたくてな。それにさっきの様なヘツポコでなく、こいつなら貴様も思う存分戦えるだろう。」

「はは、マミさんの全力は見せれないだろうけど、エヴァを楽しませるくらいはできるよ。」

「タカミチ君まで。」

「お願いします、僕がどれだけ強くなっただか見てください。」

ふう、そんな顔で言われたら断れないわね。物凄く男前っていうのかな？そんな顔なものね。前世では縁がなかったわねえ

「分かったわ、その勝負受けてたつわ。」

「ありがとうございます。それと一つお願いがあるのですが。」



「なに？」

「あなたを揺るがせたら。君付けじゃなくて呼び捨てで呼んでください。何時までもタカミチ君だと子供みたいで。」

「成長したところを見て欲しいと、分かったわ。そう感じたらそうするわ、判定はエヴァンジェリンさんにも頼むわね。」

「仕方ない。それと私の名はエヴァでかまわん。」

「ありがとうエヴァ。」

じゃあ、タカミチ君が死なないようにしながら全力でいきますか。

(sideタカミチ)

マミさんと全力の勝負か。たぶんマミさんは手加減するだろうな、だったら何としても本気の一撃を出させて見せる！今、僕が出せる全力をあの人に見てもらおう。憧れ続けていたあの人たちに少しでも近づぐために。

そうなると問題はマミさんのあの防御力か……。

ナギさんやラカンさんも十分理不尽だったけれど、彼女もそれに負けず劣らず理不尽の塊のような人だ。

高位魔法使いの初級どころか下手をすれば中級すら牽制にならないあの出鱈目な防御力。ラカンさんも出鱈目だったけれど彼が防御に入る攻撃でさえ弾いてしまっからなあ。

攻撃のほうは二人に比べて不得意って言ってたけれど、僕にとっては差なんてないだろうね。まともに当たれば死ぬだろう。

「それではいきますよ。」

「ええ、私はいつでもいいわよ。でも、鉄の城を揺るがせるのはそう簡単な事ではないわよ。」

「鉄の城？」

確か前は偉大な勇者って名乗ってたような？

「今はそう名乗っているの。」

10年の間に何かあったのかも。でも、こっちのほうがじっくり来る気がするな。少なくとも戦いを挑む側からしたら、彼女は勇者じゃなくて聳え立つ城。まさに鉄でできた城だね。

「じゃあ、いきます！」

最初から全力でいく！温存する必要も意味もない！

咸卦法！！

ただの居合い拳じゃ彼女には通じない。彼女と戦うには豪殺 居合い拳以上のものじゃないと！

「豪殺 居合い拳！」

ドドドドドドドドドド

まず牽制に速度を重視した物を連続で打ち込み目くらましと少しでも牽制になればと思いつつより多くの力をためてようとしたが。

「咸卦法できるようになったんだ。これはうかうかしてられないわね。」

攻撃でできた砂塵を突破して現れた彼女は無傷ですでに腕を振りかぶっていた。

「くー！」

力を練るのを中断し瞬動術で一気に離脱した直後。

ドゴオー！！

一瞬前までいた地点が粉碎された。まさに破城槌の一撃だ、手加減しているんだろうけど。一発当たればそれで終わりだな。

「瞬動もつまくなったわね。気や魔力が使えない身としてはちょっとづらやましいな。」

「その身体能力で使えたらさらに手に負えませんよ！」

「そうねだからこそ」

ボ！

うかうかしてられない。」

まずい後ろに。迎撃を。

「はぁ！」

「させない、ルストハリケーン！」

凄まじい強風が発生し無理に後ろを振り向こうとした僕は吹き飛ばされた。

「くー！」

虚空瞬動で体勢を立て直すと同時に距離を離れたけれど、この距離もどれだけ意味があるか。

瞬動が使えなくてもあの脚力と足裏から何か力を噴出しての移動方で瞬動並みに動けるんだから十分な気もしますよ。

「さあ、どんどんいくわよ。「ドン！」

「くー！」

その後も戦いは続いたが力の練があまい豪殺 居合い拳じゃ牽制にしかならない。逆に僕のほうはあの銃召喚でゴム弾を撃ち込まれて怯んだところを攻撃されて何度ヒヤツとしたか。何とかして最大威力のモノを叩き込まないと。

「強くなったわね。もっと修行すればまだまだ強くなると思っわ。じゃあ、終わりにするわよ。」ドン！

賭けになってしまっけれどこれしかないかな…。

パン！パパン！

牽制射をしつかりと避けて。

ドン！

2回目の加速をしたマミさんが目の前に周りには銃が待機していて、避けたところを吹き飛ばして一斉所かな…。繰り出される拳はここまで来るのに余った速度も加わるだろうから凄まじいモノだろう。

僕に耐えられるか分からない、耐えられたとしても攻撃に移れるか…。

でも、逃げてばかりじゃいられない！

「はあ！」

「最大防御！！！」

ドグウ！

「グウウ……！！」

く、防御に全力を出してもこの衝撃……。でも、何とか耐えた意識もすっかりある。マミさんは……、驚いている。これなら間に合うかな。

ありつたけの力を拳に練り上げ居合い拳を放った。本来の居合い拳の間合いじゃない。実際に居合い拳というより全力で殴ったって方があっていろいろだろう。

でも、そんなのは関係ない！これだけの速度で殴るんだこれが当たればいくらマミさんでも……。この至近距離じゃ避ける事もできない！

ドロン……！！

「ぐあー！」

「ぐー……！！」

予想はしていたけれどまるで鋼鉄の塊を殴ったみたいだ。でも、

マミさんもつめき声を動きも止まってるし、これなら！二発目も！

「今の一撃は効いたわ、ロケットパンチ！」

振りかぶった方とは逆の腕を腹に当てられて。予備動作もなく強烈な衝撃を感じてそのまま壁に僕は突っ込んだ。

霞む視界に彼女の元に戻っていく腕を見て、そういえばこんな技も持ってたなあと他人事のように思っていると彼女から。

「はあ、無茶すぎよ。下手したら腕使い物にならなくなってるかもしれないのよ？」

「はは、確かにそうですね。でも、これくらいしないとあなた達には。ぐ、意識もだんだん薄れて。」

「でも、本当に。本当に強くなったわね。タカミチ。」

薄れ行く意識の中でそんな言葉が聞こえてきて。僕は確認を取る前に意識を手放した。

(sideエヴァ)

確かに最強格だという事は分かったが。それ以上にこいつの身体はどうなっているんだ？防御力といい最後は腕が飛んだぞ？

「ふう、エヴァ。彼の治癒頼める？私は魔法が使えないから。」

「そつだな、魔法薬があるから大丈夫だろう。代金は奴からもらっておこう。」

殴った手もボロボロだな。全く無茶をする。

「最後はああ言ったけれどエヴァから見てタカミチはどうだった？」

「よくやったんじゃないか？奴に出せる全力だっただろうし、お前も最後の一撃で落ちると思っていたのだろう。」

「受けれるとも思ってなかったわよ。だから防御に回ったときはヒヤツとしたわ。」

「それは奴を見くびりすぎだな。だが、今の奴にあれが受け切れるかも五分五分だったろうからな。いいんじゃないか？」

「ふふ、ありがとう。それにしてもこここんなに破壊しちゃったけれど大丈夫なの？」

確かに派手にやってくれたな。

「問題ない。この建造物などは魔力で構成されているからな。放つて置けばじきに直る。もっとも逆に魔力が流出するなりして枯渇すると崩壊してしまうがな。」

下手糞な奴が作るとあつという間に崩壊してしまうからこの手の擬似異界製造の技術は難しいのだがな。



「そうなの、便利なものねえ。」

「さて、タカミチの治療をするか。その後にお前の血をもらうぞ。私に手間をかけるんだ多めに貰うぞ。」

「呑みすぎないでね。」

さてどんな味がするか。それに体のことも少し聞いてみるか。

ちなみに牙は問題なく刺さり、毒でもなかったようだ。

味はすごく旨いが不思議な味らしい。

## 顔見せと腕試しと模擬戦と（後書き）

戦闘描写難しいよう…。

まだ原作5年前なのでタカミチは原作時点よりちょっと弱目って事で。

エヴァの口調や性格もこれで大丈夫かな？ナギの生存も教えるか教えないか…。

ついでに主人公の原作知識は結構あやふやです。現時点でも忘れていたりことや勘違いしている事も多いです。今回はネギが飛び級して9歳で来るって事を忘れてます。なので7年後と。

小ネタコーナー

エヴァ（以下エ）「さあ、血を飲ませてもらおうぞー！」

マミ（以下マ）「あんまり呑まないでね？（牙刺さるのかしら？）」

エ「けちけちするな。では早速。」かぷ！

マ「ん。（刺さるんだ、でもなんだかむず痒い感じが。）」

エ「チューチュー、ぷは！ふむ。」

マ「どうだったの？」

エ「旨いんだが、なんとも言えん味だな。」

マ「まずいつて事？」

エ「いや旨い、がそうだな癖が強いといった感じか？そうだなまるで……」

「  
以下エヴァの味についての意見が続いた。

分かった事は私の血が御気に召したのとエヴァがかなりグルメって事だ。

次回予告「麻帆良の日々」

次回は短編の細かい話を何個かって感じにしてみたいと思います。  
2〜3年ほど時間を進めるので。

麻帆良の日々(前書き)

短編2個と中編1個です

## 麻帆良の日々

### 1. 今後の事

「なるほど、闇の帝王、それが創造主の本当の名前であり人格ですか。」

「ええ、今は彼ごと封印してあるみたいだけれど私が聞いた話が本当ならいずれ復活するわ。」

「それが遙かな未来であったとしてもですか…。」

「そこだけを聞くとこの事を後回しにしそうな連中が多そうじゃの。」

「いつになるか何た分からないものね。でも…。」

「先の大戦中に復活間近まで行った事とミケーネですか。」

「ええ、ミケーネはその全貌が全く不明だわ。今この瞬間も復活に向けて動いているかもしれない。」

「ガトウが逝ってしまった事が悔やまれますね。彼ならば完全なる世界のときのように尻尾をつかめたでしょうが。」

「ならばこそ協力者を増やしてあぶりだすわけか。よからうつ、この近衛門できる限りの協力をしよう。」

「私もここを動かしませんができる限りミケーネ帝国について調

べてみましょう。」

「ありがとうございます。」

ミケーネ帝国については話がまとまり話題は次のことに移った。

「後はネギ君。彼自身いや、その両親にも何の罪もないのにごうたに巻き込まれるか…。」

「前回の事件は暴走した一議員が起こしたらしいですが、実際はどうなのでしょうね。」

「この事についてはクルト君に任せるしかないわね。」

「そうじゃのう、問題の原因は向こうにある以上こちらでは手出しできん。」

「完全なる世界やミケーネ帝国が関わってるかも分からないですからね。我々ではどうにもなりませんね。」

「そうですね。そうなるとできる事は彼が向こうのごうたに巻き込まれないようにしながらこちらで修行をするしかないわけですか。」

事が元老議院内で起こっているためここを動けないアルや向こうでの基盤がない近衛門、そちらが得意とはいえないマミではどうしようもないようだ。

「ネギ君のことはこちらで受け入れ準備を進めよう。卒業間近になれば先方から彼の修行内容が届くじやろう。その時に改めて話し合

おう。」

「そうですね。事は私達だけじゃないですし。」

「では会談はこれで終わりですか。では、お茶会としますか。」

その後、彼らは話しに花を割かせた後、帰路についた。実はトンデモナイ誤算が待っている事に気がつかず。

「なにやら不吉な感じが。」

地の文を読むな！

## 2・マミの麻帆良での一日

無事にアルビレオと学園長に闇の帝王と今後の事を話し終えて麻帆良での仕事に専念しだしたマミ、その1日の様子を覗いてみよう。

彼女は別荘内での修行と警備員の仕事をする事が多いが今回はそれらが無い休日とでもいう日を見てみよう。

ちなみに彼女、警備員のほかに学園広域指導員もやってみないかと言われているが、どう見ても中学生か高校生にしか見えない事から無理がありすぎるといふことで断った。代わりに別の人物？を紹介

介してあるがそれは別の話で。

「今日は何をやるうかしら？」

ちなみに現在は1997年。原作開始5年前であるが今回重要なのはそこではない。今回重要なのは今が97年ということ。

97年それはブレ テ全盛期、ポケ ンブームが巻き起こった年でもある。何を言いたいかといえば主人公にとって非常に懐かしい時代だったりする。

この小説を読んでいる時代からするとPCは非常に低性能でもあり、インターネットもまだまだな時代だ。その事に多少不便感も持ったみたいだが、今は懐かしのゲームなどをやっていたりする。

「電 でGO！やた ごつちとか懐かしいわね。EV もこの年にブームだったのねえ。」

懐かしみながら色々見ていたがこれといった物が無く出かけることにしたようだ。

「それにしても本当に広いわね麻帆良学園都市は。とある世界の学園都市とどっちが大きいのだろうか？」

どっちなんでしょうね？

「流石に町並みの違いは分からないわね。ただでさえ麻帆良は日本



の都市とは全く違うのだから。」

麻帆良の町並みは京都やそれに類する日本古来の町並みや戦後発展を遂げる首都東京などの近代的な大都市とも違う、ヨーロッパの歴史ある町に近いため周りから見れば異彩を放っている。明治時代に建てられた物は麻帆良と似た欧州風の建物であったがその多くは先の大戦と日本に多い

震災や戦後の発展の中で失われている。

そのため麻帆良のように都市一つ丸々欧州風というのはここからいじゃないだろうか？

「ファッションなんてさらに分からないわね。でもそのうちコギャルとかが出てくるのかしら？」

美白どころか顔黒メイクの到来ですからね。ニーソなど遙か未来のファッションですね。

「ネットもとうぶんお預けだなあ。PC自体は高性能なのは用意できるところけどネット回線や他の人たちはまだまだですものね。」

などと嘆いているかと思うと突然止まり。

「さてよ。先を知っているわけだから先駆者として、今から始めてもいいかもね……。続くか分からないけれど。よし、それなら今度要塞内の工廠で作ってみようかな。」

などと言ってまた街の見物を再会した。

その後は店を見たりして夕方近くに帰るといづく普通の日であつた。

### 3・美しき指導員

マミが断つた学園広域指導員とは何か。それにはまずこの麻帆良学園の教育方針から話す必要がある。

この麻帆良は生徒ののびのびとした学習を設立以来、心がけていゝるそれによつて生徒は自由な発想と失敗を恐れない精神を養つてきた。また、都市の住人も非常におおらかな人が多くなつた。

が、その弊害としてあまりにものびのびとそしておおらか過ぎる所がある。格闘技を極めてみようとするのはいいがいき過ぎて街中の乱闘騒ぎを起こしたり、科学の発展のためといつて危険な実験や実験機の暴走を引き起こしたりなどの問題が発生している。

町の住民も多少の事は子供たちの未来の為と注意する事が少なかつたりするためよけいに自体が大きくなつたりしている。

当然、警察などから改善指示を受けたり理事会で教育方針の変更が議題に上がった事があるが、反対意見が多く現状維持や小規模の改善で終わっている。その理由として麻帆良学園を選ぶ親や生徒はその校風に惹かれて選んでいるのでありそれを否定する事が難しい事。他にも問題はあるが麻帆良内の大学は成果を確実に出しているためそれを惜しんでいるという事もある。

とはいえ、警察に負担をかけるわけにもいかず生徒にとつてもそのままが良いわけが無い事、どこぞの世紀末世界じゃないのだから野外乱闘が起きる街など外聞きが悪いという事もあって作られたのが学園広域指導員だ。

その職務内容はいたって単純で学園都市内で問題を起こしている生徒間の仲裁や場合によっては鎮圧である。資格はこれといって必要ではないがその肩書きを悪用されては困るので面接による人格判断はおこなわれている。腕っ節もあつたほうがいいがそこは学園にいる魔法先生の指導員が担当しているためあまり重要ではない。外部の人間もたまになる事があるが殆どが麻帆良で働くか働いていた教員のため、例え教員免許を持つていなくとも先生と呼ばれている。

さて、その広域指導員にマミが送り込んだ人物というのは。おや、ちよつどいいところに乱闘がおそらく彼女が現れるでしょう。

「どうした！そんなもんか！！」

「へっ！やつと体があつたまつてきた所だ。余裕こいてると一発で終わるぜ！」

「さあさあ、空手部とボクシング部の期待の新人同士の勝負どつちが勝つか！賭けるなら今のうちだよ、ちなみに倍率はこつちね。」

おそろくどちらが強いかで口論になって、なら実際にやってみよ

うと対戦が始まったのだろう。野次馬が集まりトトカルチエも組まれている。目にしたいかどうかはともかく麻帆良にすんでいればそれなりに目にする光景だ。

一進一退の攻防が続きさらに白熱してきたところで。

「お前たち今すぐ乱闘をやめろ。」

とびつきりの冷水が浴びせかけられた。

「もう一度言おう即刻解散しろ。対戦していた者と賭けを主催した者は生徒指導室まで付いて来い。最後通告だ。」

スーツを着用し美しい金髪をポニーテールにしたきつめの顔をした美人がそこにいた。

「げえー！ガ、ガミア先生！！」

「なに知っているのか雷電！」

「誰が雷電だ！それよりさっさと離れるぞ。こっちまで巻き込まれかねない！」

「離れたら教えろよ！」

その他にも彼女を知っているor知り合いが知っていた者は次々に現場を離れて遠巻きに事を見守るか3人の無事を祈りつつ離れて言った。

「なんだ！これは男と男の真剣勝負だ！」

「ああ！部外者それも女は先生だろうが引っ込んでいてくれ！」

「すいません！すいません！ごめんなさい！反省したので先に行っ  
ていてもいいですか？」

「戦闘を続行すると？」

「「当たり前だ！！」」

「ええ！スルー！完全にスルー！？」

対戦者2名は止めるつもりは無く、すぐさま無条件降伏を申し出た生徒はそのそれを聞いてもらえてない。他にも彼女の事を知らない野次馬も良い所で止められてブーイングをあげている。

「ああゝあ、あいつらがミア先生の事知らないんだ。あいつも災難  
だな。」

「それで雷電。あの先生は誰なんだ？」

「だから雷電言うな。彼女はミア先生だ。リボンの色は赤だから  
キューワンさんか。」

「どうやら彼は彼女の事を知っているようなので説明を任せよう。」

「リボンの色？」

「ああ、彼女は三つ子らしくてな全員が指導員をしているらしい。  
で、全員同じ顔だから見分けがつくようにリボンの色を分けてある

んだよ。」

「なるほど、でもなんで彼女がこんなに怖がられているんだ？」

「知らないからそんな事が言えるんだよ。彼女は他の指導員とはまるつきり次元が違う…。」

「そんなに強いのか？」

「強いんじゃない怖い、いや無為慈悲なんだよ。」

「はあ??他の指導員は生徒を見逃すけれど彼女は違うとか？」

「違う、確かに彼女は見逃したりしないがそんな事は他の指導員だってそうだ。彼女の恐ろしさは問題を起こした生徒だけじゃなく野次馬にも及ぶ事。鎮圧時に手加減せず問答無用で叩き潰すところが恐れられているんだ。」

「…そんなにすごいのか？」

「軽いもだと衣服を切り裂いて戦意損失したところを連行だが、それを避けるかそれでも止まらなないと拳で黙らせに入るんだよ。」

「両方とも想像がつかんぞ。」

「服のほうは詳しく知らん。髪が揺れたと思ったたら相手の服がバラバラなんだ。おかげで女子は彼女相手には強く出れないみたいだな。ちなみに下着は流石大丈夫だぞ。」

「そりゃそうだろう。」

「腕っ節はもつとすごいぞ。鎮圧された事を逆恨みした一団が数十人で1人を囲んだときも全員鎮圧してたしな。いつの間にか他の2人も入ってきていたけれどそれにしたって10分もかからずにだからなあ。」

「とんでもないな。」

「ああ、トンデモナイ。他にも野次馬ごと相手を粉碎したり、途中で降参しても叩きのめすまで止まらなかったりとか。」

「それはやりすぎじゃないか!？」

「流石に降参後もつてのは相手がよっぽどじゃないとだけど。野次馬が巻き込まれることはしょっちゅうあるぞ。拳が叩き込まれることはまず無いが服がバラバラになったりな。鎮圧時は周りのことなんて全くおかまい無しに暴れるからな。」

「だから逃げたんだな。」

「そうだよ。誰だつて下着で街中歩きたくねえだろ?つと、どうやら終わったみたいだな。」

2人が視線を向けた先には服こそ無事だが叩きのめされている対戦者2人と下着だけの賭けを主催した奴と野次馬が目に入った。

「うわあ〜。」

「だから、彼女は怖がられるんだよ。それでついた渾名がく美しき鎮圧者>だ。」

そう、ガミアの達がマミが指導員として送り込んだ人材だ。

彼女たちは無慈悲な指導員として今日も学園を見回っている。



## 麻帆良の日々（後書き）

今から15年前を懐かしむ主人公と恐怖のガミア先生でした。ついでにその他2人との会談。

どうでしょうか？原作開始までの5年はこんな感じで進めて生きていと思います。こっちの方がいいかと思ったのでして見ました。

ガミア先生はネギ君が来た後も出す予定です。

小ネタコーナー

マ「何かガミアちゃんが恐怖政治の尖兵のように…」

作「ようじゃないそのものだ！」

マ「もっと駄目じゃない！」

ガ「マミ様」

マ「あらQ2ちゃんどうしたの？」

ガ「付近を走り回っている暴走族の殲滅を完了しました。」

マ「そう…ありがとう…。」

作「またこうして秩序を乱すものは葬られ麻帆良の秩序は守られた

のであった。」

マ「綺麗にまとめない！」

ネギと主人公をどの段階で接触させるかなあ……。やっぱりエヴァ編が いいかな？

ついでにアンケート、やるとしてもずっと先だけどママとネギで仮契約するかしないか？（ネギが主）

仮契約するしたらアーティファクトのアイディアなど募集します！  
仮契約するとしても早くて魔法世界に行くようになります。

麻帆良の日々2 (前書き)

今回は中編2個かな？

## 麻帆良の日々2

### 1. 警備員の仕事

麻帆良学園都市、日本国埼玉県にあり多少過激なところがあるが他の諸都市のようにいたって平和なこの場所に何故、魔法使いのそれも高位の者が必要になるか。その原因は3つ、ある。

1つが認識障害で多少誤魔化しているが嫌が負うにも目に付くこの都市のシンボルといっても良い世界樹だ。あの手この手で騒ぎにならないようにしているがどうしても目立ってしまうこの樹、通称：バントウと呼ばれているがその来歴も何もかも分かっていない。

しかし、1つ分かっていている事はこの樹自身が強大な魔力発生源になっており。魔力量でどうにかなくなってしまふような事は凡そできてしまふといった問題があり、それをよからぬ事を考えるものに悪用されないようにする事とその強大な魔力に引かれた魔に属するもの所謂妖怪が都市内に進入しないようにする必要があり警備員が求められた。

2つ目に図書館島がある、がここはそこまで重要度は高くないかったりする。確かに貴重な物や魔道書があるが持ち出されないようにする機構がすでにあるため盗まれる危険が少ない。むしろ外部の侵入者よりとある事情により閉じることができない危険区へ学園の生徒が侵入することのほうが問題になっているくらいだ。何度も注意をしているのだが詳しい説明ができない事や教育方針ゆえに止められずにいる、がここは指導員の領分といえるので警備員が駆り出される事は少ない。

特に最近追加させた指導員が侵入したものを片っ端から捕獲している。なので負担は減っている。

そして3つ目、これこそが麻帆良がある意味で警備員を必要としている原因でもある。

それは麻帆良地下に広がる全てが謎に包まれている遺跡の存在だ。世界樹は日本の裏関係の資料に何回か登場していたりするがここは一切記録に無く、またその形式も日本のものとは全く違っている事。明治期にここに都市を作り始めた魔法使いが発見したものだ。が呪術協会にもそれぞれどこか本国メガロのどんな資料にも記載が無く。いまだにその全貌が不明なのである。また近年の世界中の聖地と呼ばれる地脈の集合地点で同種の遺跡が発見されておりさらに謎が深まっている。

あまりにも謎が多すぎる古代遺跡、またその内部から封印された鬼神兵や何らかの魔法装置などが見つかりなおさら放置するわけはいかなかった。もし内部に入り込まれてしまつたら追撃は困難を極め、有るかもしれない古代の危険な魔法兵器を手にしたら…。話し合いの結果、遺跡への侵入を阻止するために魔法使いによる警備員が組織された。また、遺跡はかなり広範囲にわたって存在しておりその結果、警備員の防衛線が麻帆良外縁部になっている。

さて、我らが主人公のママの配属場所は当然というべきか外縁部の見回りに配属されている。仕事は主に進入する妖怪の討伐でたまあゝゝゝに侵入を企てる魔法使いや呪術師の捕縛である。

(sideマミ)

「よろしくお願いします、瀬流彦さん。」

「はは、僕じゃあまり役に立たないかもしれないけれどよろしく頼むよ。」

今日は瀬流彦さんとペアを組んで見回りだ。え、新人同士で大丈夫かって？私たちの任務はあくまでも見回りで妖怪退治は後方で控えている神多羅木先生と葛葉先生が侵入された所に急行して殲滅という作戦のため、私たちの任務はあくまでも敵の発見……ということになってる。

「さあ、張り切って行きましょう！」

「いや、そんなに張り切らなくても……。」

そんなに不安そうにしないで大丈夫よ。妖怪といっても大妖怪クラスは進入できないしそもそも発生しないように呪術協会が結界を張っているんだから。

<そつだぞ、マミ君>

「神多羅木先生？」

<君がいくら強いとは言ってもまだ若い。それにここでのやり方はまだ多くは知っていないだろ？>

若いかはともかくとして、ここでのやり方を知らないのは事実ね。

<我々には我々のやり方がある。……とは言わないが君はまだ敵の傾向を知るところからするべきだろう。そんなに急がなくても問題は無い。>

むむ、確かにそれもそうね。日本に帰ってきて少し興奮してたかしら？

「すみません、少し落ち着きます。それでは見回りを続けますね。」

<ああ。瀬流彦君も頑張れよ。>

<神多羅木先生、D9地区に侵入者のようです。少々数が多いので応援が欲しいと。>

<分かった。2人とも少し離れるが無茶はしないようにな。>

「了解しました。」

「分かりました。」

<瀬流彦さん、マミさんがやり過ぎないように見えてね。隠蔽班から抗議が来るわよ。>

「了解しました!」

「うっ、ちょっと失敗しただけじゃないですか…。」

もう切れた通信に文句を言っていると。

「流石にアレはちょっとじゃないと思うよ？岩場だったから良かったけれど森だったらどうなっていたか。」

ぐ…、間違えてルストハリケーンを酸込みで出しちゃったからなあ。妖怪の群れごと周囲の岩がドロドロになっちゃってたからな。

その後も周囲を見回しながら歩いてみると、何かの気配を感じた。

「待って。何かいるわね。」

超感覚や探査魔法があるわけじゃないけれど伊達に大戦を経験してない。気配を感じるくらいはできるようになっている。

「探査するかい？」

「お願いします。」

瀬流彦先生が探査魔法に集中している間、周囲を警戒しているとどうやら発見したらしい。

「見つけた。でもこれは…。」

「どうしたんですか？」

「結構な数の妖怪がいるな。話からすると呼ばれてきた見たいじゃないけれど。この数はまずいな50体はいそうだなぞ。」

「まずいですね。神多羅木先生達も戻ってくるのはもう少しかかるといっていますし。ここは私が行きます。」



「え！」

「瀬流彦さんは突破した敵をお願いします。」

「確かに強そうなのは見当たらなかったけれど…。後で僕が叱られそうだな。」

「じゃあ、いきますか！」

結果は銃を滞空させて突っ込み暴れまわってすぐに片付いたが、また周囲に被害が出て怒られてしまった。

周囲に被害が出ないような戦い方を学んだほうがいいわね…。

そんなこんなでマミの警備員は続いていく。

## 2・図書館探検部

「やあ、我々は伝統ある部活、図書館探検部だ！私は現在、探索チームのリーダーを務めている渡辺吉雄だ。」

我々の部活は図書館島の謎を解き明かす事を目的としており直接図書館島に潜る探索班と持ち帰った情報を解析する解析班、他にも

それを多くの人に知ってもらうための広報班などがある。もつともそれぞれは厳格に分かれている訳ではないのでかたつくろしい雰囲気はないぞ！

さて我々は謎を解き明かすために日々努力し部室に飾ってあるマップも年々大きく詳細になってきている。今年度も世間の妨害を潜り抜けて手ごたえを感じてきていたところだった。

しかし、その歩みはここ最近鈍ってしまった。

その原因は分かっている。学園が新たな刺客を投入してきたのだ、そしてその刺客は今までとは桁が違った。

ことは夏休み前にさかのぼる。夏休みは毎年多くの部員が図書館に潜り大規模なチームが編成されたり長期間調査をするといったことが恒例のになっていた。

その年も同じく夏休みでなければ組まれない大規模チームを編成して図書館島の探索を開始した。

下層は危険な罠があったりするが参加する人員はそのための訓練を受けている。危険ではあるが気をつければ大丈夫だと皆思っていた。

だが今年は全てが違っていた。

第1回目の探索隊がわずか2日で全滅し図書館島前に死屍累々と

並んでいた。そしてそれを成した者が一言。

「図書館下層での活動は禁じられている。速やかに解散せよ。」

それが彼女と我々の開戦の合図となった。彼女、ガミア先生との…。

今年に入り指導員になった彼女達、元々図書館島での取り締まりは指導員の人達の管轄だが今までは我々を追撃できるものが少なかった事と大学やOBの方達のおかげで問題なく活動をしてきた。だが彼女たちにはそれが通用せず奥深くまで潜った部員の取り締まりやOBの方達からの援護が効かず大学生や一部の部員など許可を貰った者しか今では安全に潜れなくなってしまうている。

おかげで我々の活動は大幅に縮小することになってしまった。…表向きは。もちろん我々はこの程度でへこたれない！現在も囿や妨害班を結成し探索班の援護体制を構築し、探索班もより短時間で目標地点の到達と情報収集ができるよう訓練をおこなっている。

そして今現在、私は多くの犠牲の元に目的地に到着し情報を収集している最中だが。

<こちらガード・リーダー。上より連絡があつた、彼女たちが第3防衛線を突破こちらに向かっているそうだ。>

「こちらスカウト・リーダー了解した。作業を急ぐ。」

「く！どうやら欺瞞情報には引つかからなかったようですな。」

「ああ、ここまで早いとそうなるな。」

「くそ！まだ探索範囲が残ってるってのに。」

「口を動かす前に手を動かせ！護衛班が稼いだ時間を無駄にするな！」

作業をより早く、しかし丁寧になしているとなついに聞きたくない通信が入った。

<こちらガード・リーダー！スカウト・リーダー渡辺！>

「どうした！」

<彼女が来た！それも3人でだ！>

な！全員でかよ！速いわけど、クソツッ！

<こちらもうじき突破される！くぐわ！>田中あ！！また一人やられた！そっちもはやしろ、もうもたねえ！ぐああ！>

「岡田！！」

それつきり通信が途絶えた、あいつがやられてだけなら誰かが引き継いで通信してくるがそれが無いって事は全滅したか…。

その後も少しでも持ち帰るものを増やそうと作業をしていると。

「全員、作業を中止しろ。」

「ここは許可の無いものは活動禁止だ。」

「作業を停止しない又は抵抗するなら実力行使で連れて帰るぞ。」

ついに到着した3人の美女、「美しき鎮圧者」ガミア3姉妹。我々に彼女を倒すすべは無くその必要も無い。我々の使命は情報収集とそれを持つての帰還、ならばすることは一つだ。

「分かりました。地上まで帰ります。皆も作業を止める戻るぞ。」

「……はい……。」

降伏する事だ。彼女たちは禁止された場所での部活を取り締まりに来たのであつて情報を取り上げられる事はない。この情報を得るのにも犠牲を払ったが。今は得た資料を持ち帰り解析することが先決だ。

彼女との戦いはまだ始まったばかりだ。来年もさらにその後も続けていけば良い。歩みは遅くとも得るものはある、それに彼女たちへの対抗策もきつと見つかるだろう。

こうして第五次図書館島探索は終わりを告げた。しかし、彼女達と探検部の戦いはこれからも続くだろう。

## 麻帆良の日々2（後書き）

警備員と図書館探検部の話でした。

ん〜、話を作るって難しいですねえ^^・ネタが思いつかんw  
もうちょっとやろうかと思っただけけどネギ君情報を流して中学入り  
させるかな。動かせるキャラが足りない…。

あ、主人公は3A入りさせます。理由は次話で。

小ネタコーナー

学園長室でその主の近衛門がある書類を手に頭を抱えていた。側にはタカミチもいる。

近「マミ君から人員を借りたがこんな事態になるとは…。」

タ「彼女、ガミアQ達かなり活躍してるみたいですからね。」

近「活躍なんてもんじゃないぞい。アルビレオ君からまるで上で戦争が起こってるようだとか来たわい。」

タ「ははは…、でも生徒間の問題は少なくなっているんでしょう?」

近「だから頭を抱えてるんじゃないよ。君も恐れられているが彼女はもつとじゃ。問題が起こっても彼女が現れると収まってしまっくらいにの。」

タ「彼女、容赦ないですからね。前も学園外から来たチンピラや都市周辺で問題を起こしている暴走族を殲滅したみたいですからね。」

近「じゃから、マミ君に引き取ってもらえんのじゃよ。過激ではあるが問題は確実に減っているからの。彼女も問題を起こしていない生徒や住民には何もせんからの。」

有能ではあるが扱いが難しい部下ができてしまっただけで苦労をしているらしい。

もともと彼の苦労はこれからののだがな。戦え近衛門！君の胃の未来はどつちだ！！

近「不吉なことを言うんじゃない！」

次回はネギ君の報と3A結成かな？

ガミアやマミにやって欲しいネタなど募集中！

回る物語の歯車と吸血鬼の悩み（前書き）

短編2本です。

読みにくいとご指摘を受けたので少し変えてみました。

少しはよくなったかな？



## 回る物語の齒車と吸血鬼の悩み

### 1・大誤算

「近衛門さんから呼び出されてけれど何かしら？」

「そうだね、それも至急来てくれなんて。」

マミがいつもどおり警備員の準備をしていると突然、近衛門から至急来て欲しいと連絡が来た。緊急事態でも発生したのかと思いきいできたところだ。

「失礼します。近衛門さん何かあったのですか？」

中に入るとそこには近衛門だけではなくタカミチも難しい顔をしてなにやら話していた。

「おお、マミ君。実は少し問題が発生しての。まあ、立ち話もなんじゃしかけてくれ。」

「問題？」

「ネギ君のことでの。ああ、彼に何かあったわけではない。逆に成績優秀で良い子だそうだ、少し問題もあつたりもするがの。」

ネギの名前に腰を浮かせかけたマミにネギの現状をいい安心させた。

「それならいったい何が？」

「成績が優秀すぎるんじゃないよ。アルバートから連絡を受けての彼の学習状況じゃと本来7年のところを彼の場合5年ぐらいで全て収得してしまいうるよな。」

ちなみにアルバートはウェールズの魔法学校の校長の名前です。

「5年…。彼が入ったのは97年だから卒業は…。」

「2002年になるね。実際に彼に何度か会っているけれど、彼の向上心と吸収力はすごかったよ。本当に5年で卒業できてしまうだろう。」

「あやつもそう言っていたの…。本来なら嬉しい事なのじゃが、他にも問題があつての。やれやれあの予言がワシらには的中でもしたのかのお。」

ちなみに現在99年でノストラダムスの予言も何事も無く外れていたりする。

「しかし、来る事が早くなりはしましたが、まだ3年もあるのだからいったい何が？」

「彼が来る時期が問題何じゃないんじゃないよ。ウェールズで彼の修行するのに適した職を占ったのじゃよそうしたらのお…。」

「彼の場合、教師と出たみたいなんだよ。」

「ええ！何で教師なんかに！？だって彼の歳は…。(そういえばネギまって子供先生が主役だったわね…。まさか現実とは違っただろうと

思っただけれど、こつちが現実になるなんて。」

例え7年でも11歳ですからね。無理がありすぎる。

「向こうも間違いかと思っただけでもしてみたらいいがの、全て同じじゃったそうだ。だからこそ今頭を抱えてるんじゃないよ。」

「教師をやるにしてもどの年齢にするかとかでね。たぶん担当は中学生になるだろうけど、学年もどうするか…。」

「準備も合わせると彼が担当するのは中学の3年になるじゃろうな。初等部は難しいじゃろうし高校は彼には無理じゃろうし、反対意見が多すぎるじゃろう。」

「他の職は無理なのですか？たとえば占い師とか。」

「そうしたいのじゃが、あの占いはかなりしつかりした物での。あの占いどりにやれば人生の指標を見つけ、占いに出た以外の事をするとたいがいよくない結果になったりするのじゃ。」

「効力がある期間が子供の頃だけだったりで、使っているそうなんだけれど今回の事はあまりにも異例らしいよ。普通はさっきママさんが言ったような占い師だったり、住み込みでのお手伝いだったりするみたいだけ。」

「それはそうでしょう。子供に教師なんて普通務まらないもの。でも、彼を預かるって約束もしてるとなるとどうでしょう？」

「そこなんじゃよ。案として魔法関係者や準関係者といってもいい者を集めたクラスを作り副担任にタカミチ君をすえようかと思う。」

「それで大丈夫なんでしょうか？」

「問題が多いことは承知の上さ……。ネギ君のためのクラスを作るよ  
うなものなんだ、他の先生方に申し訳ないよ。」

「ただ、そこまでやったとしても実際に大丈夫かは分らん。それ  
にタカミチ君も出張が多かったりするからの。そこで君にもそのク  
ラスに入って大丈夫か様子を見てくれ。」

「子供たちがネギ君を受け入れられるかどうか、ネギ君が来てから  
のサポートをお願いしたい。お願いします！」

マミは少し考えた後。

「ネギ君は担任じゃないといけないのでしょうか？」

「ぬ、そうじゃの。占いには教師としかでとらんかったようじゃ。  
おそらく担任でなくても問題は無いじゃろう。」

「それなら彼を副担任か補佐役にしてみてもどうでしょう？それな  
らば彼の修行にもなり生徒にも負担はかからないと思います。」

「ふむ、それは可能かもしれないが、あいにく人材がおらぬぞ？他の  
魔法先生方はすでに担当クラスを持っておるし、一般の先生方だと  
ネギ君を助けることは厳しいぞ。」

「魔法のことが出てくると一般の先生方はいろいろまずいからね。」

「いえ、教員ではないですがその知識はあると思います。出てきて

あしゅら。」

私は心当たりがある人材。あしゅらを召喚した。

「お久しぶりですマミ様。」

「久しぶりねあしゅら。やって欲しいことがあるの、あなた教師つてできる?」

「教師ですか。やったことはありませんが。」「我らとて馬鹿でも益暗でもありません。」「しばしの間をいただく必要がありますが必ずや使命を果たせるだけの力を身につけましょうぞ。」「

うーん、なんともいえないわね。性格は真面目だから問題は無いと思うけれど。とりあえず彼らにも話を、ってぼかんとしちゃうてるわね。

「マ、マミ君。ひょっとして人材とは……。」

「はい、彼のことです。性格は真面目なので問題は無いと思いますが、しばらく教員の訓練を受けさせてもらえないでしょうか?それから適正のほうを判断……。」

「まっってください!確かに学園長も人間離れた後頭部を持っていますが彼ほどじゃないです。何より普段はあまり見かけないので生徒の精神衛生上も問題ないですが、彼が教師となれば流石に誤魔化しきれません!」

「確かにわしも誤魔化しきれぬと聞いたかったのじゃが。君も……そんなことおもったのか……。」

なにやらタカミチが必死に反対して近衛門さんがすごく落ち込んでいる……。何か問題が……。……って、そうか！

「すみません説明不足でした！あしゅらあの変装セットって持っている？」

「あのマスクでしょうか？それならばここに。」

これこれ、この「弓弦之助変装マスク」よ。これをかぶればあしゅらも顔だけじゃなく声も弓教授に早変わりになるって優れものよ。

「それをかぶって、できればスーツもあるといいのだけれど。」

「了解しました。スーツもありますので今着替えます。」

というところ止めるまもなくいきなり着替えだした。スーツどこに持っていたんだろう？ちなみに2人は物凄く不思議そうなそれでいてどこに目をやればいいのかと戸惑っていた。最終的には目を逸らすことにしたけれど気になるわよね。彼の下半身がどうなってるのかって。

マスクをかぶりスーツも着用して、最後に普通の肌の色の手袋をして振り返った彼は先ほどのあしゅらの顔ではなく、まさに弓教授の姿になっていた。いや本人見たこと無いけれどね。

「どうでしょうこれなら問題ないと思います。あしゅら、いえ今は弓先生ね。弓先生何か言ってみてください。」

「マミ様、私に敬語な必要ありません。弓と及びください。」

うん、声も完璧ね。こつちには本人がいないから性格とかも問題ないしね。

「先生を呼び捨てにはできないわよ。その姿のときは私に対する敬語とかは無しでお願いね。あくまでも弓弦之助として行動してね。」

「わかった、マミ君。これで大丈夫かな？」

「ほお、これはすごい。確かに先ほどの面影は全く無いの。」

「はい、これなら教師として活動しても問題ないでしょう。彼なら魔法についても問題ないのでネギ君のサポートも任せられますね。」

「そうじゃの、実際に彼が教師として問題ないか見る必要があるが、ネギ君が来るまで彼を副担任にし、ネギ君が来たら彼を担任にネギ君を副担任にすれば問題は無いの。お主はそれでよいかの？ええと…。」

「この姿のときは弓弦之助と及びください。マミ様の命とあらば必ずややり遂げて見せましようぞ。」

「私もサポートの件お受けします。」

「すまぬの、詳しいことは入学式が近づいたときにおこなう。彼には後日またこちらに来てもらおう。そこで担当教科や簡単な試験をしてもらおうぞ。」

ここに子供先生の誕生が決定し、後の3Aの結成もほぼ決まった。物語の歯車は刻一刻と回る。

「まったく、そんな些細なことで呼んだのかい？能力が有るならやらせればいいじゃないか、年齢なんて小さなことだ。それに彼は英雄の子で今の話からするととても優秀なんだろう？ならただの一般人よりも彼が大成する事を優先すればいいじゃないか。そのほうが世界にとつてもとても有意義だ。わざわざ回りくどい事をする必要なんてあるのかい？それにそんな子を育てたなら君達のこうせく、パ\nン！「きゃぷ！……」。

「……すみません。」

「いや……、気にしとらんよ。」

最後になにやら気まずい空気が流れて話し合いは終わった。

## 2・修行風景とエヴァのママ調査記録

ここはエヴァの別荘。ここでママは何日か置きに別荘内で数日、現実時間で数時間の修行をしている。

「違う！そこはそうじゃない！！全くよくそれで今まで戦えていた



「ものだな！」

「はいー！」

修行内容は主にエヴァが修めている格闘技の習得だ。元々身体能力は桁外れに高い事と戦闘経験も大戦時に嫌というほど積んだため問題ないが、格闘技などの技術は最初にラカンに教えてもらった基本的な事の他には剣闘士時代に受けた訓練ぐらいしかなかったりする。剣闘士時代の途中

から格闘技ではなく体の能力を重視して戦ったため、格闘技のレベルは紅き翼内では実はダントツで低かったりする。実際に格闘技に限定しての手合わせだと黒星が多かった。ただ、それを補って余りある身体能力と特殊技術が有ることとそっち方面はずっと鍛えていたので最強クラスの實力を保持していたのだ。

しかし、この後もそれで大丈夫とは限らないこともあってエヴァから格闘技の指南と今までどおり能力の修行をしているわけだ。戦闘訓練は今更なのですることはまず無いが…。

「今日はここまでだ！」

「ありがとうございます！」

「ケケケ、コノ後少シ戦ワネエカ？」

一名（一体？）戦闘狂がいるので毎日誘われているが。

「一昨日やったばかりでしょ？」

「サア、知ラネエナ。才前ノ血ノ才カゲデ最近ゴ主人ノ魔力ガ少シ

八戻ツテキテ、よちよち歩ククライハデキルヨウニナツタガ。暇ナ  
コトハ変ワツテネエ نداヨ。」

だいたい毎日こんなやり取りが繰り返されている。

「チツ、きゆうベエノ奴モ才前モ酒スラ飲メネエシナ。」

「キユウベエは飲めるんじゃないかな？」

「アレハタダ飲ンデイルダケダ。マツタク楽シクネエゼ。」

などと従者と弟子が話しいるがその主人のほうはというと。

(sideエヴァ)

「ここ2年奴のことを調べてはいるが本当に何も無いな。身体につ  
いては別荘内も入れると3、4年だがよけいに謎が増えるばかりだ。」

奴も私も時間はあるのだから直接話を聞くことはもつと後、と思  
つてまずは自分で調べては見たが。本当に何も無いな……。紅き翼な  
のだからあのような事を言ったところですぐに見つかるだろうと高  
をくくつたが。奴の話しどつり連合内ですぐに入る紅き翼関連の書籍  
だと奴はせいぜい追加

メンバーか協力者その1程度のことしか書いていなかった。奴に関  
しては戦争に参加した兵士の回想録のほうに敵として詳しく語られ

ているくらいだ。もっともそれとて奴自身よりもアーティファクトから呼び出される怪物たちのことが主に書かれているのだがな。

この事を奴に聞いてみたところ大戦時は機械獣の士気を主にしていたせいで、紅き翼のように自分の傭兵団をもいいてたわけじゃないから敵方の知名度が低いのだろうと聞いていたな。紅き翼に合流後も連合での知名度はナギ達のほうが遥かに高かったせいで資料の関係でこうなんだろうと。話していくうちに落ち込んでいたが。

あとは帝国だがまだまだ向こうの品は手に入りにくいからな。奴の経歴はとうぶんお預けだな。

「まあ、奴の経歴なんぞあまり興味は無いが。問題は身体か…、こちらは大きい探究心を刺激されるがわけがわからんな。」

身体についてみては聞いてはみたが誤魔化しているが奴もあまり把握していなかったな。

把握しているだけでも、腕が分離飛行でき口から強酸を含む強風を発生させ、髪先端からは極低温の光線を発射できる。他にも目から尋常じゃない光線を発射でき胸のリボンを変形させ高熱を放てる。他にもあるが極めつけは首が分離でき身体も首無しだが増やせるか…。本当に人間かあいつは？デュラハンといっても納得できるぞ。私と同じ化け物かと思ったがそれ以上じゃないか？

魔力は体内で反応させているようで特定の形でしか利用はできず、気に関してはからつきしか。まさか、あの力と防御力が純粹に肉体の力とわな。そもそも気が発現しないとはどういうことだ？あれは生命エネルギーといってもいい、素人でも修行をすれば出るようなものだ。それが出ないだと？

それに魔法にしてもそうだ、あの銃を召喚する物はアーティファクトと思っていたがあれが魔法だと？使える魔法は後はリボンの操作といったが、普通の魔法よりこっちの方がよほど難関だぞ。

アーティファクトも謎が多いな。何故魔法の産物のはずのアーティファクトから機械の化け物が出てくるかも不思議だが、カードがある以上やつのマスターも書いてあるはずだがそこがなぜだか読めないしな。

「ふう、これは本格的に研究しないと埒が明かないな。魔力が封じられている事をここまで腹立たしく思ったことは久しくなかったな。私が万全なら直々に色々試せるのだがな…。タカミチを引っ張ってきて奴に実験させるか、それとも……。」

なにやらタカミチ君に不吉な未来が迫っている気もするが頑張れエヴァンジェリン！謎が解き明かされるその日まで！

## 回る物語の齒車と吸血鬼の悩み（後書き）

あしゅら男爵 改め 弓弦之助を投入する事にしました！ネギ君を担任で〜ってのはやっぱりと思っただけだったので加筆して彼を担任として投入を決定！彼がメインで授業をしつつも時折ネギ君も……と予定しております。

彼の教師抜擢もきつい気がするけれど子供先生よりはまじって事で…。これから彼はネギ君が来るまで教師として頑張っていくます。

マミはネギ君のサポートと来るまでにクラスがネギ君を編入しても大丈夫が見極めるために入ります。

アーティファクト内の人材も豊富だけれど、麻帆良内にどんどん妙な先生が増えているw

修行は戦闘経験は先の大戦で積んでいるし肉体作りも必要ないので全くやってなかった基礎的な技術の習得を重視しています。

そしてマミの身体の不思議に悩むエヴァw。

小ネタコーナー

今日も街を見回るガミアQ達

ガ「何か視線を感じるな？」

何か視線を感じるらしいが気にせず進むその背後では。

研究生1「やっぱりガミアさんって…。」

研2「だが確証がないぞ。」

研3「そもそもそうだったとしてどうやって協力してもらうんだ？  
彼女の噂は知っているだろう。」

研1「だがもし彼女がロボットであるなら協力してもらえれば我々の研究は今よりもっと…。」

研2「だが…。」

研3「落ち着け気付かれるぞ。」

ガミアの正体に気付きつつある人達もいるようだ。

茶々丸完成まで後2年。

次回は入学までいけたらいいなあ。

次の舞台へ（前書き）

中編3短編2です。  
物語は次の段階へ！

## 次の舞台へ

### 1・タカミチの悩み

彼、タカミチ・T・高畑は悩んでいた。彼が保護責任者になっている少女、神楽坂明日菜について。

元々彼女の将来などで悩みは尽きなかったが最近は特に悩む回数が増えている。ネギ・スプリングフィールドが住んでいた村に起こった悲劇と彼がこの麻帆良に予想よりも早く来る事がわかったためである。

彼女はその特殊な生い立ちと能力によって永い時を幽閉され一般的な人生を歩めなかった。前大戦終結後に紅き翼が彼女を連れ出したためその運命も終わり紅き翼のメンバーたちとの新しい運命が始まるかと思われた。

しかし、6年前にナギがいなくなりアルビレオも動けなくなったときに、彼の師でありそのときの彼女の保護者であったガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグが所属不明の一団の攻撃により命を落とし、た事で彼女の運命はまたも急転する事になった。マミが帰還する少し前であった。

襲ってきた集団が何処の者かは分からなかったが、彼女の事が知られたという事実は何も変わらない。彼女がアスナ・ウエスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアであり続ける限り安穩たる日常は来ない。襲撃され瀕死の状態のガトウはそう考えたのだろう。

彼がとった手段は彼女を殺す事、彼女が黄昏の姫御子という記憶



を全て消し去り記憶が無い子供にする事、魔法から遠ざける事によつてただの人にしようとした。

ガトウからアスナ 師の名前を貰い名を変えた「神楽坂明日菜」を託された彼は魔法世界を去り、詠春を頼りに日本に渡りそこで現在の麻帆良学園を紹介された。かけられていた成長阻害の魔法も効力を失ってきており記憶消去後の状態も落ち着いてきていた事から、彼は彼女をただの子供として麻帆良学園に入学させた。

その後、感情に乏しかった彼女も同年代の子供たちと触れ合ううちに年相応の明るさを取り戻し成長阻害の効力も完全に消えすくすくと成長していた。このまま何事も無く日本人としての人生を歩めると思っていたが、事態はまたもや変わってしまった。

ウェールズのネギが預けられている村が襲撃された事、マミによつてもたらされた闇の帝王とミケーネ帝国の情報。完全なる世界は最早かつての勢いをなくしているが彼らを狙う勢力は依然多い。

ガトウが命を落とすきっかけになったときも、そしてネギの村もどちらもその情報はほとんど知られていなかった。それなのに襲撃者はその情報を調べ襲い掛かってきた。例えば記憶を消してもその身に宿している力は何も変わってはいない。もし、彼女の情報が洩れてしまったら。

その時に彼女に降りかかる惨劇が脳裏を掠める。本当にこのままでいいのか、魔法について話しかつてのような防衛体制を敷いたほうがいいのか…。マミが帰還した折にその事について相談したて高校になるまでに決着をつける。ちょうどネギも来るのだから2人を守るためにもちょうどいいかもしれない。

しかしそれはネギが優秀すぎるといふ本来なら喜ぶべき事によって変更を余儀なくされた。彼がこちらに来るのは早くて2002年遅くとも03年には来るだろう。彼は中学生まではただ子供のままでいて、高校になったら今後の事を考えればいいと思いきいそのつもりでいた。

本来の予定で彼が来たのならは高校に上がり次第魔法のことを少しずつ話していき高校3年に進路をどうするか話し合う予定であった。彼が来る時が高校1年か2年になるはずであったのでちょうどよかったのだ。ネギと関わらせるかどうかも含めて準備期間が十分に取れるはずであった。

しかし、予定は変わり彼は中学の2年か3年に来る事になる。確かに中学生から今後の進路を決めていくべきではある。だが、もし魔法に関わる事になれば子供らしく遊ぶことは彼女の生い立ちを考えると難しいだろう。だからこそ高校3年のときに今後の進路を決めるようにしていたのだ。

一人ではどうにもならないと思いき、彼はママの元に相談に来ていた。

「確かに彼女の場合、魔法に関わるかどうかは修正が効かないくらい大きな人生の分かれ道になるわね。」

「はい、高校3年以降。大学に行くか就職するかは分かりませんが、ここで僕も含め魔法と完全につながりを絶てば日本にいるのならはおそらく襲われる心配は少なくなるでしょう。」

「そうね、アジアは魔法使いの勢力は欧州と比べてだいぶ小さいものね。ネギ君と明日菜ちゃんを別にする事は難しいの?」

「それも考えましたがネギ君はナギさんのことを追っています。ここでの修行を終えればおそらく魔法世界に渡りいろいろ調べて回るでしょう。」

「そうですね。ウェールズに居たときもナギに憧れていたものね。」

「そうならば完全な世界の残党や彼を疎ましく思う者が危害を加えてくるでしょう。そのときは彼を守らなければいけない。しかし、同じ時期に彼女の今後についても話しあわなければいけない。」

「つまり手が足りないって分けね。確かにネギ君を狙う勢力のことを考えると生半可な護衛じゃ意味はないし、彼女の素性は極秘中の極秘。他人に任せておけるものじゃないわね。」

「はい、他の魔法先生やアチラの人達を信用してないわけではないのですが、万全にしようと思うとどうしても…。」

「私が付いていてあげられたらいいけれど、ミケーネの事もあるから確約ができないからね。」

「はい、なので彼らを別個で扱うのは現状では厳しいですね。」

「だからといって中学に入ってすぐに人生の大きな分かれ道を突きつけることは酷ね……。」「

「はい……。」

「……明日菜ちゃんがどっちを選ぶかは置いておいて。タカミチはどうしたらいいと思っているの？」

「僕は……、彼女は魔法に関わってしまうと思っています。」

「やっぱり黄昏の姫御子ゆえに？」

「はい、完全なる世界やミケーネ帝国との戦いはいつ終わるかは分かりません。例え早期に終わったとしても今後も彼女を狙わない勢力が出ないとは限りません。」

「魔法世界で覇を唱えるなら彼女の力はとても重要ですよ。」

「はい、それにさっきは日本なら襲われる心配は少ないと言いましたが、最近では分からなくなってきました。」

「どうして？」

「昔は大丈夫とと思っていました。けれど最近はどうも情報の伝達速度が上がってきていますよね。」

「そうね。インターネットが一般家庭に来るなんて20年前は考えられなかったものね。」

「4年前もそうですよ。けれど最近はどうも凄くなってきたんじゃないですか。これが今後続けばもっと伝達速度が上がってきて世界中の情報が誰でもすぐに見れる事になるかもしれませぬ。」

「…。(後数年で情報化社会の到来ですものね…。)」

「考えすぎとは思いますが、そうなったら彼女の力が何かのきっかけで一般の目に触れてしまったら…。恐らくあつという間に広がってしまうでしょう、それが騒ぎになるかは別として。そうなれば彼女を狙う勢力の目に付く間も知れない。それがあと80年以上もないといえる自信はないですね。」

「それに彼女が海外に出るかもしれないしね。」

「はい、そうなれば魔法使いと接触するかもしれない。だからといって彼女の行動を制限するわけにもいきません。」

「なるほどね。だから関わってもらってしっかりと守れるようにしたいのね。」

「はい。」

「ふう、ほんとうに難しい問題ね。(未来を知ってる身からすると彼の懸念は的中ね。いえ、それ以上にたちが悪いわね。)」

2011年、今はまさに情報があふれ、日本人も海外に出ることが多くなっている。情報化、グローバル社会だ。この世界が現実と違うとはいえ概ね同じ歴史をたどっている、おそらくその流れは変わらないだろう。そして今後も世界はより狭くなっていく可能性が高い。

彼女の事がネットの情報に出る可能性は十分にあり、彼女も海外に行く可能性はある。そうなれば彼の不安は現実のものとなるだろう。

「彼女は魔法を知り自分で身を守ったほうがいい。でも、今はまだ子供でいさせてあげたいか……。彼女の話を聞かないとなんともいえないけれど、彼が来るまで待つてあげたら？早くはあるけれど中学3年のときにね。」

「はい、そうですね。彼もいろいろと問題を抱えていますからね。」

「ごめんさいね。あんまりいいアドバイスをしてあげなくて。」

「いいえ、話を聞いてもらえただけでもよかったです。一人だとううしても思い悩んでしまつて。」

「ネギ君が早く来る事は詠春も慌ててたからね。このかちゃんも彼女ほど深刻じゃないからいいみただけけれど。」

「確か、魔法とはあまり関わつて欲しくなかつたのでは？」

「明日菜ちゃんほど大きな分かれ道つてわけでもないからね。知つたとしても呪術協会に関わらないようにすればいいだけみたいだからね。もっとも、今後の状況で変わるかもしれないけれどね。」

「あの人も大変ですね。」

明日菜のことはとりあえずではあるが決着が付き、彼が来る時まで待つこととなった。これが良いか悪いかはまだ分からない。

## 2・弓先生の教師生活。

彼、あしゆら男爵こと弓弦之助は今、新田先生の下で教育実習生扱いで経験を積んでいる。

生徒から「鬼の新田」と呼ばれるほど厳しい教員であるが、経験も豊富で彼の指導役に適任という事で厳しくはあるがそのおかげで彼は教師として問題がない段階に来ている。

「新田さん、今日もありがとうございます。」

「いえいえ、私はあくまでも現在の教育現場を教えて差し上げていただけですから。逆に弓さんの知識に私のほうが驚かされるくらいですよ。」

「今まで、山の中に居たものですから。暇なときは本を読んだり子供たちに聞かせる話のネタを集めてばかりでしたからね。教師をしていたといつても私塾の先生のようなものですから、書類もあまりなかったですからね。」

ちなみに彼の設定は田舎で教師をしていたが過疎によって子供がいなくなったので、旧知を頼りにこちらに越してきたという事になっている。これなら多少変でも誤魔化す事ができ短期間で教師にする事ができるという事でこうなった。

「来年から副担任として配属されるそうですね?」

「はい、高畑先生が担当するクラスになるようです。」

「そうですか。彼が担当するクラスは毎回騒がしいものが多いですからね。良い経験になるでしょう。」

広域指導員という事で毎回、小学生のときに騒がしかった者が多く割り振られているらしい。

「今から楽しみです。彼にもお世話になってますからしっかりとサポートします。」

「あなたなら大丈夫ですよ。すぐに担任もなる事ができますよ。」

あしゆらの性格が真面目である事と弓弦之助の落ち着いた雰囲気、深い知識や問題児にも毅然と立ち向かう様子が少しの期間で多くの信頼を勝ち取ってきている。

「ただ、話しているとたまに左右を向く癖は直したほうがいいですよ。少し奇妙に見えてしまいますから。」

「すみません、今までは生徒たちの間を行ったり来たりしてしましたからね。」

ただ、あしゆら男爵としての癖はまだあるようだ。



ここは麻帆良内にある龍宮神社、後にマナ・アルカナこと龍宮マナの実家となる神社だ。

そして今は年末大晦日。日本中の神社が大勢の人であふれるように、ここもまた数多くの人が訪れ過ぎ行く今年と訪れる新年を迎えるのだが、今年はさらにもう一つイベントがあった。

今年は2000年そして来年は2001年。そう21世紀の到来である。そのため今年には麻帆良中がお祭り騒ぎになっており新年を今か今かとまっている。

さて、そんな中すでに1回21世紀の到来を経験しているマミはという。

「すごい人ですね。」

「新年だからね。それも新世紀となればここの連中なら騒がないほうがおかしいよ。」

毎年のことながら人の多さに驚きの声を上げている彼女の服装は白衣に緋袴、白足袋と巫女装束を身に纏っている。早い話が巫女のバイト中なわけである。

「前はこれに便乗していろいろ問題が発生していたんだけど、ガミア先生たちが巫女の仕事を手伝ってくれたおかげで被害がぐっと減ったみたいよ。」

「彼女たちに手を出したのが運のつきね。（それって囿捜査の気が

…。）」

と話しているも、新年までもう少しに、

「5

「4

「3

「2

「1

「0！ハッピー・ニュー・イヤー！あけましておめでとう！  
！21世紀だー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！

カウントダウン終了と同時の大歓声、そのまま年始の祭りだとは  
かりにさらにヒートアップして神社だけでなく麻帆良全体が大騒ぎ  
になっていった。

「新世紀開幕ってこともあるんでしょうけどすごい規模ね…。花火  
に飛行機について下手なテーマパークよりすごいんじゃないかしら？」

各サークルや部活もさまざまな形で新年と新しい世紀の到来を祝  
っていて学園祭と同じくらいにぎやかになっていた。

「休憩を貰ったから少しみてみようかしら。ここで参加しなかったら物凄くもつたないものね。」

時計を確認し交代まで十分時間があることを確認し、マミは喧騒の中に入っていった。

路上パフォーマンスや出店を見ていると

「ねえ、君。その巫女服着た子。」

後ろから声をかけられて振り向いてみると、3人のそれなりに顔がいいと思われる男たちがいた。

「よかつたら僕らと新年をお祝いしない？」

「私とですか？」

「そうそう、食いもんとかは奢るからさ。」

「ああ、損はさせないぜ。」

（ナンパか。マミさんになってからよく声をかけられるけど、それを嬉しく思うほど精神は女になってないからなあ。）

主人公、こつちの世界に来てそれなりに経っているがいまだに精神は元々の状態に近かったりする。流石に男のままってわけではないが、今まで剣闘士や傭兵など貞操の危機つてくらいでしか女である事を感じたことがなく。しかもそれさえ難なく跳ね除けてきたので自覚がまだまだ薄い。だから、綺麗と言われて喜びはするが、愛してるや今回のようなナンパはソッチの趣味はないと嫌がっている。

だんだん百合方面に行っている気がしないでもない主人公だったりする。

なので返答は当然。

「いえ、せつかくですがまだバイトの途中ですから。」

「いいじゃないか。多少遅れても謝れば大丈夫だって。」

「そうそう、バイトなんかより俺達とすごしたほうがよっぽど有意義だよ。」

「それに君、地元の子でしょ？俺達ここ初めてでさ、人助けと思っ  
て案内してくれよ。」

その後もママが断ってもしつこく言い寄ってくる男たちはついに

「ああー！いいからついて来い！！」

「まったく、空気が読めないね。」

「ああ！さあ、もっと近づけよ！！」

なかなかうなずかないママにキレた男たちは強引に腕を取って連れて行くとした。

（はあ、めんどくさい事になったなあ。）

ママは他人事のように心の中のため息をつき、周りの麻帆良の住人は巻き込まれないように離れていった。

「はん、周りの奴もなさけねえな。」

「こちらが強気になったとたん逃げ出しましたね。」

「ははっ！これならこの街の奴はやりたい放題にできるんじゃないか？」

「そうだな、ここまで腑抜けぞろいだとな！」

彼らは街の外から来たから知らなくて当たり前だが、ここ麻帆良では自分たちが何かしなくてもどうにかする人たちが大勢いること。まして最近はその秩序の番人がいるのだ。その時に巻き込まれたら困るから離れたのである。

だから彼らがここでとる最善の行動は、誰か来る前にさっさとマミを放して逃げる事である。騒ぎを聞きつけてきた指導員があの子の姉妹の誰かだった場合、謝罪など聞くまもなく制圧されるだろう。

もつとも、彼らを叩きのめす相手が誰なのかは麻帆良の住人も予想を外していたが。

「先に手を出したのはそつちだからこれは正当防衛よ？」

「は？何いって…ブギヤ！」

「高村！お前よくm…ハガ！」

「え？え？…アベシ！」

絡まれていた本人が難なく男たちを制圧してしまったのだ。

そこに指導員が到着した。

「マミ…君！これはいったい？騒ぎがあつて駆けつけたけれど。」

「高畑先生。しつこくナンパに誘われて強引に連れて行かれそうになったので正当防衛ではらいのけました。」

「彼らも運がなかったなあ…。わかった、後はこっちで処理しておくよ。」

「ありがとうございます。」

その後もエヴァと会って少し話した後、強引に巫女のバイトに連れて行ったり、仕事を交替したタカミチと合流したりして初日の出まで騒いでいた。

#### 4・入学式とクラス

ウェールズ魔法学校から来年にネギ君が卒業する事は確定し、こちらに来るのは03年の初頭になるだろうと知らせが来た。

あしゅらの教師としての訓練も終了し、クラスも明日菜ちゃんや

このかちゃんなど魔法関係者を多く配置したクラスも組み受け入れ態勢は整った。

私もネギ君のサポートをするために中学生として入ることになった。

まだ彼が来るのは先だけけれど、私はこれから1-Aの一員としてすごしていくことになる。

学園長、校長と長い挨拶を終え。入学式は終わり私達はこれから3年間お世話になる教室に向かった。

そこでタカミチとあしゅら、つと高畑先生と弓先生ね。の挨拶の後一人ひとり自己紹介をし私の番に。

「巴マミ君。」

「はい！」

ネギ君や闇の帝王と心配事も多いけれどこれから3年間、彼女達と楽しく過ごしましょう。

物語の歯車は再び大きく動き出した。彼が来ればより大きく動くだろう、その進む先にはいったい何が待っているのか。

## 次の舞台へ（後書き）

明日菜を関わらせる理由作りとその他です！

明日菜を関わらせる理由を作ってみました。いささか強引ではありますが、隠れても隠し通せるかわからないので打って出よう！ってな感じですw

この形態はネギ君が来るまでもう少し続きます。内容は超の困惑とかそんな感じをもうちょっとしたところでネギ君襲来です！

エヴァ編はある程度できてきたのですが、あしゅらを活躍させようかキュウベえを暗躍させようか迷ってます。

あと、ネギ君を原作通り明日菜&このか部屋に放り込むかあしゅらと同居させるかも迷ってたりw

小ネタコーナー

エ「オイ！こら、放せ！」

マ「いいじゃない、減るもんじゃないんだから。ちょっと巫女装束着るだけよ。交替してももう残りの時間も長くないんだから。」

エ「だからなぜ、私があんなもの着なければいけないんだ！」

マ「きつと似合うわよ。」



エ「人の話を聞け！」

その後、抵抗むなく連れ去られ、終わった後もガミアに監視され、結局全てが終わるまで脱がせて貰えなかったらしい。

エ「くそ！今度はこっちがやり返してやるぞ！」

リベンジを誓ったエヴァだが果たして達成されるのか。

教師と生徒それぞれの悩み（前書き）

短編2本

もう少しできるかと思ったけれど、ぜんぜん3・Aの日常ネタが浮  
ばず…。

## 教師と生徒それぞれの悩み

### 1. クラスの様子

ネギが受け持つ予定であり、マミが入ったクラスはある意味で麻帆らしいとも、麻帆良の利点と欠点が両方そろっているともいえるクラスであった。

別に問題児が多いというわけではない。成績優秀者や技能保持者など褒められるべき点は多数ある。委員長に決まった雪広あやかなど才色兼備、文武両道、人格者と完璧超人といってもいいくらいの子もいる。

では何が問題か、それはおおらかを通り超え自由すぎるといつても良い性格と、中学生なら当たり前かもしれないが各々自分の興味があることには自重をしない部分である。

このクラスで何かがあるとそれがどんなに小さなことでもほんのわずかな時間で、大騒ぎに変わっているなどこのクラスでは日常茶飯事である。

自重しないことについてもクラスの武闘派？の古菲と長瀬楓は自己紹介時にタカミチと弓に勝負を申し込んだり、絡繰茶々丸の製作者である葉加瀬聡美と超鈴音がガミアをロボットと判断し顔を出している麻帆良大学工学部と一緒に解析しようとして制圧されたりと何かしらの騒ぎの元を提供している。

とはいえ他の生徒に過度の迷惑をかけているわけではなく、むしろその何でも受け入れる超ポジティブなクラスの雰囲気は塞ぎこみ

がちな生徒を明るくしたりと良い方向に働いていることもある。

入学式からしばらくたって判断できた事は、このクラスならネギを受け入れることは可能な事と並の教師ではこのクラスを制御することは不可能という事だった。

そのため当初予定していた弓が担任、ネギが副担任あるいは弓の補佐という配置は決定となった。

とタカミチと弓が今後のことを話し合っていると、少し先の学園祭でのクラスの出し物を超が持ってきた。

「と言う訳でクラスの出し物は中華料理の飲食店にナタネ。」

「ふむ、料理人や調理法、衛生管理や食材も問題なさそうだね。それにしてもよくまとめられているねこの資料は。」

「けれど何故、超君が？こういうことはいつも雪広君が持ってきているが。」

「実は先生方にお問い合わせがあつて変わってもらたネ。」

「お願い？」

「詳細はこの資料に書いてあるネ。」

と超が取り出した資料には。

「なになに……」「超包子」 出展計画！？え！学園祭以後も営業するのかい！？」

「お金の管理とかは問題ないヨ。食材もあやかを通して雪広グループから仕入れるから大丈夫ネ。」

「しかし、中学生が商売するというのは……。」

「学業には影響ないようにしっかりと調整してるヨ。トラブルが出たら中止にしてもいいからネ。味は学園祭のときに判断して欲しいヨ。」

「一応話しは持っていつてみるけれど、実際に許可を出すのは僕達じゃないからね。あまり期待しないでくれ。」

「大丈夫、先生達が話を通してくれるだけで全てOKヨ。」

「ははは、自身があるんだね。」

「もちろんネ！」

その後、この話を学園内の営業活動を管理する部署に持っていき、学園最後に判断を下すとなったのだが。超が言ったとおり許可が下り、それだけでなく超包子は瞬く間に学内一の人気の店になった。

「……………」

生徒が自主的に活動する事は嬉しいがその規模が中学生の範囲を超えていることに複雑な心境のタカミチであった。

ちなみに古菲が学内の格闘家を全て破り、日々挑戦を受けていることを知ってさらに複雑な顔をしたとか。

## 2・超の困惑

さて、先ほど話しに上がった超だが、実は入学以来ある悩みを抱えていた。

万能の天才といわれている彼女の悩み、それは彼女がここにいる理由と深く関わっている。

彼女がここにいる理由と悩み、それは進学といった普通の理由でも、あの理論がどうのこの数式がどうだといった天才としても悩みではない。

それは彼女が現在の遙か未来からの来訪者であり、その未来にて起こる悲劇を回避するためにここに来たのだ。

そしてその悩みはある2人の人物に関することだった。もう少し幅を広くすると5人になるかもしれない。

その人物たちとは「弓弦之助」「巴マミ」「ガミア3姉妹」だ。

彼女は未来の悲劇の解決手段があり、またそれに深く関わるネギ・スプリングフィールドに接触するために麻帆良学園に来たのだ。そ

してその手段実行のために日々いろいろとしているわけだが。それを実行するに当たり間違いない学園の勢力とぶつかる事になるため学園の警備員の情報や最大の障害になりかねないネギの事をいろいろ調べて来たわけだ。

流石に昔のことなので失われている情報は多いが、クラス構成や担任の事など麻帆良学園の表の事は簡単に入手できた。しかし、その中に弓弦之助と巴マミの名は記載されていなく入手した情報だとクラス総数は31名、担任は1〜2年の2学期までは高畑が担任、それ以降はネギが担任になっていた。しかし現実には2人はクラスに関わっている。

もちろん超とて過去が完全に情報通りとは思っていないかったが、この二人は流石に見過ごせない理由がある。

弓に関してはネギの事を考えると一般の教員とは思えないが、いくら調べてみても魔法との関わりが見つけれず、ならばネギが来るときに副担任が交代するのかと思っただが。どうもネギが来たら担任になりネギを副担任にするという予定らしい。普通に考えれば当たり前前の事だが、これを大きな変化と判断しており彼が何者なのかと悩んでいる。

マミに関してはそれ以上に気にかかっている。このクラスからネギの従者候補が多数出るとは調べてあるため、彼女が何者なのかを調査したのだが、調べれば調べるほど彼女の情報が無かった事に対する不安が増してきている。

彼女が普通の魔法と関わりの無い一般人なら問題は無く誤差と判断できたが、調査の結果はその真逆であった。警備員として数年前より活動し多くの魔法使いの教員より信頼されており学園長やタカ

ミチ、エヴァと親しいなど情報が残らない事などありえない人物であった。そのような人物がクラスにいる……、自身の計画を進める上でどう判断するか。まだ時間があるとはいえ何らかの対策を立てるべきかと考えている。

ここは超と葉加瀬の研究所。ここで彼女たちは日々研究と計画の準備をしている。そして今日は計画の準備のためにマミの偵察をしているようだ。

「調べれば調べるほど謎が増えてきますね。」

「現在わかっているだけでも魔法世界出身で長命種か不老、実力も高畑先生より上でエヴァンジェリンと同クラスの化け物。さらに最近判明した事は弓先生とガミア先生たちともかなり親しい、と言うより彼らの上位者つてところネ。」

「ガミア先生たちが彼女と上に見ているらしい映像を録画できましたからね。」

「未確認情報では元紅き翼とも出てきてるネ。どう考えても彼女は私の世界の過去にはいなかった存在ヨ。もし居たら私は今後情報と言うものが信用できなくなってしまうネ。」

「欠片も情報が残らないなんてありえないですね。」

「私たちの計画において最大の不確定要素ネ。」



「実力を考えると敵に回ると大変ですね。」

「武力だけでどうなるってわけでもないが。彼女はそれを判断できる材料が決定的に不足してるネ。」

とマミについていろいろ悩んでいるようだ。

そして二人の後ろに白い影が居た事は誰一人として知らない……。その白い影の主人でさえ。

## 教師と生徒それぞれの悩み（後書き）

タカミチの悩みと超の悩みでした。

ぜんぜんネタが思い浮かばず…、ホントはもう少しやろつかと思っただけで無理そうなので時間を一気にとばしてネギ来襲まで進めますw

次話はネギ君が麻帆良に来ます。

エヴァ編の配役と部屋割りも決まったので後は文字にするだけです！

小ネタコーナー

超「彼女の謎は解けないが、他の悩みの解決の糸口がみつかったネ。」

葉「なんですか？」

超「ガミア先生の事ネ！」

葉「なるほど！彼女がガミア先生の上位者、たぶんマスターでしょうか？なら彼女にお願いすればガミア先生のことを解析できますね！」

超「その通りネ！何としても彼女とガミア先生の間をまとめるヨ。なに、クラスメイトの頼みならきくと聞いてくれるネ。」

葉「そうですね！うふふふふ……………」。

超「そうすれば科学はさらに！ふふふふふふ………。」

研究室内には不気味な笑いがこだまし、メンテナンスにやってきた茶々丸が思わずUターンしてしまった。

彼女が感情を得るのは原作よりも早いかもしれない。

**ネギ来日！&開幕（前書き）**

リアルの都合で遅くなりました^^；

やっとネギがやってきます！

## ネギ来日！&開幕

2002年7月。ブリテン島ウェールズ地方のとある辺境にある村に存在する学校で卒業式が執り行われていた。

「卒業証書授与！君たちは本校にて…。」

田舎の村にあるせいかわ生徒、教師は共に少なく卒業生も片手で数えられるくらいしか居ない。

「君たちはこの7年間、よく頑張ってきた。しかし、修行はここからが…。」

もっともその原因は田舎と言う事もあるが、それが主な原因ではない。

「ウェールズ魔法学校の誉れとなるよう。そして自分が目指す立派な魔法使いになれるよう努力を怠らぬように！」

そうここは、魔法使いの子供たちが大人たちから魔法の初歩を学ぶ場所。現代社会の裏で暮らす魔法使いたちの子供達のための場所だ。総数が少ないゆえに子供の数も少ない。

だが、今日は数少ないながらも子供達の門出を祝う大人たちにとってそんな事に関係なかった。

卒業式が終わった魔法学校の廊下。そこで卒業生2人とその保護者達が話し合っていた。

「ネギなんて書いてあったの？私はロンドンで占い師よ。」

「修行の地はどこだった？」

「早いものだな、ちょっと前に入ったと思ったらもう卒業か。」

「イングランドまで行くなんで、離れるだけでも心配なのに…。」

「子供はいつか旅立つもんじゃ。そんな事言っではいつまでも未熟者で終わってしまうぞ。」

子供達は卒業後の修行内容について、保護者たちは離れて暮らす事になる子供を心配して話し合っていると。

「今、浮かび上がるとい。」

話しかけられた少年の証書に、同じ卒業生である少女と同様に修行の地とやるべき職種が浮かび上がってきた。

「あ…。」

「どう？」

「え〜と、「日本」で「教師」をする事。」

「「え？」」

「なんじゃと！」

「ええーーーーー！」

そこには予想外の事が書かれており、経験豊富なはずの老魔法使いさえ驚愕し、他の人は半ば思考停止に陥っていた。

「こ、校長先生！先生ってどういうことですか!？」

その後、何度読んでも逆さにしても裏から見ても文字は変わらず校長に問いただすために皆で移動してきた。

「ほお……、「先生」か……。」

「何かの間違いではないのですか!？10歳で先生など無理です。」

「そうよ！ネギったらただでさえポケでチビで……。」

そう問い詰める2人の少女に校長は。

「しかし、卒業証書にそう書いてあったのなら。決まった事じゃ。立派な魔法使いになるために頑張って修行してくるしかないの。」

と変更する事はできないと告げた。

「ああっ」

「あ！お姉ちゃん！」

その無常な現実には少年を実の弟のように扱い、少年も姉と慕っている少女はめまいがしたのかふらついてしまった。

「ふむ、安心せい。修行先の学園長はワシの友人じゃからの。生活面では何も心配は要らんよ。ま、頑張りなさい。」

「……。」

校長が安心するように声をかけたがそれでも初めての異国の地、責任重大な職業に幼馴染の少女は沈黙してしまっただが、

「はい！わかりました！！！」

少年は元気に返事をした。

「それにしても、あやつといいあの子といい波乱万丈な修行じゃの。」

その後、子供達とその親が去り老魔法使いと校長が残り話していた。

「修行の地を日本にした事は、ワシらの判断じゃが。教師は占いが示したものじゃからな。」



「あやつのはきは出なかったそうじゃな？」

「ああ、いくらあの占いで教師は流石にどうかと思ったのじゃが…。」

「こんな時は魔法使いである事が恨めしいの。例え無茶とわかっていてもやった時と、やらなかったときの差を知っているのは。」

「全くじゃよ。」

当たり前すぎる占いもそれはそれで困った事になるようだ。

「じゃが、日本に行かせたのはやはり？」

「ああ、こちらに置いていては彼の成長に悪影響が出てしまっじやろっ。」

「まったく、未来を創るのは若者じゃが過去の遺物と今の問題を何とかするのがわれわれじゃというにの。」

「まったくじゃ…。」

2人は少年の未来が明るい事を願い、その後も語り合った。

それから時は流れ2003年2月。

「本当に日本は人が多いなあ。ロンドンに着いたときもそうだったけれど日本はそれ以上だな。」

少年 ネギ・スプリングフィールド は修行の地である麻帆良学園の地に居た。

「え」と、たしか女子中等部の校門前だったよね。空港に迎えに来てくれるのをわざわざ断ったのだから遅れないようにしなくちゃ。」

「どうやらネギ、始まる修行に気合が入りすぎて迎えを断ったみたいだ。」

しばらく歩いてようやく目的地の到着してあたりを見回している。

「やあ！久しぶりだねネギ君！いや、これからは先生かな？」

「タカミチ！久しぶり！」

目的の人物であり久しぶりに会う友人との再会の挨拶をし、今までの事や日本の感想を話し合いながら学園長室に向かった。

「なるほどの、修行のために日本で先生を……。そりゃまた大変な課題をもろたのお。」

「は、はい。よろしくお願いします。」

ネギはこれからの事を思つてか、それとも学園長の奇怪な（それはもうよいじやる！）。ともかく緊張した面持ちで挨拶をした。

「しかしまずは教育実習ということになるかの。今日から3月までじゃ…。学期末に今後も教師として働けるかの試験をだそう。本当の修行はそれからじゃな。」

「はあ。」

「ネギ君。この修行はおそらく大変なものになるじゃろう。ダメだったら故郷に帰ることになる。二度目は無い。その覚悟はあるのじゃな？」

学園長の最終確認の問いかけに彼は。

「は、はい！やります。やらせてください！」

決意のこもった目と言葉で応じた。

学園長もそれを確認し。

「…うむ、わかった！仕事は来週からになる、今日と明日はゆっくり休み日本の生活に早く慣れなさい。正式な挨拶は月曜日の改めしておこなうが、今日も来ている先生方は居るからの。これから君と一緒に働く人も来てもらうておる、挨拶や少しばかり話してきてはどうかの？高畑君、案内してあげてくれ。」

「わかりました。さあ、ネギ君行こうか。」

「はい！学園長先生ありがとうございます！」

タカミチとネギは連れ立って職員室へと向かった。

「ふふ、あれから結構経つけれど変わってないわね。」

「ふおおおお、久しぶりに会って懐かしかったかの？」

2人が出て行った学園長室に先ほどは居なかった人物の声。マミが久しぶりに会ったネギと一緒に居たときを思い出してあげた声だ。

「とりあえずは3月まで様子見ですか？」

「そうじゃの、いくら占いで適してるとはいうても、10歳に教師は辛かるう。期末テストの時にちょこっとしたものを出して、後は君と弓君の報告しだいかの。」

「合格したら本格的な修行ですけど、どうします？ナギじゃないんだから腕試しの旅なんてするわけにもいかないですし。」

そもそも教師と関係ないですね。

「そうじゃのう。生徒とのふれあいも修行の一つと想っておるが、彼の場合それだけじゃと不安じゃからな。エヴァに闘ってもらおうかの？」

「一人じゃかなわない敵をぶつけてみて、精神を鍛えるってところですか？でも、エヴァがそんな事に付き合っしょうか…。」

「そこなんじゃよ。あやつは茶番とわかれば決して肯かんじゃろう

しの。ネギ君の血で呪いが解除されるかも知れん、と情報を流してみようかと思つておる。」

「それだとネギ君が危険だと思えますよ。それにだまされたとわかつたら彼女怒りますよ。」

「どうしたものかのお。君がやるわけにもいかんしの。」

「私だと迫力が足りませんからね。」

と2人でネギの修行内容について話していると。

「なんなら僕が彼女と交渉してこようか？」

とどこからともなく現れたキュウベえがそんな事を言いだした。

「あなたに任せるのはいろいろ不安なのよね。」

「僕はあくまでも最も効率の良い最善の方法を提供しているつもりだよ？」

「その効率のよいつてところが不安なんじゃが。」

あのキュウベえですからね。このキュウベえもしよっちゅう黒かつたり人心を無視した物言いをしていたりしますから。

「でもあなたの交渉力はすごいものね…。じゃあ、条件としてネギ君に過度の危険がかからないようにとエヴァも納得して参加する事、一般生徒や事情を知らない魔法使いに被害が出ないようにして。」

「それなら簡単だよ。そつだマミ、君も少しは協力してくれよ。」

「ええ、いいわよ。」

「了解だ。きつとすばらしい修行になるよ。じゃあ、いろいろ準備があるから結果は時期が迫ったら言うね。」

と言い残すと来た時と同じくいつの間にか居なくなっていた。

「いささか不安ですね…。」

「そつじゃの…。」

後にもつと条件をつけておくべきだったと後悔するわけだが。

さて、一方のネギとタカミチの方は職員室につき、紹介と挨拶を終え。今日からネギの場所になる机まできていた。

「ここが今日からネギ君の場所だよ。弓さん、彼がネギ君です。」

「ああ、彼が。こんにちはネギ君。私は弓弦之助。これから一緒に仕事をする事になるがよろしく。」

「はい！よろしくお願ひします！」

「彼は今僕が担任をしているクラスの副担任をしているんだけど、君には彼の補佐をしてもらうよ。しばらく出張で忙しいから、彼が

担任で君が副担任のような形になるかもしれないけれど頑張ってくれ。」

その後は教師についてや書類整理の仕方を教わりつついたが、次第に日も暮れてきた。

「もう日も暮れてきたね。今日はここまでにして夕食を食べて帰ろうか。」

「うん。あ、タカミチ。僕はどこに住めばいいの？」

「高畑先生、住む場所を伝えてなかったのですか？」

「すまない伝え忘れていたよ。ネギ君はこれから弓さんと一緒に職員寮の部屋に住んでくれ。弓さん彼をお願いします。」

「ネギ君いろいろ大変だろうけど、お互いがんばろう。」

「はい、弓さんこれからよろしくお願いします。」

彼らはその後、夕食に日本料理を出す店に行きネギの故郷のウエールズのこと、日本のことなどに花を咲かせ、弓とネギは職員寮に向かった。

「ここが私の部屋だ。ネギ君に必要な家具や食器は明日にでも買いに行こう。」

「でも僕お金は……。」

「なに、遠慮する必要はないよ。これでもそれなりのお金はもらっ

ているからね。」

「そんな、わるいですよ!」

「ふむ、それなら今は君に貸しておくという事にしよう。正式な教員になって学園長から給料を貰えるようになったら少しずついいから返してくれればいいよ。」

「それなら…、しばらくお借りします。」

「遠慮する必要はないよ。これでも蓄えはあるほうだからね。」

実際に弓、というよりマミの月の収入は5人分ある割りに使うのは実際は1人のため、貯金はかなりあったりする。

マミは最初断ろうとしたが、学園長が働いているのに給料を払わないわけにはいかん、と言いつつ5人分の給料を振り込んでいる。

なのでネギ1人が増えてもよほど無駄使いをしない限り、生活が苦しくなるといったことはない。

その日はネギも疲れていたために早めに眠り、日曜日にネギ用の机や食器、いくつかの嗜好品を買ったついでに麻帆量の街を案内した。

その夜、机の設置などで疲れたネギが寝た後、部屋に備え付けの浴槽にて弓ことあしゅらの声が。



< あしゅら、昨日と今日彼を見ていてどうだった？ >

「「そうですね。頭の回転は悪くはないといったところでしょうか。本当にあやつの息子なのですか？」」「顔こそ似ていますが性格は真逆の気がします。」「それと魔法の制御に少々、難点があります。魔力量が大きいせいにかくしゃみなど突発的なことでもれてしまっているようです。」

どうやら2日間、一緒に居たときの感想を聞いているようだ。

ネギの事を知っているマミとタカミチはあまり心配してはいなかったが、あの事件の事もあしゅらにサポート兼様子見を命令していたのだ。もっとも、性格などは問題がなく予定どおり進めても問題ないだろうと判断された。

「「それと、もう一つ報告する事があります。」」

< まだ何かあるの？ >

「キユウベえの奴から協力要請がきたのですが。」「私どもでは何故そのような事を言うのか判断ができず。」「マミ様の指示を仰ごうかと。」」

< あの子から協力要請か。おそらくエヴァとの交渉に関係する事でしょう。あの子に協力してあげて。ただ、やりすぎると判断したらこっちに報告をしてね。 >

「「了解しました。」」

話が終わりあしゅらも明日のためにと浴槽から出て弓に変装した

後、彼もまた眠りについた。

いよいよ明日からネギの教師生活が始まる。ついに全ての役者が舞台上がり物語は本当の意味で開幕した。彼と彼女はどのような物語をつむいでいくのか。

「真ネギま マギカ」

始まります



頑張れネギ君！君は誰もが経験した事の無い日常を送れるのだ！君  
ならきつとあの謎を解けるはずだ！！

## 子供先生ネギ！

「ネギ君、今から私達が担当するクラスに行くが、緊張する事はないよ。みんな良い子できつと君もうまくやれるよ。」

「はい！」

昨日から一夜明け月曜日、ネギは先ほど職員室で同僚となる教員に挨拶を済ませ現在担当する2-Aの教室に向かっていた。

タカミチも先に向かいネギが来る事を話しているし、弓も一緒のため心配する事は少ないがそれでも何もかもが始めてのネギは緊張していた。

「まあ、元気すぎると言ってもいいかもしれないかな？前は朝教室に入るといろいろな畏を仕掛けてあったりしたからね。」

慌てた事もあったね、と弓は笑っているがネギは。

「ええ！大丈夫なんですか！？」

よけいに不安が増したようだ。

「前は水が入ったバケツや吸盤付きの矢が飛んでくる事もあったけれど、今は黒板消しか足元に紐くらいかな。過激すぎるって事で1回叱られたからね。」

ちなみに直接叱ったのは新田先生だが、生徒の捕獲にガミア姉妹が出たこともあってそのときの恐怖が忘れられないせいかな、騒がし

い事は変わらないが過激すぎるいたずらや問題はぐつと減ったらしい。

一切の弁明を聞かずに淡々といたずらに関わった生徒を狩って行く姿に、関わっていない生徒さえも少しは自重することにしたとか。

ちなみにいたずらに参加した魔法関係者のある生徒はアーティファクトを使っても逃げる事ができず、主と思われる生徒に泣きついたがはぐらかされ引き渡されたそうだ。

「さあ、ついたよ。私が呼ぶからそしたら入ってきてくれ。」

「わかりました！」

そういい弓は先に教室の中に入っていった。教室の中ではタカミチが教育実習生が来る事、自分は長期の出張が入ってしまったしはらく弓とその子で授業をする事を伝えており。到着した弓にも早速質問が飛び交っていた。

その喧騒とまた出てきた不安にしり込みしていたが、ウエルズを出発するときに見送りに着てくれた姉と幼馴染の姿を思い浮かべて決意を新たに顔を上げた。

「詳しくはその子に入ってきてからにしようか。ネギ君はいつきてくれ。」

「はい！」

名前が呼ばれネギは教室に踏み入った。

教室に入っただけでまず向けられたのは驚愕の視線がほとんど。いくつかは興味深そうに見ていたが、その次には次々に興味津々な視線を向けてきた。

「それじゃあ、ネギ君。皆に挨拶をしてくれ。」

「はい。皆さんこんにちははウェールズから教育実習生としてきました、ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間と短いですがこれからよろしくお願いします！」

彼の自己紹介が終わり教室は沈黙に包まれた。

そして……。

「「「「「か、かわいいい！」「」「」「」

少し前の静けさが嘘のように一気に騒がしくなった。

「え！子供！？」「何歳なの！」「担当教科は！」「ウェールズってどこ！？」

ネギは次々にかけられる質問に完全に混乱してしまっていた。

「高畑先生！この子がしばらく弓先生の補佐と一緒に授業をやるの！？」

質問の矛先はそれを眺めていた教師にも向けられた。

「ああ、彼の学力は問題ないからね。弓先生に見ていてもらって授業してもらおうと思っっているよ。」

「やったー！ー！」

とネギを歓迎している生徒が多いがもちろんそうじゃない生徒も居るわけで。

「あんなガキが教師ってどういうことなんだ…。弓先生が居るから大丈夫だろうけど。ホントどうなってんだここは…。」

とただでさえロボやその他に頭を抱えていた生徒はさらに悩みが増えた事を嘆き。

「ほお、あれがあいつの…。まずは様子見だな。あいつがしめた期限までまだある、あせる事はないか。」

彼と因縁がある生徒は今後について考え。

他にも魔法関係者や自分の目的のために彼に注目する生徒などが居た。

ネギの周りには生徒が大勢集まりいろいろと質問してはいたが、



このままでは授業にも影響が出かねないのでタカミチが。

「みんな彼に興味あるのはわかるけれど、そろそろ一限目が始まるよ。今日は……、ちょうどいい英語のようだね。」

「そうですね。ネギ君少しやってみるかね？」

ちょうどタカミチが担当で今後、弓が引き継ぐ予定の英語と言う事でネギに少しやらせてみることにしたようだ。

ちなみにタカミチの担当は英語、弓は化学を担当しており。来年度からタカミチは非常勤となるため彼の担当していた英語は他の英語教師と弓に引きつがれることが決定している。弓も英語を教える事に問題がないため、ネギの補佐ということもあつて英語をするこ  
とになっている。

それはおいておいて、いきなり授業を任されたネギはというと。

「ええ！タカミチそんないきなり無理だよ！！」

弓の補佐と聞いていたこともあり大慌てであった。

「なに、私たちも居るのだから大丈夫だよ。フォローもするからまずはしてみてはどうか？」

「弓さんの言うとおりまずはしてみたらどうだい。わからなければ僕たちに聞けばいいから。」

が両者ともネギにやらせてみる気のように彼に救いの手が差し伸べられる事は無かった。

その後、ネギは授業をしてはみたがやはり全て始めてであった事もあり、うまくいかず途中からタカミチにバトンタッチする事になった。

2 - Aの授業のあと弓とタカミチについて授業を見たり、やり方を教わって放課後になった。

まだ、やらなければいけない書類などがあるが、今日は疲れただろうからとネギは一足先に仕事を終えていた。

「はあ、やっと一段落したよ。やっぱり教師って難しいなあ……。うん、落ち込んでばかりじゃいけない！弓先生やタカミチに聞いてしっかり勉強しないと！」

やはり10歳で教師は難しいのか少し自信を無くしていたが、初日なんだからと思いきや明日から頑張ろうと気合を入れなおした。

気持ちも切り替えた事だしとタカミチから貰った2 - Aの名簿を見ていることにした。

「でも、みんな元気だったなあ。でも、あの神楽坂さんはひどいなあ。タカミチが居なくなるのが嫌だからって、僕に言われても。」

どうやら明日菜、タカミチの変わりにネギが入ってきたことが嫌で八つ当たりをしたようだ。確かにネギが入ってきたからという面もあるがネギ自身にとっては完全に八つ当たりだ。

「それにこの人。バマミさん……、マミお姉ちゃんに似ている気がするんだけど。」

似ているも何も本人だが、マミの姿がネギの記憶の中 5年前の姿と変わっておらず、何より何故彼女が日本のそれも中学生をしているのかネギにわかるはずなく。

「きつとすごく似た人なんだろうな、マミお姉ちゃん今頃どうしてるかなあ。彼女とも仲良くなれたら嬉しいな。」

他人の空似だろうと思ひ、魔法学校に入学後に旅立ったもう一人の姉を懐かしみ。それとよく似た生徒とも仲良くなれたらと願った。

「弓さんは先に帰っててもいいって言ってたけれど、どうしようかな？ん、あれは。」

これからどうしようかと思案していると、視界の先に朝教室で見かけた姿が入ってきた。

「あれは27番の宮崎のどかさかな？あんなに本を持って大丈夫かな……。」

そこにいたのは本をいくつか抱えたのどかが居た。図書委員だから本を抱えていても不思議ではないかもしれないが、少しふらついており見えて不安だなと彼が思っていると。

「きゃ！」

バランスを崩した彼女が階段から外へ……、そこから地面まで数Mはあるだろう。まともに落ちれば命の危険さえある。

「やっぱり！間に合え！！」

彼女が落ちた事を確認したネギは魔法を使いその落下速度を低下させ、間一髪のところまで彼女と地面との間に入り身体が叩きつけられる事は防げた。勢いがつき過ぎてネギが顔面スライディングしてしまいはしたが、のどかに傷一つつくことはなかった。

「あなた、大丈夫ですか？宮崎のどかさん。」

とつさの事とはいえ魔法を使ってしまったことに不安はあるがまずは彼女の無事を確認しようとして。

「あ、あなた……。」

第三者の声が……。

「あ、嫌……その……。」

彼の魔法を使ったためばれてないかを心配してはいたが、それは目の前にいるのどかに対してであり第三者のことは頭の片隅にもなかった。

そしてその第三者、神楽坂明日菜はとある用事でネギの事を探していて偶然居合わせたわけだが。

ネギも混乱を抜け出しておらず、時間だけが過ぎていくかと思わ

れたが、のどかが目を覚ましかけたとき。

明日菜はネギとネギが持っていた杖を掴み近くの茂みに飛び込んだ。深い考えからのものではなく、ただこのままではまずいと思っ  
てのことだろう。何がまずいかは彼女もわかっていない。

「あ、あんた！さっき何したの！？超能力！？」

「え、違いますさっきのは…。」

「誤魔化そうたってそうはいかないわよ！現行犯ではっちり見たん  
だから！！」

「あつうつう。」

もっとも、場所を移したが彼女もまだ混乱から抜け出してはおら  
ずネギのが超能力者かと考え叫んでいるだけでもあるのだが。

「白状なさい！あんた超能力者でしょ！！」

「違います！僕は魔法使いです！って、ああ！！」

そしてそれに引つ張られてネギも、自分から正体をばらすという  
大失敗をしてしまった。

「魔法使い！どっちにしろ似たようなものでしょ！！」

「あ、あの、このことは内緒にしてください。ばれたら僕大変な目  
に……。」

「そうねえ、どうしようかしら。」

この世界では服を吹き飛ばされたり、問答無用で同室にされていなくネギに恨みがないとはいえ。彼と入れ替わりでタカミチが担任を辞めることや魔法使い発見という事が、彼女を少し意地悪な考えに走らせていた。

(ふふふ、困ってるわね。どうしてやろうかしら。)

弱みを握ったという優越感と鬱憤が晴れる爽快感に浸っている彼女だが、別にネギに対して何かしようとは考えてはいない。流石にかわいそうになってきて許してやろうかとしたが、いささかその判断は遅かったようだ。

「ううう、仕方ないですね。」

「な、何よ。」

当初の混乱から抜け出す事はできたが、今度は魔法バレという混乱に入ったネギは最終手段に打ってでるしかないと決意を固めてしまっていた。

殺られる前に殺れ！と言っわけだ。

「何！何か物凄く不吉な感じが！」

「秘密を知られたからには記憶を消させていただきます！！！」

「ええ！」

普通はその前に説得などがあつたりするわけだが、混乱するネギは早々に説得を放棄し記憶消去の魔法を唱えだした。

「ちよつとの間、パーになるかもしれませんが許してください。」

「え、ちよつと！パーって！！」

何とか止めようと思いはするが、もう手遅れの状態に明日菜は慌てついに。

「消えるーーーーー！」

「きゃーーーーー！！！」

「パーーーーーン！！！」

発動した魔法は綺麗に消し去った、……………彼女の服を。

「あ、あれ？」

「いやーーーー！！！」

それにネギは困惑の声を、明日菜は改めて悲鳴を上げた。

「ごめんなさい、間違えちゃったみたいで。」

「どう間違えたらこうなるのよ！」

あまり事に逆に冷静になり上着を明日菜に貸そうとした時。

ガサ

「明日菜君とネギ君？こっちで叫び声が聞こえたけ……れ……ど。」

同じくネギを探していたタカミチが2人の叫び声を聞きつけて、  
茂みの中に入り込んできてしまった。

そして目にした半裸状態の彼女。

「ひっ、い、いや………！！」



## 子供先生ネギ！（後書き）

教師就任と明日菜に魔法バレの回でしたw

今回はいきなりの魔法バレを受けてのタカミチとマミの話かな？

エヴァ編までのイベントフラグはほとんど折れちゃってるのでエヴァ編にはちゃっちゃと移ると思います。

小ネタコーナー

「高畑先生。」

「何でしょう弓先生？」

「いえ、ネギ君を先に帰らせましたが、彼女たちのことを考えると歓迎会を企画しているのでは？」

「確かに彼女たちならしそうですね。そうなると失敗しましたね。」

「ええ、ですから高畑先生は彼を連れ戻してきてくれませんか？残りの書類はやっておきますので。」

「ありがとうございます。彼女たちが来たら探しに行ったと言っておいてください。」

そういつて彼はネギを探しにいったのだが…。

彼はネギを先に返した事と探していくのがもう少し早ければと、  
そして自分の間の悪さに後悔してしまう事になる。

## タカミチの決断と試験と（前書き）

リアルが忙しくなってきたり速度とが低下してますが頑張ってくださいます！

## タカミチの決断と試験と

(ネギ君の様子を見ていずれは話そうと思っていたが、まさかそのネギ君からそれも初日に彼女に魔法がばれるなんて。)

いずれはと思っていたが想定外にも程がある事態にタカミチは頭を抱えていた。

本来はネギの修行の様子を見て少しずつ魔法の事、彼女の生い立ち、かつて何があったのかそして今なのがおこっているのかを話そうとしていたが、その予定は一瞬にして瓦解してしまった。

あの後、彼は明日菜に換えの制服を渡した後に職員室に戻っていた。

弓から後でネギの歓迎会をやる事を聞いたが、それどころではなく今大いに苦悩していた。

(一人で考えていても埒があかないか……。学園長は忙しそうだし、マミさんに聞いてみるか。)

彼女も準備に忙しいかもしれないが、呼びに来たという事はそれもある程度終わっているだろうと思ったからでもあった。

<マミさん、今大丈夫でしょうか？>

<タカミチ？どうしたの突然。>

念話でマミに事のあらましを伝えたら、

<それは、なんというか…。>

それを聞いたママはやはりというか困惑したような、声を上げた。

<なんというか、運命ってモノが本当にあるんじゃないか信じたく  
なってしまう事態ね…。>

<確かに引かれ合ってしまうんじゃないかと思ってしまいましたね。  
しかし、もしそうなら彼女の記憶を何とかしても。>

<同じ事が再び起こらない保証はないわね。>

ママが考えていた事は実際は原作についてだったが、ここは物語  
ではなく現実なんだからそんな都合よくならないだろうと……。

<（思っていたんだけど、まさか本当に原作通りの展開になるな  
んて。原作であった明日菜とのイベントは全くなかったから大丈夫  
と思っていただけ……。彼の指し示された職業といい世界の流  
れてモノをあまく見すぎていたわね。そうなる……。>

今後発生する事件は全部起こる可能性が高いと思っただほうがいい  
だろう。

<少し早いけれど、彼女に魔法について教えていったほうがいいの  
かもしれないわね。>

<隠し通す事は難しいでしょうか？>

<今回の事だけで判断するのは早計ではあるけれど。起こらないと

思って行動するより、おこると考えて行動したほうが最悪の事態にはならないわ。>

<……そうですね。>

確かに楽観視をするよりも、もしもの事態に備えたほうが被害が少ない事はわかっているが、やはりまた彼女をあの世界に関わらせる事にタカミチは躊躇していた。

<何も今すぐ全てを話すわけじゃないわよ。そうね、ネギ君と一緒に修行させてはどうかしら？>

マミはあえて原作通りに進める事で不測の事態が発生する事を最小限にしようと考えた、学園に居る間に起こる事件は自分が動けば何とかなるだろう。

問題は魔法世界編だ。ネギがあちらに行くことは押し止める事ができるかもしれないが、事件そのものを止める事は不可能だろう。

完全なる世界が関わっているとすれば自分は向こうに行くだろう。

そうなったときこちらに居る彼女を守る事ができるのか。例えば魔法世界に行かなくてもイギリスに行く可能性は十分にある。そして魔法について知らなければそれを押し止める事は不可能だろう。

ならば今から少しずつでもその時に備えて魔法に関わらせたいほうがいいかもしれない。

こちらが事態をコントロールできるうちに……。

<まだ彼女と彼がこちらの庇護下にあるときにするならばの方がいいわ。>

<……………。>

<彼女が心配なのはわかるわ。でも、彼女を狙う人たちが強硬手段に打って出たらその時は……………。>

<そうですね…、あの時でもそうだったんですから。今だとよけいに。>

ガトウが死んだときを思い出しているのだろう。少し声が震えていた。

<その時に居なかった私が言うのもなんだけれど、彼女は自分の運命と向き合ってその上でその運命を断ち切らないといけないのかもね。>

望む望まざるに関わらず、彼女を取り巻く運命が厄介事を持つてくるなら自分からその厄介事を乗り越えその根源を絶たなければいけない。

彼女が平穩に暮らすにはそれしかないのかもしれない。

<そうですね。またあの時と同じ顔を見たくは無いですし、それ以前顔にも戻したくはないですね。>

<なら。>

<はい、少しでもいい未来が彼女に訪れるように頑張りましょう。

しかし、ネギ君の修行につき合わせるといつてもどうします？>

かつて師であるガトウを失ったときの泣きじゃくる顔やそれ以前の無機質な顔はもう見たくない。だからこそそうならないようにと彼女が運命に抗う事ができるようにと彼女がネギの修行に参加する事を了承した。

<まだ決まってはいないけれどエヴァとの対戦の時に関わらせよう  
とっているわ。もっとも、どう巻き込むかは彼の采配によるだろ  
うけど。>

<わかりました、僕もできるだけ手伝います。>

<おねがい。じゃあ、この話はここまでよ。高畑先生もそろそろネ  
ギ先生の歓迎会に来てください。>

<ああ、わかったよ。>

彼女の今後についてはとりあえずとはいえ決まりネギの歓迎会に  
向かった彼だがそこでもうひと悶着あったりする。そこで彼はより  
強く今後に不安を抱いたとか。

初日は大波乱のネギの教師生活だったが、その後はこれといった  
問題もなく日々を少しずつ教師として力をつけていっていた。

バカレンジャーの面々も弓とタカミチが根気よく指導していたせ



いもあり原作ほどひどくはなく、明日菜やこのかと同室で無いからそれ関係のごたごたもあまり起こっていない。

あまり起こっていないだけであって、何回かはあったりするのだが…。教師と生徒の交流という建前でガミア姉妹が来ないとわかったので、何回かネギを大浴場に拉致したりといった事は起こっていません。

ドッチボールにいたってはそんな事をすれば、すぐに恐怖の治安部隊が来ると知っているので喧嘩はともかく。原作の授業妨害レベルの事は起こりえなかった。喧嘩とてちょっとした言い合いで原作のような指導教員が出てくるレベルにはいたっていない。

彼女たちは制圧されても懲りない格闘馬鹿達とは違って、威張ってはいるが普通の女子高生なため1回受けた恐怖をもう一度受けたとは思ってはいない。

そんなこんなで2月末、彼は学園長から教育実習生としての課題を言い渡されていた。

「彼女たちの成績アップですか？」

「うむ、とは言っても合格かどうかはそれだけでは計りにくいから」

成績が上がったといってもそれは彼の努力の結果なのか生徒の結

果なのかは判断できないですからね。

「クラス全体の成績アップや学習意欲の向上もそうなんじゃが、2-Aには勉強に関して少し問題がある生徒がいるらしいの？」

言うまでも無くバカレンジャーたちだ。それでなくてもあのクラスは全体的に考えが甘い事は前々からタカミチも頭を悩ませていた事ではある。

「そこで彼女たちの成績を少しでも上げるように対策をする事とクラスの勉強に対する姿勢を少しでも改善する事かの。難しいとは思おうが高畑君や弓君、他の先生方に協力を仰ぐなりして達成してくれ。」

「はい！頑張ります！！！」

「うむ、よい返事じゃ。これは教師としてだけではなく立派な魔法使いを目指すならば非常に重要な事じゃ。」

「重要な事ですか？」

「ふむ、わからぬか。ならそれも課題として追加しようかの。テスト終了後に呼び出すのでその時に答えを聞かせてくれ。」

「は、はあ。」

彼は今回の課題で、何が自分にとって重要かいまいち把握していないようだった。それも課題に加えられて困惑している。

「連絡事項はこれで終いじゃ。それでは正式な教員になれるよう頑

張ってくれ。」

「はい。失礼します。」

彼が出て行った扉を眺めつつ学園長は。

「ふおおおお、さてどうなるかの期末テストが楽しみじゃわい。」

「うーん、どうすればいいんだろう?」

さて課題をもらったネギだが、どうすればいいか悩んでした。

「バカレンジャーの人たちは、今まで通り放課後に勉強会をすればいいかもしれないけれど。クラス全体の学習意欲を上げるってどうやればいいんだろう?」

成績が特に悪い5人には今までも特別授業を組んでいたので、テスト対策を弓とやれば問題は無いだろう。

問題はクラスの学習意欲の向上だった。弓が期末テストについて知らせたりテストについてネギから質問したりしたのだが…。

中等部から高等部へは試験を受けなくてもエスカレーター式に行けるので中学では勉強を真剣にしなくても大丈夫!っていった意識の生徒が多い事がわかってよけいに頭を抱える事態になったのだ。

これには弓やタカミチも悩んでいるらしく、ますます自分ができ  
るのかと不安になってしまっていた。

「ううう、バカレンジャーの人たちは何とかなったけれどくらう全  
体だとどうすればいいんだろう…。」

自分が受けた課題だから相談もできないし、と悩んだときよく行  
く場所と同じように悩んでいると。

「あら、ネギ先生？どうしたんですか、なにやらお悩みのようです  
けれど。」

「あ、ママさん（そうだ、彼女にも意見を聞いてみようかな。生徒  
に頼るのは情けないけれど…。）」

ママがかつて一緒に居た人を思い出させるのか、彼女から心配さ  
れて声をかけられたときは比較的素直に悩みをうちあけている。

その後、ママにクラスの学習意欲を上げるにはどうすればいいか  
を聞いたが。

「ううん、難しいですね。私も学生の身ですからどう指導すればい  
いかは…。」

「そうですよね。すみませんへんなことを聞いてしまって。」

「いいえ。でも、それなら新田先生に聞いてみてはどうですか？」

「新田先生にですか？」

「はい、新田先生は厳しい人ですけれど経験豊富ですからきつと力になってくれますよ。」

「でも、これは僕が受けた課題だし…。」

解決案を他の先生に聞いてもいいのかと思ったが。

「課題？」

「えっと、それは…その！」

思わず内緒にしなければいけない事をもらしてしまう。

「どんな課題なのかはわかりませんが、課題をもらったときに人に頼ってはダメといわれましたか？それにこんな事は人に頼らないと無理ですよ。」

「それは…。」

確かに学園長は頼ってはダメと言っではいなかったが、自分に渡された課題なのだからと言おうとしたが。

「それを含めて新田先生に相談したほうがいいかもしれませんね。これ以上は私では力になれそうもないので。」

「いえ、ありがとうございました。」

「いいえ、どういたしまして。それじゃあ、私はこれで。」

「はい、気をつけて帰ってください！」

彼女と別れた彼は少しの間悩んだが新田先生に相談するために職員室に向かった。

「それでネギ先生、相談したい事とは？」

「あのですね…。」

ネギは学園長からもらった課題のこと、クラスの学習意欲を上げる事に悩んでいる事を全て話した。

「なるほど学園長も教育実習生に難しい課題を出される。」

「生徒にもいろいろ聞いたりしたのですけれどもいい案が浮かばなくて。新田先生に相談したらと言われてきました…。」

「ふむ、そのような事なら、最初に私や高畑先生は今はいないから弓先生に相談してくれればいくらでも力になれましたよ。」

「でも、僕に出された課題なので僕自身の力でしなくちゃいけないと思うて。」

「確かに出されてすぐに来るのは感心しませんが、ネギ先生もいろいろ考えてそれでも難しいと判断されたのでしょうか？」

「はい。」

「なら、誰かに相談する事は悪い事ではないですよ。どんな仕事でも一人でできる事なんてたかが知れています。だからこそ皆で協力しないといけないのですよ。ネギ先生は確かに頭はよろしいでしょうが、まずは人に頼る事も覚えたほうがいいかもしれませんね。」

「人に頼る事…。」

「はは、歳をとると説教くさくなってしまいますな。ですが、一人するよりも力を合わせたほうが何倍もいい結果が出るものですよ。さて、この話はこれくらいにして弓さんと2 - Aについて話し合いますか。」

「はい！（人に頼る事、みんなで力を合わせればか。）」

その後は3人で2 - Aがどうすればやる気上がるか相談したが、それとは別にネギは学園長が追加で出した課題の答えを見つけてくることができたようだ。

そして、テストが終わり2 - Aは毎回テスト後の順位発表で毎年と似た順位ではあったが、3人で相談したやる気上げる作戦がよかつたのか前に比べてテスト前1週間は今までと違い全員真剣に取り組んでいた。

これなら次のテストは期待できるかもしれない。と新田先生も言っていた。

そして、ネギは学園長室に呼び出され課題の回答と結果を聞きに来ていた。

「それではネギ君。ワシが問うた立派な魔法使いにとっても重要な事とは何かわかったかの？」

「はい、それは協力する事です。今回の事で一人ができる事は限られているわかりました。ですが、力を合わせれば自分ひとりではできない事もすることができ、よりいい結果が出す事ができます。立派な魔法使いを目指すなら仲間と協力することが重要です！」

「うむ、お主は優秀ゆえに今まで人に頼ったことは少ないじやろうからの。じゃが、今回のように自分だけではどうにもならぬ事もある。しっかりと感じるのには、まだ多くのことを経験せねばならぬだろうがの。」

「はい！」

「うむ！君が正式な教師になっても問題は無かるう。後日、正式な書類を送ろう。来年度からもよろしく頼むぞ。」

「はい！ありがとうございます！」

こうしてネギは正式な教師となる事ができた。まだまだ未熟だが彼の教師生活は続いていく。



「それである話は載ってくれるのかい？」

そこではとある話し合いがおこなわれていた。

「確かに魅力的ではあるがその対価がピエロを演じると？ばかばかしいアレにそこまでの魅力は感じんな。」

「どうやら交渉は難航しているらしい。やる事と対価がつりあっていないと拒否されている。」

「君もなかなか強情だね。呪いが解けるかもしれないのだよ？」

「ふん、それとて可能性の話しだろ？話しにならんな。」

「なら、取って置き情報が有るけれどそれたならどうだい？」

「ほう。半端なものじゃないだろうな。」

「いいや、君ならきつと知りたいはずさ。……の情報だよ。」

「なに！」

よほど驚いたのだろう。座っていた椅子から立ち上がり相手に詰め寄っていく。

「どんな情報だ！言え！！」

「それを言ったら報酬にならないじゃないか。まあ、ほとんど正解だけど君が望む情報である事は確かだよ。」

「なん…だと…。しかし、奴は…。ありえん。あいつだって一言も…。」

思い当たるようだが信じられないのか動揺し何度も否定の言葉をつぶやいている。

「彼女が持っている情報と僕が持っている情報は必ずしも同じじゃないからね。この情報だって裏は取れているよ。君が納得する形で提示する事だってできる。」

矢継ぎ早で提示される情報に対する自身に彼女は……。

「よかるう、演じてやるう。」

「おお！本当かい！？」

「だが、情報がいんちきるときはわかっているだろうな！！」

「そんな事は無いから安心してくれ。作戦はこっちで立てるがそれでいいかい？」

「しゃくだが、いいだろう。せいぜいボウヤに私の怖さを見せ付け

「るのだな！」

「じゃあ、僕はこれで失礼するよ。詳しい内容が決まったらまたお邪魔するね。」

交渉がまとまりその人物はその建物から出て行った。

< やあ…、交渉はうまくいったよ。作戦は今度はなすから。え？危なくないかって？大丈夫だよ。彼にも協力してもらおう予定だから話しておいてよ。 >

主に交渉が成功した事を告げる口調は成功した事を誇っているからなのか、どこと無く楽しそうだ。

## タカミチの決断と試験と（後書き）

明日菜のこととネギの試験でした！

ちよいちよい介入してたりするのでイベントが無くなったりしてますw

試験の部分はネギ方面だけだったのであっさり終わってしまいました。

指導内容まで考え付きませんでした…。

2-Aので動きも短編でいつか上げたいですね。

そして交わされる秘密の交渉（笑）！

まあ、誰だかわかるとは思いますw

次回からはエヴァ編です！

ここはとばさずにしっかり書いて行こうと思っています！

小ネタコーナー

「ははははは！まさかあいつがな…。まだ確定はしてないが今夜は旨い酒が飲めそうだ！」

あるはずが無いと思っていた事実には彼女は大いに喜んでいて。

「ふふふ、間っているよボウヤ！せいぜい舞台の上であがいてみるのだな！」

彼女のテンションは天井知らずに上がっていきそれを見守る影もまた

「ああ、マスターがあんなに喜んでいる。」

おのが主人の喜びを我ことのように喜んでいた。

もつとも後々、実際はとんでもないペテンに引っかかっていると知って激しく落ち込んでしまうのだが。

桜通りの吸血鬼(前書き)

エヴァ編スタート!

## 桜通りの吸血鬼

4月それは学校関係者にとって新たな一年の始まり、ここ麻帆良でも始業式や就任の挨拶がおこなわれていた。

その一角の女子中等部でもまた、今年度より正式な教員となる人物の就任の挨拶がおこなわれようとしていた。

「それでは本日より中等部担当教員になりますネギ・スプリングフィールドさんから挨拶を。」

「はい！皆さん本日から教員になりましたネギ・スプリングフィールドです。先月まで教育実習生だった未熟者ですがこれからよろしくお願いします！」

ネギのお辞儀と同時に割れんばかりの拍手が起こり、教員・生徒関係なく彼の就任を祝福していた。

拍手が一段落したのを見計らい司会が次の連絡事項を読み上げた。

「なお彼は昨年担当したクラスに副担任として配属されます。担当教科は英語を任せます。」

その後も滞りなく始業式は進み、閉会のあとそれぞれのクラスで残りの行事を行っていくた。

「「「「「3年A組み弓先生&ネギ先生!!」「「「「「

ここ2・A改め3・Aでも新年度の挨拶が他と同じように。……  
いや、いつもの倍以上の勢いでおこなわれていた。

「みんなと一緒に入れるのは今年で最後だからこそ多くの思い出を作っただろう。」

「皆さんのおかげで正式な教員になれることができました。今年いっぱいですがよろしくお願いします。」

「「「はい!よろしくお願いします!!」「「「「

挨拶を終え、これから1年の事を思いもつともつと生徒のみんなと交流を深めていこうとネギが思っていると。

(あれ、なんだか強い視線を感じるような?)

ふと、誰かに強く見つめられている気がしてその気配をたどってみると、廊下に面した列の最後尾の生徒と目があつた。

すぐに逸らされたが、目が合った瞬間に言いよつた無い不安に襲われた彼は慌てて名簿を開き、問題の生徒を確認した。

(あの子は……出席番号26番のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさん。タカミチのメモには困ったときは頼れって書いてあるけれどどういふことだろう?それにさっきのあの感じは……。)

と思索している。



「ネギ君、この後は身体測定だから私達は外で待機してようか。みんなは服を脱いで準備をしてくれ、そろそろ担当の教員が来る頃だから遅くならないように。」

「あ、はいわかりました。」

「……は……い！」

今日は始業式と同時に身体測定などもおこなう事になっていた。弓はネギを促し外に出ようとしたところで。

「先生え、見ていきますう？」

「え！ええ！！」

「こらこら、大人をからかうもんじゃないよ。それに年頃の娘が冗談でもそんな事は言っではいけないよ。」

生徒からのちょっとした悪ふざけで弓はやっぱり注意したが、なれてないネギは混乱してしまっていた。

男二人が出て行った教室内では。

「ネギ君はからか以外があるわね。」

「この一年楽しくなりそうね。」

「弓先生も頼もしいし心配事は無いわね。」

と2人について話していると

「あれ？今日マミさんは？」

「……さあ？」

「そういえばいないね。真面目な彼女にししては珍しいね。」

「何で休んだのか心配だけれど、あの戦力を見ないですんだ事は…。」

「まき絵胸ぺったんこだもんね！」

「風香ちゃんには言われたくないよ！」

と来てないクラスメイトを心配しつつもそこからそれた話で盛り上がっている。

「ねえ、ところでさ。最近寮とかで流行っているあの噂どう思う？」

「え？なによそれ柿崎？」

「ああ、あの桜通りの噂？」

「えー、何の話？」

「何の話や？」

話しは最近広まっているある噂に移った。

「あんまり知られてないのかな？春休みくらいから出てきたんだけどさ。満月に近い夜に桜通りで出るんだってさ。」

「出る？」

「暗い服を着た正体不明の人物がさ……。」

「え！？それって変質者じゃ……。」

暗がりになんな格好だと変質者ですね。

「それが人間かも怪しいんだって背格好もバラバラですごいのだと男性と女性の声が同時に聞こえたりとか。」

「ええー！なにそれ！」

「ただ、血をよこせて言ってるみたいで、吸血鬼かもって言われているの。」

「へえー。」

「ママちゃんもその吸血生物に襲われたのかな？」

「いや、吸血生物じゃなくて吸血鬼ね。」

ちなみに彼女の想像図はチュパブラで吸血鬼どころかUMAか宇宙生物じゃないだろうか？

そんな友人たちの吸血鬼話を聞いていた明日菜は

「も〜、そんな噂デタラメに決まってるじゃない。アホな事言っ  
ないで早く並びなさいよ。」

とさっさと身体測定を終えるよう促したのだが。

「そんな事言っ  
て明日菜も怖いんでしょ〜」

「違うわよ！それにあんなの日本にいるわけ無いでしょ〜！」

すでに黒板に吸血鬼予想図（チュパカブラ図）が書かれており手  
遅れの状態だった。

（ん…？待てよ、魔法使いもいるんだから吸血鬼がいたっておかし  
くは無いかも…？）

少し前に判明した魔法使いの少年と彼が巻き起こしたトラブルに  
何回か巻き込まれたため吸血鬼の存在を考えていると。

「そのとおりだな神楽坂明日菜。」

普段滅多にクラスの話しに入ってこない人物から声をかけられた。

「噂では吸血鬼はお前のようなイキのいい娘が好みらしいからな。  
十分気をつけることだな。」

「え？は、はあ…。」

ただ、普段全く接点が無い人物から思わぬ忠告を受けたが、あま

りに突然だったため気の無い返事をするのがやっとだった。

同じ頃、廊下のネギは不思議な感覚を捉えていた。

だがそれが何かを捉える前に彼の生徒が大慌てで駆け寄ってきた。

「せ、先生！大変や！マミが、マミが……！」

ここにいない生徒に何かあったのか、名前を叫びながら駆け寄ってきた生徒にまず落ち着くようにと弓が話しかけようとしたときに。

「何！マミに何かあったの……！」

友人思いが多い3-Aの面々が扉を開けて事情を聞こうと出てきた。

……………下着姿で。

#### 麻帆良女子中等部保健室

あのあと制服を着てから保健室に来るよつに言い、ネギと弓は先に保健室に移動し事情を聞いていた。

「それでマミ君はいつたい？」

「どうも桜通りで寝ているところを発見されたようね。」

マミには外傷も無くぐっすり寝ているため遅れて到着した友人たちは。

「甘酒でも飲んで寝ちゃったのかな？」

「マミはたまにぼやっこしてすることもあからなあ。」

と深刻にはネギはとあることに気がついていた。

(違う…。これはほんの少しだけれど魔法の力を感じるぞ。でも、  
どういうことだろう？僕以外にも魔法使いが？でもそうだとしても  
何でこんなことを…。)

「ネギ」

マミからわずかに漂ってくる魔法の気配、それが意味するところ  
を考えていると。

「ちょっとネギ。なに黙っちゃってるのよ？」

魔法バレ以降なんやかんやで親しくなった明日菜がいきなり黙っ  
て考え込んでしまったネギに声をかけてきた。

「あ、はい。すみません。」

「どうしたんだいネギ君？何か気になることでもあったかな。」

「いえ、何でもありません。あ、弓先生。僕今日は帰りに寄りたい所ができたので帰るのは遅くなると思います。」

「そうか、わかったよ。晩御飯はどうするかね？」

「いえ、外で食べてきます。」

「？」

弓はネギの答えに納得したようだが、明日菜は何か引っかけたのか難しい顔をしている。

そのあとは保健室で騒ぐわけにもいかず、中断していた身体測定をするために教室に戻っていった。

ネギは最後にマミを見て何かを決意したかのような顔をして最後に出て行った。

そしてそれを確認して、笑みを浮かべるものが…。

日が落ち月も出てきた時刻、一人の少女が寮への道を歩いていた。

少女 宮崎のどか は先ほどまで友人たちと一緒にいたが、友人たちは買い物をして帰るといい彼女だけ先に戻っているところだ。

「フンフン あ、桜通り…。」

視界の先に寮の屋根が見えてきたところで彼女はここが教室で噂されていた桜通りということに気がついた。

「風強いですね。ちょっと急ごうかな。」

怖さを紛らわせるために独り言を言いつつ足を速めた。

時折、風が吹きそのたびに驚いていたがすぐ側でひととき大きな音がしたのでその方向を見てみると。

「27番宮崎のどかか。悪いが血を少し分けてもらおう。」

ボロボロのマントを羽織った小柄な人物が街頭の上に立ち先ほどの言葉をつぶやいた。

「キヤアアアアアッ！」

あまりの事態に叫び声を上げたが、吸血鬼はそれにかまわず彼女に襲いかかるうとして。

「待てー！」

聞き覚えのある声を最後に彼女は気を失った。



「僕の生徒に何するんですかー！」

マミから感じた魔法の気配と噂が気になって、桜通りで見回っていたネギが杖にまたがり、今まさに襲われそうになっている生徒を助けるために詠唱しつつ間に割って入った。

「魔法の射手・戒めの矢！」

捕縛用の魔法を放ったが。

「ふふ、しつかりと来たか。氷楯…。」

魔法の射手は全て吸血鬼と思われる人物が出した氷の楯で弾き返された。

「僕の呪文を全部弾き返した！（やっぱり犯人は…。）」

「くっ…。」

魔法の射手は確かに全て弾く事ができたが、その余波が吸血鬼の帽子を飛ばした。

「驚いたぞ、凄まじい魔力だな。」

指にも傷を負い年齢にあわない魔力量に驚く吸血鬼の顔は。

「君はうちのクラスの…。エ、エヴァンジェリンさん！」

朝自分に視線を投げかけていたであろう生徒、エヴァンジェリン

であった。

「ふふ、新学期に入ったことだし改めて歓迎のご挨拶といこうか？  
先生、いやネギ・スプリングフィールド。それにしても10歳にし  
てこの魔力。奴の息子なだけはあるな。」

(え…。)

エヴァが言った言葉に動揺しつつも、彼は彼女へと。

「な、何者なんですかあなたは！僕と同じ魔法使いのくせに何故こ  
んな事を！」

子供の頃から立派な魔法使いである父親に憧れ、魔法学校でも魔  
法は世のため人のために使うものだと思われてきた彼には彼女の  
行動が理解できないでいた。

「この世にはいい魔法使いと悪い魔法使いがいるってことだよ。ネ  
ギ先生。氷煙！」

バン！

彼女が呪文と共に投げた魔法薬にとつさに防御に入ったが、幸い  
ただの煙幕だったようで彼にもものどかにも外傷は無かったが。

「なんや今の音！」

「あ！ネギ。」

今の音を聞きつけて心配になって戻ってきた彼女の友人たち 明

日菜とこのか が近寄ってきて彼を発見した。

そして今現場は煙に覆われていてエヴァの姿は彼女たちからは確認できず、確認できるのは気絶したのどかを抱える彼。

「ネ、ネギ君が吸血鬼やったんか!？」

「違います誤解ですー!」

原作のように服が破損していないとはいえ傍目にはまるで彼がのどかに襲い掛かっているようにも見えた。

「って、こんな事してる場合じゃなかった!」

すでにエヴァは煙にまぎれて撤退しており、まだ魔法で探知できているがこれ以上はなれると完全に見失ってしまう可能性があった。

「すみません、宮崎さんをお願いします。僕は彼女を襲った犯人を追いかけます!」

明日菜たちが事情を聞こうとしたが、ネギはすぐさま風の魔法でエヴァを追うため駆け出していった。

「なんでエヴァンジェリンさんはこんな事をしているんだろう?それ...。」

エヴァを追跡するネギは何故エヴァがこのような事をしているの

か、そして…。

（彼女は奴の息子っていつていた…。もしかしてお父さんの事を知っているのかな？）

先ほどの彼女の言葉からもしかしたら探している父親の情報を知っているのじゃないか。

そんな考えが頭をよぎったが、今は彼女を捕まえることが先決と頭を振りそんな思いを振り払って前を見据えたとき。

「いた！」

前方にエヴァの姿がぼんやりとだが見えてきた。

「まてえ！止まってください！」

少しずつ近づいてきて、後もう少して彼女を捕まえる事ができそうな距離になったときに。

「あー！」

エヴァは突如走っていた橋の欄干から外へと身を投げ出し、羽織っていたマントで飛行し逃走経路を陸から空へと移した。

ネギもすぐに杖にまたがり追跡を再開したが、違和感を感じ始めていた。

（杖も筭もなしに飛ぶなんてただの魔法使いじゃないぞ…。でも、凄腕の魔法使いのわりには感じる魔力は少ないし、さっきの魔法も

魔法薬を補助に使っていたしなにか変だぞ。」

杖や箒の補助無しに飛行できるのに魔法の発動は魔法薬を補助に使ったりといった、エヴァのちぐはぐさが気になるが先ほど少し離された距離も追い上げる事ができた。

「まちなさーい、エヴァンジェリンさん！何でこんな事するんですか、先生としても許しませんよ！」

エヴァに対して再度止まるように声をかけたが。

「はは、先生は奴の事を知りたいんだらう？奴の話しは聞きたくないのか？」

返ってきた返事はネギの父親についてだった。

「私を捕まえたら教えてやるよ！」

(！！)

あまりにも露骨な挑発だったが父親に関する手がかりが何としても欲しい彼は。

「…本当ですね。」

その言葉にエヴァは笑みで持って返答とした。

その後、空中の逃走劇は風の精霊を囿に使い、武装解除でエヴァのマントを散らした事で決着がつき今はとある建物の屋根で向かい合っている。

「こ、これで僕の勝ちですね。約束どおり教えてもらいますよ。何でこんなことをしたのか、それに…お父さんの子とも。」

そう、ネギは勝利宣言をし約束どおり理由と父親のことを言うようにエヴァに言った。

ちなみにネギはできるだけエヴァを見ないようにしているのだが、その理由は武装解除のときにマントどころか衣服も消し去ってしまったからだったりする。

「ふふ、勝利宣言には少し早いんじゃないのか？」

「な！魔力も無く、触媒もマントも無いあなたに勝ち目はありませんよ！素直に…。」

絶体絶命であるはずなのにいまだに自信たっぷりな態度に素直に投降しろといっている最中に。

「それにこの国のことわざで勝負は下駄を履くまでわからないというものがあるぞ。」

ズシヤア！

その言葉とほぼ同じくらいに彼女の背後に新たな人影が現れた。

「さあ、お前の得意の呪文を唱えてみるがいい。」

(新手！仲間がいたのか、仕方ない二人まとめて！)

その言葉に答えるように捕縛用の魔法の詠唱に入った。

「ふ…。」

そしてあと僅かで魔法が放たれようとしたときに。

「サギッ…」

ぴしっ

あいたっ！

おでこにそれなりの衝撃が襲いかかったせいで最後の詠唱が言えず不発に終わってしまった。

「あたた？」

いったい何がと思いおでこをおさえながら打撃 でこピン をした人物を見ると。

「え！あれ！？君はうちのクラスの…！」

「紹介しよう私のパートナー。魔法使いの従者、絡繰茶々丸だ。」

「え…なっ！えええー！？茶々丸さんがあなたのパートナー！？」

現れた人物がまたも自分のクラスの生徒だった事と、さらにはエ

ヴアのパートナーだといった発言にネギは驚きの声を上げた。

「ふふ、パートナーのいないボウヤはこれでもう勝てんぞ。」

「な！パートナーがいなくなつて！」

その言葉に、たとえパートナーがいなくても勝てると魔法を放とうとしたのだが、ことごとく詠唱中に妨害され全て不発に終わってしまった。

ネギも魔法使いの従者の事は知ってはいたが、それは結婚のプロポーズや伝統としての物と思っており本来の戦闘時での役割については全く教えてもらっていない。

魔法世界ならともかく、こちらの世界で魔法学校の卒業生くらいの年齢の子供が戦いに巻き込まれる事などまず無いため魔法学校では教えていなかったのだ。

戦場に行くときなどは必要になるが、その時は周りが教えるだろうからと本来の役割については教育課程に入っていない。

もつとも、そんな事は現在進行形でピンチのネギには何の慰めにもならず、茶々丸に羽交い絞めにされエヴァから彼女が真祖の吸血鬼である事、自身の父親が彼女にかけた呪いの事、その呪いにどれだけ苦しめられているか、解呪にはネギの血液が大量に要ることを話された。

そして今は解呪のためにと血をすわれている。

絶体絶命のピンチにパートナーを作っておかなかつた事を嘆いて



いると。

「カラー！その変質者ども！うちの副担任に何するのよ！！」

ずっと追いかけてきた明日菜の飛び蹴りがエヴァと茶々丸に当たる瞬間。

ガシ！ブン！

「え！」

また新たな人物が出現し明日菜の足を掴んで来た方向に投げ返した。

（えええ！また新手が！！）

2人でもまずいのにも3人目が現れた事に、ネギは諦めるどころか絶望しかけたが。

「何を遊んでいるエヴァンジェリン？今夜は顔見せだけのはずだぞ。」

「ふん、まさかここまでうまくいくとは思わなかったのな。少々味見をしていたところだ。」

「え！ちょっと何がどうなってんの！！ネギを掴んでるのはうちのクラスの子だし。あきらかに不審者っぽいやつも出てきたし！」

事態が飲み込めない明日菜は混乱していたが、実際3人目はロブに身を包み仮面をかぶっておりどう考えても怪しい、さらに声も

低音と高音が混じった不思議な声をしておりあまりにも不気味すぎた。

「そろそろ時間切れだ、撤退するぞ。」

「ちつ、しょうがないか。命拾いしたなボウヤ。それに神楽坂明日菜。」

「まさかあんたたちが犯人だってわけ！？そんなあきらかに不審者と一緒にいるし、子供はいじめているし。答えによつてはただじゃおかないわよ！！」

勝手に話を進める2人に問い詰めようと声を荒げた明日菜だが、問題の2人は明日菜を無視しさらに言葉を続けた。

「じゃあ、月の綺麗な晩は気をつけておくんだな。」

その言葉を最後に3人は屋根から飛び降り姿をくらました。

そのあとは恐怖の一夜を体験したネギをあやしたり、今夜自分たちの部屋にネギを止める事を連絡したりと一波乱あったが。

この日、エヴァンジェリンとネギの戦いが幕を開けた。

## 桜通りの吸血鬼（後書き）

エヴァ編第1話でした！

いろいろ、バレバレな人も出てきたりはしてますがこの調子でいき  
たいと思いますw

次回はカモ君登場かな？襲撃あたりまでいけるかな？

小ネタコーナー

「出だしはまずまずかな。」

とある建物の屋根の上。そこから先ほどの一件を監視しているもの  
が。

「しかし、彼がああの調子だと少しまずいな。少しばかり挺入れ必要  
かな。」

結果にはそれなりに満足はしたようだが、そのあとの事から今後の  
予定に問題がでかねないとするべき手段を考えていると。

「この情報は……。ふむ、使えそうだね。僕も少し表で動いたほう  
が良さそうだな。」

次の手が決まったらしく、瞬く間に姿を消し行動を開始した。

まだまだ、ネギに降りかかる災厄は続きそうだ。

感想・ご意見お待ちしております！

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4745x/>

---

真ネギま マギカZ

2011年11月28日00時46分発行